FSK
2007

はいまつ第12号

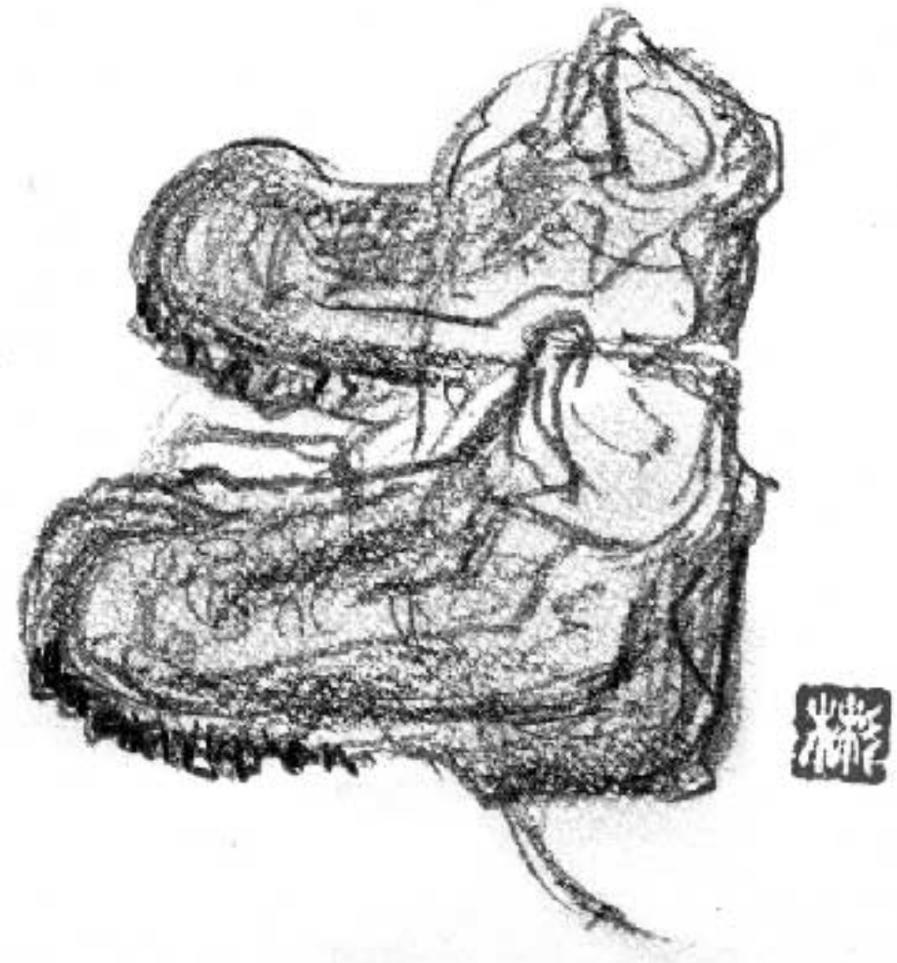
例会山行4000回達成記念

福山山岳会

はいまつ

第12号

例会山行*4000*回達成記念
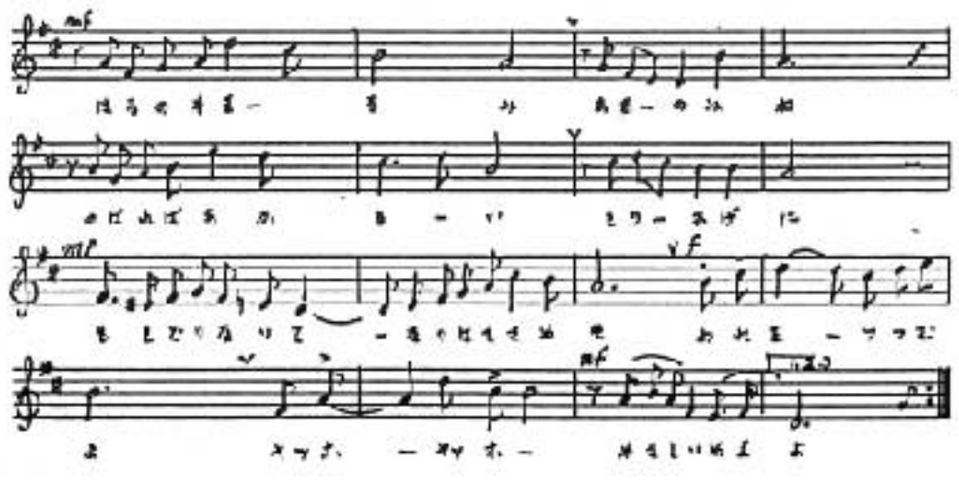


福山山岳会



静寂

福 山 山 岳 会 会 歌

詞：松 田 芳 昭
曲：川 原　 浩



福山山岳会会歌

一、
春の山なみ　秋の峰
登れば明るい森かげに
もも鳥鳴いて　霧はささやき
われを包むよ　ヤッホーヤッホー
やさしい山よ

二、
夏の山なみ　冬の峰
たどれば険しい谷底に
しら雲わいて　滝はとどろき
われを包むよ　ヤッホーヤッホー
雄々しい山よ

三、
朝の山なみ　夕べの峰
暮れれば露ふる草原に
たい松消えて　しじまはかえり
われを包むよ　ヤッホーヤッホー
いとしい　山よ



2007年2月25日 草創記念

第一章　例会山行4000回達成記念行事 …… 6

例会山行4000回達成を祝して　福山市長 羽田　皓 …… 7

祝辞 ―― 広島県山岳連盟 名誉会長 種村 重明 …… 8

例会山行4000回を祝す　福山山岳会会長 福原 不二雄 …… 9

例会山行4000回達成記念行事フォトアルバム …… 10-12

緑町リレーマラソン ―― 山内 充人 …… 13

福山山岳会　例会山行4000回達成登山

佐藤 茂利雄 …14

天坪 幸子 …… 14

岩室 政俊 …… 15

楢原 恵子 …… 15

写真展 ―― 江種 幸男 …… 16

福山城清掃 ―― 小林 征三 …… 17

富士山頂で山行4000回を祝う ―― 平松　携　18-19

C.W.ニコル氏講演会「森から未来を見る」…… 20-21

C.W.ニコル氏講演会 ―― 大田 祐介 …… 22

記念登山・祝賀会 ―― 小林 征三 …… 23

4000回達成によせて

福山山岳会の遺訓 ―― 小土井 薫計 …24

4000回達成に想う ―― 河崎 忠昭 …… 25

「団塊世代」の第4000回 ―― 三好 行平 …… 26

蔵王山へのオマージュ ―― 高橋 進次 …… 27

心は現役 ―― 藤井　繁 …… 28

先輩の功績 ―― 福原 不二雄 …28

第二章　山への想い …… 29

山懐の譜 ―― 藤井 キヨ子 …30-31

山の四季 ―― 江種 幸男 …… 32

俳句と短歌 ―― 山本 マチ子 …… 33

山からの便り ―― 藤井 キヨ子 … 34-35

第三章　福山山岳会の活動 …… 36

会報とは ―― 会長 福原 不二雄 …… 36

活動の記録 …… 37-39

指導部を担当して ―― 小林 征三 …… 40

会計を担当して ―― 世良　元 …… 40

新人研修を担当して ―― 藤田 昔三 …… 41

運営部を担当して ―― 三藤 敬子 …… 42

ホームページを担当して ―― 高垣 隆光 …… 43

事務局を担当して ―― 江種 幸男 …… 44

はいまつ 歴史寿ぐ ―― 小土井 薫計 …44-45

第一回福山市民ウォーキング
（里山歩き）大会 ―― 小林 征三 …… 46-47

柏餅今昔 ―― 石井 裕子 …… 48

子供や孫と行くキャンプ ―― 藤谷 操枝 …… 49

福山市民雪原ウォーキング ―― 赤松 勇二 …… 50

緑化功労賞を受ける ―― 福原 不二雄 …… 51

「コースガイド80」ガイドブック
誕生の歩みの記録 ―― 萩原 有朋 …… 52-53

写団福岳 ―― 斎藤 楠輔 …… 54-57

第四章　山と語らい、山に想う …… 58

大山遭難事故 ―― 小土井 薫計 …… 59

厳冬の大山北壁 ―― 平松　携 …… 60-61

山歩きの楽しさに出会った私 ―― 野田 道子 …… 61

里山あれこれ ―― 小土井 薫計 …62-64

私の入会 そして再開 ―― 山内 充人 …… 65

山仲間のHさん ―― 上原 寿美子 …… 66

山と歴史のロマンをたずねて ―― 綿谷 弘志 …… 67-69

蔵王山と私 ―― 田中 安雄 …… 69

頭注意 足元注意 ―― 栗村 繁允 …… 70

山越えの熊野古道 ―― 門田 敏昭 …… 70-71

四国八十八ヶ所
歩き遍路 同行二人 ―― 瀬良 悦男 …… 72-75

郷愁 ―― 山本 マチ子 … 76-77

花との出会い ―― 北村 道子 …… 78

“変形性関節症だった”考 ―― 藤井 和之 …… 79

生涯現役「山で死んでもいいのでは」 福原 不二雄 … 80-81

私の山岳会でのあゆみ ―― 上原 寿美子 …… 82

一歩の力 ―― 南　妙子 …… 83-84

坊ガツル賛歌 ―― 平松　携 …… 84-85

登らざる弁 ―― 高橋 進次 …… 86-87

第五章　高みをめざして、極限への挑戦 …… 88

パルチャモ登頂記 ―― 黒飛 晴光 …… 89-92

北アルプス穂高連峰縦走 ―― 妹尾 英明 …… 93-95

長次郎谷から剱岳へ登って ―― 原田 千枝子 …… 96

初めての剱バリエーション
源次郎尾根 ―― 川脇 喜美代 …… 97

北八ヶ岳縦走記 ―― 妹尾 英明 … 98-100

鷲ヶ峰（高岳北尾根）登山報告書 – 福原 不二雄 101-102

二ツ岳～赤石山縦走の記 ―― 越智 修三 …103-106

浦島太郎の白峰三山縦走 ―― 小林 浩二 …106-108

憧れの穂高連峰は
白いガスに包まれて ―― 湯越 道江 …109-110

白峰三山縦走登山 ―― 久保　敏 …111-112

六甲全山縦走を終え ―― 石井 裕子 …113-114

NHKハイビジョン番組 ―― 福原 不二雄 115-117
「瀬戸内海 国立公園編」に出演して

C.W.ニコル氏講演会に御協賛いただいた方 …… 118

第六章　年表・記録 …… 119

福山山岳会会名の変遷 …… 120

福山山岳会歴代部長及び最近の役員 …… 120-121

部報・はいまつ（会誌）発行状況 …… 121

福山山岳会　会員受賞一覧 …… 122-123

例会山行一覧表
平成5（1993）年から平成19（2007）年まで …… 124-147

編集後記 ―― 綿谷 弘志 …… 148



第一章　例会山行4000回達成記念行事



大休峠

4000回記念事業

4月20日	リレーマラソン（緑町公園）	山内 充人
6月17日	4000回達成登山（八世似山）	佐藤 茂利雄
7月 4日～ 8日	写真展（ロッツ）	江種 幸男　斎藤 楠輔
7月 7日	福山城清掃	小林 征三　江種 幸男
8月18日～19日	富士山山頂で4000回を祝う会	平松　携　江種 幸男
8月24日	CWニコル講演会（リーデンローズ）	大田 祐介　小林 征三
8月25日	記念登山（熊ヶ峰）	小林 征三　川西 成美　世良 元　綿谷 弘志
8月25日	祝賀会（市民参画センター）	小林 征三　世良 元
	記念タオルデザイン	三好 行平

例会山行4000回達成を祝して



福山市長 羽田　皓

輝かしい歴史と伝統を誇る福山山岳会の例会山行4000回達成の偉業、誠におめでとうございます。

貴会におかれましては、1919年（大正8年）、剛健精神、登山道徳、自然愛護精神の高揚、人間関係の醸成を掲げ創立され、以来幾多の苦難と時代の変遷を経るなかでも、その精神は今日に至るまで活動の基底として継承されておられますことに、心から敬意を表する次第であります。

「生涯スポーツの時代」といわれております今日、アウトドアスポーツの多様化のなかにあって、優れた伝統を引き継ぎながら会員はもとより、広く地域住民の参加も得るなかで様々な活動を展開され、本市のスポーツ振興に多大なご貢献をいただいておりますことに、感謝を申し上げます。

自然を愛し、自然の雄大さに浸りながら、あるときは静寂の中に小鳥のさえずりを、またあるときは厳しい自然に耐え咲き誇る花々との出会いは、心が癒されまた多くの感動をもたらすものと思います。

会員の皆様には、目的達成と仲間との信頼、また絆を大切にしつつ今日まで活動して来られたことと存じますが、更なる目標に向かって邁進されますよう期待いたします。

終わりに、福山山岳会のますますのご発展と皆様方のご健勝を祈念しお祝いのことばといたします。

祝　辞



広島県山岳連盟　名誉会長　種　村　重　明

例会山行4000回達成おめでとう存じます。
あわせて「はいまつ」の復刊心からお喜び申し上げます。
貴会は広島でいちばん古い山岳会で、今年で88年、米寿を迎えられました。
皆さんはあと10年余りで100周年を祝うことになり、県山岳連盟としても御同慶の至りに存じます。

会の創立に努力された藤井与一右衛門氏の理念と行動とは、安全、安心登山を標榜したもので、代々それを継承して立派に運営してこられ、その結果貴会は文部大臣表彰、県知事表彰など多くの受賞をしておられます。

なお、昨年は福原不二雄会長、県体育功労賞受賞の慶事もありました。

広島県山岳連盟の第1回広島県登山体育大会は福山地区で開催され、以来県東部の活動の核として岳連活動に寄与されました。
昭和52年の全国高校総体、インターハイ広島をはじめ、全国自然公園大会、全日本登山体育大会、2巡目の広島国体とイベントが続き、日本山岳協会の自然保護委員会、遭難対策研究協議会など委員会、部会の主管、県内的には毎年の県登山体育大会、比婆山国際スカイラン大会、広島山の日県民の集い、韓国大邱広域市山岳連盟、同高校山岳連盟交流登山、昨年の宮島弥山会開創1,200年祭協賛登山などさまざまな事業に参加協力してくださいました。

福山は備後の中心として一つの文化圏を成して経済や文化、スポーツの面でも素晴らしい実績をあげてこられました。
その中で登山も高校生から中高年齢者に至るまで、貴会の指導のもと、登山の啓発、自然保護活動に努めてきておられます。

スポーツを好む人の中で、登山者ほど本を読み、記録をとるスポーツマンは少ないと思います。
登山者は山頂に立つことを最終の目標としますが、その結果だけを求めて国旗、クラブ旗を立て写真を撮ることだけにとらわれるのではなくて,そこに至るプロセスでの豊かな経験を記録しています。
「はいまつ」の復刊は大きな意味を持っていて、例会山行4000回の偉業とあわせて心からお祝い申しあげ、今後の更なる御活躍を念じあげます。

ご祝辞を頂いた種村氏は平成19年6月7日にご逝去されました。
心よりご冥福をお祈り申し上げます。

例会山行4000回を祝す



福山山岳会会長　福　原　不二雄

例会山行4000回達成おめでとうございます。
この偉業達成を会員および関係者の皆様とともにお祝いしたいと思います。
一口に4000回と言うけれども、毎週山行しても年間50回、それを80年続けて初めて達成可能な数字である。
如何に大変な数字であるかご理解いただけるでしょうか。
今日まで続けられたのも諸先輩の皆様のご努力の賜物と感謝しております。

実語教という教訓書に「山高きがゆえに貴からず、樹有るを以って貴しとなす」という文があります。
山は高いから価値があるのではなく、樹木がたくさん生い茂ってはじめて貴い、物事は見かけだけで判断してはいけないとの意味であります。

我会は大正8年2月創立、今年88年目を迎えます。
山に例えれば、広島県下、最高峰に位置づけられる存在であります。
しかし、我らが誇りとするは山の高さ、88年の歴年ではありません。
4000回という活動の軌跡であります。
連綿と続く例会山行の記録であります。
そして、その活動は活発で、いまなお進化し続けていることです。
我々は会員同士が登山を楽しむだけでなく、福山市体育協会の一員として、また福山市民のための山岳会として広く門戸を解放し、会員を受け入れるとともにホームページなどで活動状況の情報発信も行っております。
また、正しい登山思想の啓蒙、登山の素晴らしさを伝えるため市民参加の登山大会の開催や、登山道の整備、清掃、自然保護活動も継続して実施しております。

会の活性化は充実した山行を積み重ねることに有るとの考えからです。
そのため各リーダーは自分の特徴、個性を生かし、最高の山行となるよう工夫を凝らしています。
この会員各位の個性豊かな活動、里山から厳冬期の雪山登山まで幅広い登山活動が会の活性化の原動力となっています。
そして、更なる飛躍と発展を目指し、会員一同心新たに挑戦してまいります。

今日のこの隆盛をみるとき、これらは歴代会長はもとより会員諸氏をはじめ関係各位の献身的なご努力によるものであると、心より深甚なる敬意を表すものであります。
そして、これからも我々の活動を通じて少しでも明るい社会を築くことに貢献できれば幸いです。
なお、今後とも一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

例会山行4000回達成記念行事



2007年8月24日　C.W.ニコル氏講演会



2007年8月19日　富士登山



2007年4月20日　緑町リレーマラソン



2007年6月17日
例会山行4000回達成記念「八世似山」



2007年8月25日　祝賀会



2007年7月4日～8日　写真展



2007年7月7日　福山城清掃

緑町リレーマラソン



山内　充人

「乾杯」、参加者最長老の越智さんの音頭で始まった打ち上げ会、2チーム21名、雨の中だったとはいえ42.195km全員でたすきをリレーし、走りきった心と体の充足感でつつく焼肉とビールの美味しさは格別でした。

昨年から始められた『緑町リレーマラソン』今年は2回目、緑町公園遊歩道1周約1kmを1週で必ず交代し、42周＋195mを走ろうという大会です。
昨年募集案内を見、面白い大会だと思ったものでしたが、いよいよ今年は福山山岳会として参加しようという話になり、参加者を募集したところ21名の方の参加了承となりました。「1チーム21名では一人が2回しか走れず物足りない」との声もあり、2チームとしAチーム7名、Bチーム14名編成としました。大会当日、スタート順にゼッケンを配り、手元にはAチーム1番ランナーと最終ランナーのゼッケンのみ、1番ランナーゼッケンを大田さんに渡そうとしたところ、大田さんはスターター役とのことで、やむなく私が1番ランナーとしてスタートラインに着きました。各チーム精鋭を1番ランナーとしているらしく、あっという間に引き離され1周目ゴールしたときは前方にランナーの姿は全く無く、数百メートルの差がついていました（余り差がつきすぎていたので私自身どのくらいの差だったのか分かりません）。なんと気恥ずかしいことか…。でも後続のみなさんのリカバリー良く気を取り直しました。

走り始めてまもなく天気予報どおり雨が降り始め、びしょ濡れとなりながらも、誰一人止めることなく、全員で走りぬき完走、Bチーム最終ランナーにはゴール前から全員で伴走しお互いの健闘を讃え合いました。

打ち上げ会では参加者はもちろん、応援団からも「来年は参加したい」との言葉もあり、「来年も参加しよー!!」と盛り上がった次第です。



リレーマラソン参加者

石井　裕子	小林加代子	福原　不二雄	会員外
江種　幸男	黒飛　晴光	松高　慶宣	大島　克也
大田　祐介	高垣　隆光	溝部　幸恵	長島　秀樹
越智　修三	高松　仁道	村上　眞理	村上　龍意
木村　三郎	田辺　和憲	山内　充人	村上　智子
倉谷　一則	橋本　博明	湯越　道江	

福山山岳会　例会山行4000回達成登山



佐藤 茂利雄

今日は福山山岳会創立88年例会山行4000回目の山行となり、緊張の中、JR瀬野駅下車です。

山道に入れば、祝ってくれるかの様に落ち葉のジュウタン、緑の映える木立のトンネル歩行、ツツジ通りでは紅いツツジの花に出会い（4月には咲いてなかった）又4月には身の丈程の竹は見上げるように成長し、鳥の声（ウグイス等）県下最大級のヤブ椿、エノキの巨木、無風で汗が出ますが時折微風を受け、涼しさを貰い、終始驚き、感動の中を8名和やかに楽しく、皆無事に1919年2月23日第1回より2007年6月17日例会山行、第4000回目が、完歩達成出来たのも、皆様諸先輩方が培って来て下さった歴史のお陰と思います。

歴史の重みに感謝感激し、感無量です。

皆々様、大変有難うございます。





天坪 幸子

余り山の会で行くことが出来ない私に4000回が休みに当たり参加することができました。リーダーから感想文を書いてほしいと電話があり困ったなあ、と思いながら私が入会した頃毎月送られてきた「ちんぐるま」の中に、亡くなられた市川さんの追悼特別号「大観台の山人」を何気なく見ると、1日20里（80k）というコースを見てびっくり。入会して長い年月が過ぎていると感じています。

梅雨に入っているにもかかわらず、朝は涼しく今日はどんな1日になるだろうと思い電車に乗る。人数は8人と少なかったけど結構ワイワイにぎやかな1日になりそうな気がした。瀬野駅で記念写真を撮る。駅から少し歩いた所に中倉神社がありそこが登山口。いきなり急な上りが始まり、緑のトンネルをくぐりながら歩く、まるでグリーンシャワーの中にいるようだった。足元はフウフウ、上りも下りも急であったが変化が有り良い山でした。この山で知った木はホオノキ。ヤブ椿の下には幼木が沢山あったこと。里山にもいい山がある。山はしんどいけれど健康とストレス解消の為、山に行きます。一人では上れない山、リーダー、サブリーダー、参加者の協力があって楽しい山行きになりました。

個人で行く時は花を撮ることも楽しみにしています。

〈ちんぐるま〉

1985年5月～1992年5月の間、85号まで発行された通信紙「FSKタイムス(ちんぐるま)」の事。現会員の藤井繁・キヨ子夫妻が会員相互の親睦の一助になればとガリ版刷りで始めた月間新聞で、有志の支援もあり当時の会報に同封され多くの会員に愛読されていた。

八世似山　495.2m　2007年6月17日



岩室 政俊

福山から瀬野までの車中で、今日の例会が4000回と聞いてはじめて知りました。

これだけの歴史を持ち、毎週と言っていいほど例会を重ねている山岳会を自慢して良いのではないでしょうか。

私の場合、山岳会に入会して3年余りですが、山岳会との出会いは、彦山での看板でした。また、入会して最初の山行が百島の十文字山に参加したのを覚えています。最初は先頭に近いところを歩いていましたが、頂上近くでは一番びりで、言葉も交わせないような状態でした。その時、とにかく「体力をつけたい」と思ったのを記憶してます。

大阪から引っ越してきた関係で、福山、いや広島の地域というものを全く知りません。

今回の4000回を区切りとして、里山登山を中心に積極的に参加して、地域の自然に触れたいと思っています。

これからも例会が重ねられるよう、皆で頑張りましょう。



楢原 恵子

JR瀬野駅で下車すると、リーダーとサブリーダーが用意した例会山行4000回と書かれた垂れ幕を持って、8人が記念撮影をし、4000回記念（リボン・団扇・菓子袋）を一人ひとりに手渡してもらいました。

“そうなんだ　今日は福山山岳会、特別の日の登山に参加させてもらったんだ”と心に受け止めながらの登山が始まりました。

東中倉登山口から出発し、急登・小起伏の繰り返しの中、鉄塔を3基過ぎると前方下に転げ落ちそうになりながら、ロープを使ったりして慎重に下りることの繰り返し、汗はダラダラ、足はヨレヨレしながらも8人の胸中は、1919年2月23日の1回目の山行から2007年6月17日の4000回へと、リーダーの先導の下に、ひとつひとつの山を一歩一歩と積み上げて来られた先人の、汗と努力があればこその4000回を、今日の8人が引き継がせてもらっている現実に、気恥ずかしさと喜びで嬉し涙を流しながらの記念すべき登山が出来ました。

低山のコースながら、達成感の大きい山塊であった。有難うございました。



八塔寺ふるさと村

写　真　展
2007年7月4日から7月8日



江　種　幸　男

例会山行4000回達成記念行事が話題になったのは、平成18年10月の常任理事会だったと思います。
その行事の一つとして「写真展」の開催が決まったのが19年2月です。会場は何処にするか。開催日とか期間は、予算も問題でした。
色々検討した結果、会場はロッツ8階　ふくやま書道博物館　市民ギャラリーに決定、7月4日から7月8日の5日間に亘り「山の写真展」を開催する運びとなりました。
山岳会としての写真展は第4回となります。前回は絵画等の作品も展示しましたが、今回は写真に限って募集したところ会員50人による122点の力作が揃いました。
6月22日から24日で作品の受付、ポスター・チラシも作成し、7月3日現地で飾り付けを行いました。
いよいよ7月4日写真展がはじまりました。
報道機関も何社か来ました。芳名帳の中に、地元で有名な写真家の名前も数名見られます。
5日間の来客は延べ647名。まずまずの入場者でした。
「この写真の山は、昔、若い頃登ったことがある」とか、「この写真が好きだ」と具体的に意思表示される方、「撮影場所を教えてほしい」と言う人もいて、受付は大変でした。
大自然の美しさ、草花のことなどどれも好評で、多くの人達に感動を与えた写真展をやってほんとうによかったと思っています。
また、山岳会に興味をもたれ、会報を送ってほしいと数名の申し出があったり、入会申し込みの出た方もいます。
この写真展開催について出品頂いた方、作品受付から飾りつけ、期間中の受付当番等たくさんの会員の方々からお手伝いとかご協力を頂きました。厚く御礼申し上げます。



■準備作業



■ロッツエレベーター内



■会場



■写真仲間の長老

統括主務者
江　種　幸　男

サ　ブ
斎　藤　楠　輔

概要

1.開催場所:
ロッツ8F
市民ギャラリー
2.開催期間:
2007年
7月4日～8日
3.出展会員数:
50名
4.出展作品数:
122点
5.入場者数:
累　計　　647名
記帳者　約 300名

経緯

1.募集要項の公示
6月号　会報
2.作品の受付
6月22日～24日
於:中央公民館
3.展示準備
7月3日
4.撤去作業
7月8日

福山城清掃
2007年7月7日



小　林　征　三

福山山岳会創立88年目の今年平成19年6月17日、八世似山山行で例会登山4000回を達成した。
今年平成19年度中に、例会登山4000回は達成されるものとして年度始めにさまざまな記念の行事が計画された。
その一つに福山市のシンボルであり、JR新幹線より間近に見られる福山城天守閣の屋根の清掃を計画しましたが、福山市当局より天守閣の屋根は最近業者によって清掃したばかりとの事で、石垣の草取りと噴水の掃除を7月7日に行う事として当日の参加者を募集した。
5月26日、本番で石垣に登って草取りをしていただく女性の方4名に福山城石垣の登り、降りを想定して、蔵王岩場において練習を行い、その後も数回の特訓を行い当日に備えた。
福山城掃除の当日は生憎の雨にもかかわらず、福山市役所山の会の方4名を含め60名の参加者をいただいた。
天守閣前に8時30分に集合、会長の挨拶の後9時より石垣の草取組と噴水の掃除組とに分かれ、作業を開始した。
作業始めに降っていた雨も次第に止み、作業もしやすくなり石垣組、噴水組も作業は順調に進み、福山駅に出入するお客、道路を通る市民も作業を見ておられた。
11時30分に作業を終えて、4000回記念の記念品の手拭を参加者全員に配り記念写真を撮り解散した。
しかし会長以下数名の方はその後も1時間ばかり美術館側の石垣の草取りを続けられた。
福山城は元和5年（1619年）水野勝成公により築城されてから388年今日まで福山城をしっかり石垣が支えている。
福山山岳会も、福山市のシンボル福山城のごとく私たちの世代はもとより、次の世代、その次の世代と未来永劫に発展することを祈念します。





富士山頂で山行4000回を祝う

360度のパノラマ、雲海のかげ富士

2007年8月18日から8月19日



平松　携

富士山頂で山行4000回を祝う会を、福原会長から要請された。これまで富士山に20余年連続登っていることから、計画を練ってきた。この度、無事に登山を終えたので、富士登山の概略、参加要項の注意しておきたい事項、登山者の一言を添えて報告します。

（富士登山の概略）

福山山岳会創立1919年（大正8年）以来、4000回の山行達成を富士山の頂上において祝う富士登山でした。

日程は、2007年8月18日（土）4時45分　福山オート観光南蔵王車庫に4時45分、福山駅北口集合5時20分福山駅北口出発しました。12時20分頃浜名湖サービスエリアにおいて、バスのエンジントラブルで2時間のロスを生じました。代替え車で富士見宮口登山口（標高2,400m）に着き、登山開始は17時10分でした。登山開始から1時間30分くらいで日が落ちかけ、やがて暗くなりヘッドランプを付けての登山となり20時過ぎに富士見宮口八合目山小屋到着し、それから夕食を急いですませ仮眠です。

8月19日（日）2時30分山小屋から登山開始したが、登山者が多くて、5時頃浅間神社奥宮前にたどり着きましたが、5分ほど前にご来光があったようです。ご来光を拝むことはできませんでしたが、すでに昇った太陽を拝みました。19名が頂上に立ち記念写真を撮り、19名のうち14名がお鉢巡りを楽しみました。富士山最高峰（剣ヶ峰）3775.6mの石柱前において、めいめいの記念写真を撮る姿がありました。お鉢巡りは一段と頂上での華を添えました。それは眼下にひろがる雲海だけの南、かげ富士のかかる西、北アルプスのみえる北、太陽の方向の東と360度展望がひらけるパノラマ、雲海に浮かぶ「かげ富士」の遠方の南アルプスの嶺峰、膨大な噴火口に張り付く氷など圧倒される火口、ある人は噴火口の中に身を曝し人口（ダイナマイト）では富士山の爆発力はできないと、膨大な自然のエネルギーを語られました。富士山頂上の人波で混雑する通称「富士銀座」を通過し、浅間神社奥宮前に一巡したのは7時15分でした。

それから朝食を済ませ下山を始めて時刻は7時30分頃で、10時30分に富士見宮口下山口着きました。予定より1時間30分遅れた要因は、日曜日で登山者の多さで混雑が挙げられます。11時に富士見宮口下山口を出発してから、予定時刻の20時頃に福山駅に到着しました。

参加者は福山山岳会員17名、会員外の参加者は会員家族2名、男子中学生1名で合わせて20名でした。リーダーは平松　携、サブリーダーは江種幸男さんでした。福原不二雄会長、鈴木康仁元会長も参加されました。参加費は21,300円（バス代・山小屋宿泊費等を含む）でした。

（参加要項で注意しておきたい事項）

（1）富士山頂上は標高3,776mです。8月下旬は福山市より気温は20℃程低くなります。早朝の最低気温は5℃から0℃近くになります。また天候の変化は大きく晴天時でも必ずセーター、手袋、帽子、傘・カッパの雨具、懐中電灯、行動食、飲料水等を持参ください。標高3,000mを超えると予想以上に身体変化がおき、身体に負担がかかります。（2）弁当は、8月18日（土）の朝食、昼食を持参ください。なお、山小屋での夕食と、8月19日（日）朝の弁当は山小屋で準備していただきます。（3）事故のないように細心の注意を払いますが、事故が生じた時は応急処置のみしかできません。自己責任で行動願います。当方では事故の責任は負いかねますのでご了承ください。

（登山者からの一言）

（1）登山前に富士登山への期待や不安などの心境を書いていただきました。（記入順）

●江種幸男さん…4000回の記念行事にすべて参加しています。今回の富士登山では、お鉢巡りに期待しています。「かげ富士」が見られたらいいな。（サブリーダー）

●福原不二雄さん…何回も登ったがお鉢巡りは未経験、4000回に是非やりたいね。先週槍ヶ岳（3180m）に登り体調もよいはず、でもちょっと寝不足です。やらせて下さい、お願いします。（福山山岳会会長）

●小野美佐子さん…富士登山は入会して一つの目標でした。今回念願がかないました。期待と不安が入り混じった気持ちです。

●森山益収さん…京浜地帯に居た時には何時でも登れるは、と思って実現できなかったこの記念行事に参加できて幸運でした。全行程を無事にこなしたいと思っています。

●下角義明さん…富士登山にリベンジします。期待と不安が一杯です。

●橋本博明さん…以前、吉田口から登ったことがありますが、もう二度と登ることはないだろうと考えていました。今回、富士宮口からのチャンスをいただき喜んで参加させていただきました。

●鈴木康仁さん…10数年ぶりの富士登山です。古希も過ぎての71歳です。ビスタリー、ビスタリー（ネパール語の「ゆっくり」）で登ります。（元福山山岳会会長）

●中山満治さん…私たちの時代は、日本人として生まれたら、お伊勢参りと富士登山に一度は行きなさいと言われていました。いま実現でき幸福で胸がわくわくしています。ただ高山病と天気が心配だけです。よろしくお願いします。（76歳　今回の登山最高齢者）

（2）下山した後に、バスの中で富士登山の感想を次のように書いていただきました。（記入順）

●井口澄子さん…今回は夫婦で参加させていただき有難くお礼申し上げます。私はもちろん主人（井口政勝）も満足しています。それは天候に、そしてメンバーの皆様に恵まれ、ありがたく2日間を楽しみました。

●池田彰二さん…さすが富士山。2回目にして、このすばらしさは感動的でした。今後テレビで放映されたら今日の日を思い出し、苦労の末に喜びがあることを知りました。ありがとうございました。

●松高慶宣さん…前夜から心配された雲行き、夜明けと共に満点の星、素晴らしいご来光に雲海、又、360度の大パノラマの展望。最高の一日でした。

●坂本昭雄さん…私にとっては、3度目の正直で富士山が最高の姿を見せてくれました。4000回山行の記念すべき1ページに参加できて嬉しく思っています。

●南　妙子さん…満点の星空に励まされ頂上に立った時には、朝日に輝く雲海に感動しました。4000回記念登山は、生涯富士山の写真・絵・テレビ等で見る度に思い出す大切な宝物になりました。

●井上昌江さん…私は山岳会に入会して10年になります。今度富士山行4000回記念に参加でき本当にありがとうございました。リーダーさん、皆さんお世話になりありがとうございました。

●村上龍意さん…山行4000回の参加できたことがよかった。（中学1年生）

●金光俊輔さん…人生2回目の登山が富士山になったことにびっくりした。楽しかった。（中学1年生）

●村上眞理さん…10年ぶりの富士山でしたが、今回は子ども達との参加、自分も多くの事を学ばせていただきました。子ども達にはたいへん良い経験だと思っています。ありがとうございました。

●石岡勝吉さん…始めての富士登山、天候はもうしぶんなくとても楽しい登山でした。また、孫と登りたく思いました。

●平松　携…（登山前）事故なく福山まで、全員が無事に帰ることに気を配ります。富士山頂上での記念写真や参加者全員のコメントがいただけるか不安です。

（下山後）全員が事故もなく無事に下山終えたことに「安堵」しています。皆様方のご協力に深く感謝しています。

コンビニで買って飲んだ「ビール」が本当に美味しかったです。バスの中での心地よい「居眠り」でした。サブリーダーの江種さんお世話になりました。富士登山のみなさんお疲れでした。（リーダー）



富士山頂からのかげ富士



C.W.ニコル氏講演会

「森から未来を見る」

2007年8月24日

私の生まれ故郷はウエールズです。
少数民族のケルト出身です。
ウエールズは丘の広がる山国ですが、森は昔は帆船の材料やマキに、産業革命後は燃料、炭鉱の支柱、鉄道の枕木等のため伐採され続け国土の僅か5%しか残っていませんでした。
私の生まれた隣の谷は、アファンの谷と呼ばれていました。
アファンとは風のとおる森の谷間という意味ですが今ではボタ山と死の川で昔の面影はありません。
私は大きな自然に憧れ小さな英国を飛び出し冒険の旅に出ました。
北極探検、北極越冬隊に参加、犬ぞりの旅やカナダやアメリカにも行き、捕鯨船にも乗りました。
14歳から空手を習い、ウエールズ初の有段者になり、45年前空手を習うため日本に来ました。
日本食や納豆も刺身も酒も好きだが、汚い空気、騒音、多数の人間に疲れ果てたとき空手の師匠が言った。
「こいつを山に連れて行け」。
2年半、冬山や日本各地を歩きました。
かっての敵国人の私に誰一人としていやなことをしなかった。みんな親切でした。
びっくりすることも多かった。
この人の多い日本に熊がいる。イノシシがいる。
ウエールズでは熊は900年前に絶滅した。
ケルト人はイノシシが大好物と書物に書いてあったが400年前に絶滅した。
山奥の沢にはオオサンショウウオが、鎮守の森にはムササビがいる。
日本には豊かな森があるからみんな生き残っているのだと思いました。
27歳のとき、エチオピア国立公園の公園長にリクルートされました。
公園内の環境破壊者、山賊、密猟者と文字通り血を流して戦い自然を守った。
しかし、国立公園外は森の破壊が続いた。
「森がなくなれば水がなくなり、砂漠になる。生きられなくなる」といくら説得しても受け入れられなかった。
これではこの国は守れない。
やがて戦争と飢餓が人々を襲った。
私は失意の内に日本に帰りました。
日本は治安も良く天国のようでした。

山に入れば美味しい水があり言論も移動も宗教も自由、北には流氷が、南に行けばサンゴ礁の海がある。こんな素晴らしい国が世界のどこにあろうか。心の傷を癒すにはこの国しかないと思いました。
40歳のとき居所が欲しくなり黒姫に行きました。
そこには仕事仲間で友人の谷川雁さんがいる。
猟友がいる。熊も鷹もいる。
昔の日本と今の日本が両立した素晴らしい土地です。
しかし、その頃より自然を大切にしてきた民族がおおきくに変わりはじめた。
大木が次々と切り倒されはじめました。
何故もっと森にお金をかけないのか。
金だけが生きがいなのか。
絶望感におそわれはじめ、知床・白神各地で自然が破壊され、悲鳴の声に全国各地に応援に出かけました。
そんな時ウエールズから「アファンの森に日本の森を作って欲しい」との便りがありました。
「ちょっと待って、あのボタ山が森に?」



行って驚きました。
石炭産業が没落した一番苦しい時に日本企業が進出し、工場を立て、人々に仕事を与えてくれました。
ウエールズは森の民族です。
森に入ると心が癒されると信じています。
人々は森つくりに励みました。
あの荒廃したアファンの谷も豊かな森に変貌しました。
川も生き返り,サケも帰ってきました。
5%の森も60%に拡大しました。
私は「人の力により森は生き返る」このことに感動しました。



私は日本が好きだ。苦しいけれど日本を捨てられない。
日本に「アファンの森」を作ろう。
仲間とともに土地を買い、荒れた地に木を植え、健全な森に育てました。
元気な森、明るい森はは多くの動植物を育むことを知らしめよう。水は山から、森から生まれる。子供のとき山や川で遊んだ経験のない人は自然の大事さが分からない。
美しい国をつくるには森と川を大切にしましょう。
美しい日本をつくるため子供たちをつれて山に行きましょう。

（この文章は福山リーデンローズでの講演を福原不二雄が要約したものです。）

C.W.ニコル氏の略歴

1940年　英国南ウエールズ生まれ、17歳でカナダへ渡り、カナダ水産調査局北極生物研究所技官として海洋哺乳類の調査研究にたずさわる。
1967年　2年間エチオピア帝国政府野生動物保護省の猟区主任管理官に就任。 シミエン山岳国立公園を設立、公園長を務める。
1972年　カナダ水産局淡水研究所の主任技官、また環境保護局の環境問題緊急対策官として、石油、化学薬品の流出事故などの処理にあたる。
1975年　沖縄海洋博にカナダ館の副館長として来日したのをきっかけに、小説家として日本に定住。
1980年　長野県黒姫山の麓に居を定め自然とのかかわりを大切にしながら文化活動、執筆活動を居ている。
1995年　日本国籍を取得。
2002年　自ら荒れた森を購入、生態系の復活を試みる作業を16年間行い、財団法人CWニコル、アファンの森財団を設立。
2005年　英国エリザベス女王陛下より名誉大英勲章を賜る。

主な著書に「テキシー」「冒険家の食卓」「バーナード・リーチの日時計」（角川書店）「風を見た少年」「北極カラスの物語」「魔女の森」（講談社）「勇魚」「盟約」「遭敵艦隊」（文芸春秋）「CWニコルの人生は犬で決まる」「裸のダルシン」「森に行こう」（小学館）「誇り高き日本人でありたい」（アートデイズ）「魂のレッスン」（日本放送協会）「CWニコルの森の時間」（読売新聞）「森を継ぐもの」（KDDクリエイテブ）等多数

C.W.ニコル氏講演会
2007年8月24日



大田　祐介

福原会長から、例会山行4000回記念行事で講演会をやりたいと相談を受けたのは、2月中旬であったと記憶しています。 その時、会長の頭の中で候補に挙がっていたのは、岩崎元郎さんや田部井淳子さんといった、いわゆる「山屋さん」でした。しかし、それでは聴きに来るのも「山屋さん」に限られ、一般市民を対象にし、広く山岳会の活動を知ってもらう為にも、もっと考えた方が良いとアドバイスさせていただきました。では誰を?と言われ、瞬間的にニコルさんの名前が閃いたものの、しばらく答えに窮してしまったのです。

じつは、ニコルさんは昨年の夏に鞆の浦を訪れ、鞆港の埋立架橋計画に反対を表明されました。私もその際にお会いし、意見交換をさせていただきましたが、なぜか話は山の方に向かい、いつしか私の母の話となりました。
ニコルさんは戸隠の飯綱山山麓の「アファンの森」にて里山再生に取り組んでおられますが、戸隠は私の母も大好きであった山であり、お会いした記念に母の遺稿集「ありがとう」を差し上げたのです。

このようなご縁もあり、福原会長にニコルさんでどうか?と恐る恐る打診したところ、鞆を愛する会長はあっさり了承され、常任理事会に諮られました。当然のごとく反対の声が上がり、会長も苦しい立場であったろうと推察します。しかし、ニコルさんが格安の講演料で引き受けてくれた事や、福山市体育振興事業団が共催団体となってくれ、補助金を付けてくれた事が後押しとなりました。

開催日は8月24日に決まり、スポンサー集めやポスターの印刷、その前後には富士登山や記念行事などイベントが目白押しとなりました。そして講演会まであと3週間という時、会長から1本の電話が入りました。
なんと、ニコルさんのホームページを見ると、福山の講演会の日程が8月25日になっているとの事です。

確かに当初は25日で話を進めていましたが、会場の都合で24日に変更してもらったはずでした。あわてて問い合わせると、マネージャーさんもショックを受けられ、なんとか調整してもらった結果、講演開始30分前の5時55分福山駅着となったのです。

さて講演会当日ですが、蓋を開けるまでわからないといった準備不足の雰囲気の中、会員一人一人がご自分の役割を率先して探され、果たされたような印象を受けました。

私もプロの司会者・佐々木弘美さんに助けられ、なんとか司会の大役を果たせましたが、ぶっつけ本番の内容も多く、無事に終わった時は心底ホッとしたものです。また、会場からの質問も的を得た内容で、サクラ無しにしては上出来ではなかったでしょうか。更に今回は映像関係が多く、山岳会の紹介スライドショーやニコルさんのDVD、抽選会の当選者など、万一トラブルで映らなかったらと思うと、今でも冷や汗が出ます。

無事に講演会も終わり、お楽しみ抽選会やサイン会も好評で、ニコルさんの著書が74冊売れて啓文社さんも大喜びでした。また、会場出口に置いたアファンの森財団に対する募金箱には95,160円もの浄財が集まりました。打ち上げにはニコルさんも参加していただき、好物のクジラに舌鼓を打ちながら「話しやすい講演会でした」と言われ、勢いで山岳会としてアファンの森をぜひ訪問したいという話に発展しました。

最後にニコルさんが「今回の講演会は大田さんのお母さんが取り持ってくれたのですよ」と仰っていただき、本当に感謝しております。

記念登山･祝賀会
2007年8月25日



小林　征三

記念事業の末尾を飾る「熊ヶ峰」山行は8月25日総勢100名近い会員が3コースに別れ、猛暑の中、笑顔で参加した。4月22日の「リレーマラソン」に始まった一連の4000回記念事業がこの日の山行と祝賀会で無事に終えると思えば素直に嬉しかった。Aコースは川西氏、Bコースは世良氏、Cコースは綿谷氏がリーダーを勤め、参加者の協力もあり全員がほぼ時間通り「熊ヶ峰」に勢揃いした。

この模様は翌日(8/26)の読売新聞に画像入りで報道された。Aコースに同行した福山支局の記者、長野祐気氏の記事は太字のタイトルで「健脚4000回記念登山」「1919年発足･福山山岳会」「40〜70代熊ヶ峰へ」「達成感分かち合う」内容は福原会長、リーダーの川西氏の談話の他、福山山岳会の活動が好意的に掲載されていた。


1919年発足 福山山岳会
健脚4000回 記念登山
達成感分かち合う

2007年8月27日 新聞記事提供:読売新聞

写真は当然Aコースの方が掲載されるものと思っていたが意外にも、写された覚えが全く無いという綿谷氏がアップで掲載されていたのには本当に驚いた。皆んなで大笑いした。
市民参画センターでの100名の祝賀会は圧巻であった。これほどの仲間が一堂に会するのを見たのは福山山岳会に入会して初めての事だった。性別、年齢、職歴、社会的地位、地縁、血縁・・・何の関係もない単に山を愛する素晴らしき仲間が笑顔で集ったのである



4000回記念事業は準備期間を含めると2年近い歳月を要した。福原会長の下、事務局の江種氏、会計の世良氏を始め多くの仲間が頑張った。各々が自己の経験、人脈をフルに活かし行動し、懸命に支えた素晴らしい結果を見事に花咲かせた。

この祝賀会には、県岳連より松島事務局長が広島より参加され、ケンユー占部本部長をはじめ佐長新市山岳会会長、松浦福山市役所山の会会長の方々に祝辞を頂きました。

福山山岳会の遺訓



元会長 小土井 薫計

「リーダーより前を歩いてはならない」このことは、福山山岳会の最も重要な掟として現在も守り続けられている。

福山山岳会初代の会長であり、会の発展に偉大な功績を残された故藤井大観氏は、「登山八百回の連想」の中に次のように述べておられる。

「登山の当日リーダーは、出席者の顔ぶれを見廻して、その中で最も脚力の弱い人の速度を標準にして、先導の任に当たるのである。而して誰もリーダーの了解を得ない限り、一歩もリーダーより先に行かないのが掟である。もし列が長くなり過ぎた場合は、リーダーは休憩を宣言して、決して落伍者を出さないのが部の慣わしである。かくて健脚の人も初心の人も、終日和気あいあいのうちに登山を終わるのが、わが部の長い間に育成された伝統である。」　掟の原点はここにある。

また「登山は必ずしも高きをもって誇りとせず、日常励行してたわまざるをもって貴しとする」と常に教え続けられた。

福山山岳会草創時代、藤井氏と共に会の維持・発展に苦労され、努力された方に故中木正雄氏がある。氏はひたすら山への情熱に燃え、部活動の維持・発展に心血を注がれ、部に独自の気風と慣行を鮮明に樹立され、その功績は誠に大きかった。そしてこの時代、すでに福山山岳会の伝統・慣行の中核が形作られていた。内容は次の3点にあった。

第1点 リーダーの責任制と義務・権限の明確化。

第2点 会員の遵守する事項として、登山一辺倒にとかく陥りやすいことを戒め、登山道徳の実践、安全登山の励行、自然愛護（自然保護）を心がける。

第3点 地味なスポーツである登山に精進する会員相互間に、人も羨む温かい人間関係を醸成する。

これらの不文律は時代と共に表現は変わっても、現在の会員に受け継がれている。私達は諸先輩の残された偉大な足跡と、遺業を学び、すばらしい遺訓・伝統を継承し、福山山岳会のさらなる発展と充実を図らねばと思っている。



4000回達成に想う



河崎 忠昭

例会山行が4000回達成した事を感慨深く思っています。私が入会したのは昭和37年でした。当時私は25歳、多くの素晴らしい先輩のお陰で色んな山行を楽しみました。リーダーをするようになってからも数多くの山行を実行しました。当時の例会山行が2000回代でしたがその後の福山山岳会での活動は、私の人生そのものと言っても過言ではありません。

しかし数年前、突然体調を崩し（脳梗塞）山行はおろか日常生活にも不自由な状態になってしまいました。何故自分がこんな病気にと、残念で口惜しく歯がゆい気持ちばかりが先立って悶々としていました。

今回、例会山行4000回達成したことは素晴らしいことです。改めて過去の会報や写真を見るにつけ懐かしさと複雑な気持ちの入り混じった心は、健常者の方には解ってもらえないでしょうが涙が出るような心境で過去の記録と向き合っています。

あの人もこの人も若かった、元気だった、その中に私も元気な笑顔で輪の中にいる。思わず笑ってしまうような楽しい思い出も一杯詰まっています。ある時期から美しい景色を残したく趣味のカメラで愉しんでいましたが、やがて仲間の斉藤さんや江種さん達と「写団福岳」を立ち上げカメラ好きの仲間にも声を掛け色んな場所へ撮影会にも行き切磋琢磨したことも今では楽しい思い出です。

一番思い出に残る山は「比婆山」です。毎年紅葉のシーズンには私の定番として比婆山登山を計画し多くの仲間に比婆山の素晴らしさを紹介してきました。

「比婆山国際スカイラン」では3回、選手として全山縦走に挑戦し何人かの仲間と完走した事もありました。

あの頃、競うようにリーダーを務め、今でも活躍されている「小土井・鈴木・萩原・黒飛・福原・上原」の各氏を初め、他の仲間の活動されている姿が頼もしく羨ましく、眩しいです。
いつまでも元気で頑張って頂きたいと願っています。

悲しい写真もあります。スカイランの写真の中に、私が颯爽と走っているのも在りますが、1992年のレース後、私と共に記念撮影に収まっている福原さん（現会長）の隣に微笑んでいる佐藤さんは2年後、仲間4人と大山で遭難死されました。大山遭難事故は一番悲しく痛恨の極みでした。私にとって例会山行4000回達成との節目は、自分の半生の悲喜こもごもの歴史でもあります。

どうか福山山岳会の仲間の皆様、体調管理には十分留意され楽しい山行をして下さい。私も微力ですが、今後も福山山岳会の一員として頑張りたいと願っています。（談）



「団塊世代」の第4000回



三好 行平

前略　例会第2963回登山を最後にあなたは白山や立山連峰を見渡せる生まれ故郷の能登半島へ急ぎ旅立ちました。

あの日から15年になる今年、我ら会員は途切れることなく山行を引き継ぎ、例会山行4000回を達成しました。

「でかした。おめでとう」遥か遠い彼方からあなたの声が聞こえたようで、あの日の前日なら「ありがとう」って言えたのにと苦笑しています。

あなたとは意固地な負けじ魂で、卒寿を超えなお「怪物」と異名を取る、年間山行の全踏破メダリスト金山先輩を追い掛け、追い越せと日曜日の早朝から例会山行の仲間に加わった。

山頂の昼時はあなたの一人舞台でした。

「定年退職」、「第二の人生」、「年金」、「老後」など定番演目の熱弁にも拘わらず観客の小若造はまだまだ、まだまだ先の事と無関心を決め込んで遠い山、遠い空を眺めていました。

「若手のコウヘイ君。下山後の予定は」と背を突っつかれた山行では決まって「エエ酒があるルーン」おどけたお国訛りで度々、口説かれた。

下山するや「山は病院」と言っては飲み「金のなる木」と「酒の出る木」が欲しいと言っては飲み過ぎました。

「俺の持病は山のセイらしい」豪快な飲ン兵衛ぶりは病の元を除けば解消される筈でしたが山ノ神（奥様を敬称するあなたの専用語）の心配や世間の月並みを否定した気骨のあなたは大喝一声する鬼の顔と温情な福の顔を持ち下界にあっても山にあっても酒豪のリーダーでした。

あなたは67歳のままですか、小生なンぞ無用に生きて適正レベルを大幅に超える負荷を環境に掛け続けています。口卑しい暴飲暴食の毎日は体中に食品防腐剤を蓄積し、もう土に返れなくなりました。

あの昼時、黄昏ゆく出し物を他人事と聞き流していましたが山行4000回達成の亥年、三度目の成人式を迎え、とうとう還暦と言う年寄りに仲間入りしました。お近づきに性懲りもなく御来光のてっぺんで昔の山談義を肴に御一献を。

これからも更に続く山の峰、雲の嶺を目指して一歩づつ後ろから征きますので見守っていて下さい。

千の風になって。　不尽

2007.06.17　三好行平（S22生）

追伸

第4000回登山（H19年6月17日）は比婆山登山（H8年6月30日）から4000日のめでたい記念日となり御同慶の至り。

我ら自然と共存共生する四季の登山から感動と敬服する生き様を、また其れか有らぬか体重4000gの健康的減量の恩恵も得ます。

さあ、明日からも元気に4000mの往来で会則行程、八粁米の大地なる山道を闊歩しよう。

鶴は千年、亀は万年。福山山岳会は年々歳々幾久しく後までも記録と記憶を連綿に…

能登の加藤先輩、余計なことを書いてはいけなかったのかも知れません。

ご免なさい。



記念タオルは三好行平氏のデザインによるものです。

蔵王山へのオマージュ



高橋 進次

はでやかに登山専門誌に登場することもない一地方の山岳会が、創立88年で例会登山4000回を達成した。画期的偉業といってよい。会の席末を汚す一員として喜びにたえない。

この慶事を祝し、併せて将来の発展を願って記念誌が発刊されるにあたり、一文を草する機会を与えられたことに感謝する。

しかしながら、例会山行参加歴極めて乏しい我身を省みるとき、その責を果たしうるか疑問であり内心忸怩たるものがある。

人の一生にも相当する長期間に亘り、会が存続し充実した山行を果し得た理由はなんであろうか。二点を指摘したい。

一は、会の性格である。やや古風な表現を使えば「質実剛健」の精神に支えられているということである。簡素、朴訥と言い変えてもよかろう。

一例を挙げてみる、青春18切符利用の日帰り例会登山は、遠くは関西、四国、山口方面にまで及び、更に3、4泊以上も費やす南北アルプス等への往復にまで、この切符が活用されてきた。若者にとっても簡単にこなせない日程を、中高年中心のグループが、早暁に駅に集い、混雑する列車を乗り継いで、目的の山々を歩き続けて当夜、福山に立ち戻る姿を想像願いたい。登山口迄の経費を極力節減し参加し易い環境を整える、こうした地道な努力に裏打ちされた会の運営が大記録に到達した理由の一つであり、本会の草創登山が、著名な高山でなく近郊の後日、沼南アルプスと呼称された山々で実施されたという出発からも会の質朴な性格が窺えるのである。

二は、会のホーム・グラウンドともいうべき蔵王山の存在である。例会登山1000回記念、1500回記念、2000回記念の行事は蔵王山で執行された。昭和63年元旦の登山は2700回の節目となった。

福山駅北東方向にこんもりとした優美な山容を見せる蔵王山（225.5m）は、駅からの標高差は約220m、徒歩20分程で登山口の一つに達し得る極く手近な独立峯で、山岳会員、市民らに愛される山である。陽光を浴びて行く尾根道、樹間を辿る沢沿いの道、東西南北から四通八達した登山道、四季折々のたたずまいは老若男女を満足させるに足り、一方、南側の観音堂横の岩場では岩登りの訓練も実施されるなど体力、技術に応じたトレーニングに好適な山域である。

元旦、山頂で初日を拝し、年末の清掃登山で年中行事が終わる。その間、岩場での訓練、植物観察会、観月の集いなどが実施され、更に会員個人もこの山中を縦横に経巡る。

この山での日々の鍛錬が国内外の高峰登攀を達成する技術、体力を養成するのである。

福山山岳会と会員にとって、かけがえのない山、それが蔵王山なのである。

以上、本山岳会の性格、それを育んだ環境について述べてみた。

終りに、将来への展望についてふれる。

会の成長の歴史の一齣一齣を切り取って見せてくれる月次の会報は、刻明な記録の集積であり、担当者の努力の結晶である。毎年、1月号巻頭には、その年に臨む会長の決意、会の目標が提示され、12月号で、その総括がなされる。会長交替期の号には、新会長の抱負が語られる。会報を味読することにより会の現状はより鮮明になるのである。

4000回達成への足跡、その間に醸成された伝統は、当然に今後も継承されなければならない。そして、伝統は単に墨守されるのではなく、時代の変化、会員のニーズに応じて微調整がなされ、更に会長個々人のカラーが色良く滲み出て、より魅力ある会へと前進をつづけ、今後とも生生発展していくことを願うのである

4000回達成によせて

心は現役



藤井　繁

4000回記念号「はいまつ」発刊にあたり、古参としての原稿を依頼された。
まだ若手バリバリの現役と自分では思っていた私は、「古参」に違和感を覚え、会員名簿を捲ってみると、何と入会順で9番目となっていた。成る程、古参と思われても仕方がないなあ、と納得。

40年前、入会初の山行は島根県境の大万木山でした。その日の参加者は、立花さん、三好（寿）さん、市川さん等々。

当時の私には相当の年配者に見えた。ご高齢の方々が1000m越える山登り、大丈夫かな?と思いつつ、歩き始めたが私の心配は何のその、皆さん足腰の強い事、逆に私の方が早めに苦しくなり、バテる寸前で、よろよろと下山した。

山行中の話題は歩行距離の話で「半日10里、一日20里」等々、すごい歩行歴の話が飛び交っていた。言うまでも無く一里が4kmだから、20里と言えば80km歩いた事になるが、この方々の歩きっぷりなら、さもありなんと恐れ入りつつ納得した事を懐かしく思い出します。

あれから数十年の時を経て、今、私が、あの当時の先輩方の年齢になってみると、残念ながら、気力、体力、脚力ともに全く及ばないなあ･･･と、改めて当時の諸先輩に敬意を表する思いです。

その先人達が一回二回と歩み続けて、後輩に受け継がれ、山行を積み重ねた
＜4000回の金字塔!＞
この歩みは連綿と続けてと、願っています。

先輩の功績



福原　不二雄

平成元年10月、宮島および三倉岳で開催された第28回全日本登山大会は三好忠行県岳連会長と全国の旧知の山仲間が親交を暖め、最後は胴上げして労をねぎらい、氏の引退をかざるにふさわしい感動的なフィナーレでした。
そのおり三好会長から「広島山岳会の恐羅漢山の山荘に遊びに来ませんか」とお誘いを受けました。それでは折角だからとお言葉にあまえて、年末に山荘を使用しての山スキーの例会山行を行いました。
山荘は、恐羅漢スキー場の一角にあり、三好会長自ら我々を迎えに来ていただきました。
この山荘は以前、失火で消失したことがあり、会員以外の者が使用するときは会員が同行しなければならないという規則があり、会長自ら来られたとの事でした。
三好会長からスキーの背負い方等を教わり、我々は恐羅漢山、旧羅漢山に登りました。
帰路、激しい降雪に前途が危うくなったが会長の鳴らされる鐘音に導かれて山荘に帰りました。
その夜の団欒の席で三好会長が言われました。「我会は福山山岳会には格別の想いを持っています。その昔、我会の先輩達が福山山岳会の皆様に初めて北アルプスに連れて行ってもらい、いろいろご指導いただいたことがあつた。その恩義は代々の会長に引き継がれております。だから今日来て頂いたのです。」
　初めて聞く内容で感激しました。
大正時代に北アルプスを縦走するというのは当時としても稀なことであり、我々の先輩達はすごい登山をされていたものだと感嘆します。
そして、このような先輩の皆様の活動のお陰でいまの我会があるということを本当に実感いたしました。

第二章　山への想い



北アルプス

山懐の譜



藤井キヨ子

石鳥居をくぐると暫く登る羊歯の道
仄暗い松の木陰　腐葉土が発酵する匂い
わたしの　いちばん好きな　山の匂い
小さな岩稜を越えると
萩の小径から　ひょっこりと頂上に出る
吹き上げる風の洗礼を受けて
両手を伸ばして風を掴む
履き古しの運動靴で何度も登った蔵王の峰から
わたしの山旅がはじまった

初めての夏山登山道
慣れないキャラバン・シューズの紐を何度も結び直し
女三人弥山を目指す
木の根露出するブナ林を快調に過ぎて
視界の開けた六合避難小屋
瑠璃色の日本海が輝いていた

鯉幟が勢いよく游いでいた五月の涸沢に
穂先が見えてもまだ遠い残雪の槍ヶ岳に
そして念願の穂高屏風岩東陵ルートへの登攀
山行を重ねる度に山の友が増え
同じコッフェルの飯を分け合い
次の山行計画に意気投合した

山で誕生れた生命たちが
山で枯れゆく季節に立ち会い
再びの生命に出会える感動
山懐に抱かれながら
わたしの精神も何度も再生した
なのに　あの年の冬
我が心の山は
同胞たちを懐に迎え容れてはくれなかった
慟哭の谷に虚無の哀しみが刻印された
あの日から　幾度の冬を繰り返し
再び山懐に入れば



晩秋の森

頂上への長く苦しい急登
咽の渇きに　レモンを齧りながら
やがて山霧につつまれはじめた弥山を踏んだ
互いの掌を重ね合い
歓喜と忍耐の混在する未熟な登山者の昂奮
感激の時間が一瞬止まった
縦走　砂滑り　元谷へ
静寂の北壁を仰ぎながら
堰堤での熱い紅茶の祝杯
母の懐に還ったような暫時の陶酔
満たされてゆく無垢なる思い
あの日から　大山は我が心の山になった
もっと高みへ　北の山へ……
初めてのニッカズボン　大きめのキスリング
真新しいエトラの山靴が照れくさかった
登頂前夜　流れ星を数えた真砂沢に

浄土のような聖い静けさ
石鳥居をくぐると　暫く登る羊歯の道
腐葉土が発酵する匂い
寒風も酷暑も身に受けてすっくと立つ山
新年　初めて昇る太陽を迎えに行く蔵王の峰へ
未だ　下山せぬ　山の友を　我が懐に抱いて
また新たなる山旅を
ここからはじめよう

俳句と短歌



山本　マチ子

【俳句】

陽だまりに　片寄せ合いし　スミレ草
楽し気に　雀集いて　春の朝
身に染(し)みる　燃え立つ赤の　もみじかな
錦木や　炎の如く　刻(とき)を染め

【短歌】

桜咲く　学びの里を　尋ねれば　昔を語る　櫂(かい)ぞ閑(しず)けき
風香る　丘に登りて　はるかなる　大空の旅　夢開くなり
幾千の　栄枯を忍ぶ　醍醐桜　山里深き　天空(てんくう)に立ち
古の(いにしえ)　ロマンへいざなう　大鳥居　朱塔鮮やか　花吹雪舞う
果てしなく　広がる杉の　原生林　三角帽の　容(すがた)ゆかしき
ペダル踏む　心弾(はず)みて　童心に　返りて仰ぐ　稜線はるか
山茶花や　紅(べに)のジュータン　敷き詰めて　今を盛りの心華やぐ
はらはらと　落つる枯葉にしみじみと　幸せかみしめ　帝釈の径(みち)
見渡せば　瀬戸の小島を　通う舟　空の碧さに　白き尾を引く　（高見山より）
晩秋の　山波はるか　絶景の　眼下に迫りし　大パノラマ　（絵下山より）
はるばると　鉄塔越えて　幾山河　しばし慰む　岩走る清水に　（鉄塔道縦走より）
春浅き　県央訪ね　来て見れば　我を迎えし　おきな草かな　（鷹の巣山より）



山の四季



江種　幸男

【春】

赤芽萌え凍てつく岩峰暖める
雪残るあの沢沿いにサンカヨウ
一斉に木の芽出でたる谷間かな
振り向けば　足跡埋める春の雪
夏隣バージンロードの白い花

【夏】

夏霧に木肌輝くブナ古木
富士の峰紫紺に染めて梅雨が明け
夏山を青く浮かべて雲の海
夏の天こだまも響く岩の壁
はずむ息尾根に出て食うスイカかな



ブナ古木

【秋】

馬の背の南に映える紅葉かな
注意せよ足の踏み場も散紅葉
霧降りて山静かなりブナの道
雪解待ち雪降るまでの秘峡かな
秋入日雲表の旅色を添え

【冬】

雪山をピンクに染めて夕日落つ
雪の尾根辿れば遥か穂高かな
紫の峰気高くて霜の道
冬陽射し真白き峰に雲の影
目覚めれば雪山眩し湖畔かな



晩秋

最後の一瞬まで燃え続けよ
いつか芽吹くであろう命のために自らの命を与え
朽ち果てゆく終焉の時を　今、しっかりと見届けよう
秋の連峰の色彩あなたに贈ります
散り敷いた山毛欅の黄で染めた栞にこめて

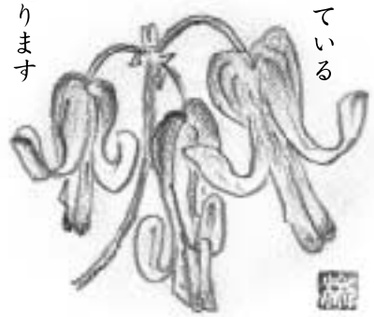
凍てついた山の霊気に身震いしながら山頂めざして
歩きはじめる
山靴の下で雪のきしむ音がする
ここはもう一面の銀の静寂……
下界に別れを告げた聖なる回廊
見上げた天狗の上部からゆっくりと夜が明けてきた
新たなる時間がはじまる
新たなる私の出発（たびだち）
太陽の昇る瞬間をこの目で見よう
そしてあの燃焼を心に焼き付けよう
白き神々の座にて洗礼を受けたなら、

山からの便り



藤井キヨ子

沢をぬけ出た陽だまりに
点々と小さな足跡が横切っている
シールをはずして腰をおろすと
真新しい野うさぎの糞が
残雪にまあるいくぼみを作っている
春はいのち生まれる季節
木々の芽の青臭い匂いと
かすかな花粉の香りに
何かしら心騒ぐ季節
早春の山の便りをあなたに送ります
山裾の野仏の傍で見つけた萌えたつような
蕗のとうの青で染めた栞にこめて



稜線に積乱雲湧き　山頂への尾根をたどる
道標の手前で目を引いた一本のカラマツ
強風にさらされ捻じ曲がり岩の隙間に根を伸ばし
わずかな水気を吸って生き延びてきた野生の生き様
身は風雪にゆだねようとも、魂は屈することなく生きよ
その根の元に、ちいさな、ちいさなミヤマオダマキ
強烈な日差しの下の清楚ないのちひとつ
標高三〇〇〇メートルの風あなたに贈ります
紺碧の北の空で染めた栞にこめて

山麓から見上げた山なみが錦繍の紬に彩られている
標高千米を越えたあたりでは
すでに冬枯れがはじまっているらしい
仲間たちのはく息白く　手をかざせば紅色に染まる指先
山よ、燃えよ
やがて冬を受け容れる日が来るならば

谷間の山霧が立ち昇りはじめた
大空を紅に染め、今日の太陽がいま誕生れた
夏草の上、いっせいに羽化した虫たちの乱舞
老いた巨木の巣のなかで親鳥が卵をあたためているよ
その根っこに黄色い新芽が吹いている
落日、墨色の天に朱く尾をひいて星が流れた
果てしなく拡がる宇宙に最後の炎を燃やす命をみた
いのち白熱、心は焔の如くあれ
この刹那のきらめきをあなたに届けます
生命の熱さ灼きつけた栞にこめて

再び下界へ戻っていこう
冬山のいのちの息吹きあなたに贈ります
朝の陽を受けてキラキラ輝く雪の結晶をちりばめた栞にこめて
未明

第三章　福山山岳会の活動

会報とは

会長 福原 不二雄

仏典に曰く、「懺悔無きは人にあらず」
「反省する心、感謝する心があるから人間であり、それが人間の根幹である」と
山岳会にとって、それは会報ではないでしょうか。
山岳会にとって会報とは活動の記録であり、会員が如何に生き、考え、活動し、
それから何を学んだかという証しの記録だからです。
さしずめ「会報無きは山岳会にあらず」というべきであろうか。
私たちは、事前の山行計画、実際の行動はよく考え準備するけれども
その後の記録の整理は軽視しがちである。
山行は計画、実行、事後の記録の整理がなされてはじめて完了する。
しかし、この山行後の記録の整理は意外に体力と時間を要する作業である。
だからこれが几帳面にできるということは堅実な山岳会の証明でもあります。
感動の記憶もすぐに忘れられ、文章として残されなければ後世には伝わらない。
この会の活動記録として残すものが会報です。
山行の記録、特に失敗の反省等の記録は次の山行への貴重な第一歩であり、
充実した山行の糧となる。
進歩とは同じ失敗を繰り返さないことである。
会報は後輩に遺す最大の贈り物である。



活動の記録



第1回福山市民ウォーキング大会　記念植樹



柏餅山行



比婆山スカイライン



第3回福山市民ウォーキング大会　阿伏兎



登山標識設置



雪原ウォーキング



クライミング研修
（黄色のシャツは指導中の近藤邦彦氏）



登山道整備



清掃登山



沢登り

指導部を担当して



小林　征三

私事ですが、福山山岳会に入会以前に「日本シダの会」に入会し野山や沢などを歩きシダの勉強をしていました。また、アマチュア無線を持って高い山に登り移動運用を楽しんだりもしておりました。そのうちに大山雪山登山等々、家内と二人で「登山に入門」し始めた頃福山山岳会の大山での悲惨な遭難事故を知り、山での事故に遭わない方法、登山のイロハを学ぶ為に福山山岳会に入会し今日に至っております。

入会後は講習会等で色々な事を学びながら例会登山に参加してさまざまな経験をさせていただき、分かりきった事では有りますが、山では自分の体は自分で守らねばならぬという事が一番大事であると考えております。

そのため指導部では万一の事故を想定したセルフレスキューのやり方、アルプスの悪所や岩場を安全に通行するための岩登り訓練、沢登り講習会等も年間計画に取り入れ、実施しております。

また、会員の登山技術アップの為外部から講師を招聘した講習会も予定しております。

指導部は市民ウオーキング大会を始めいろいろな行事の推進の為会員の皆様にいろいろな役務をお願いしておりますが誰一人として断る人も無く本当に積極的にご協力いただき、お陰さまで盛会裏に終えることが出来ました。

試行錯誤して導き出されたこれら行事運営のノウハウは会の貴重な財産であり次に引き継いでまいります。

私は皆さんに指導できるほど経験も技術も有りませんが、皆さんと一緒に安全登山の為の勉強、そして登山技術のレベルアップを目指し更なる精進を続ける覚悟です。

会計を担当して



世良　元

会計担当も他の部門と同様に会の財務を預かる重要な部門であることを肝に銘じ透明、正確、信頼を旨として前任者から会計担当を引き継いだのは平成11年4月で現在早や9年目を迎えております。その間振り返ってみると喜しい事も楽しい事も全くありません。有るのは使命感のみです。監事担当時から疑問を抱いていた事は、会計処理基準が存在しない事でした。理想的には同基準に従って処理し監事もそれに従って鑑査する仕組みが必要ではないかと思い、特に一般会計について「福山山岳会一般会計処理基準」を作成して役員会に諮ったところ、必要ではあろうが当会は会社に非ず、そこまで厳格にする必要はないのではないか、また同基準のメンテも負担になる等の理由で幻に終わった経緯がありました。

前述の事情により日常の会計処理に当たっては、複式簿記を採り入れ伝票起票、補助元帳を新たに加えたほか、決算報告書についても大幅に改正し、全般が把握できる様式にして今日まで継続しております。

日常の会計処理の一端を記述してみますと、ご承知の通り当会は会員による会費、入会金により運営されておりますが、その払い込み用口座は郵便局に開設されており、口座間振り替えならびに、出金の為にも郵便局訪問が絶対条件で手元に現金がないことからも郵便局は金庫替わりになっております。以下、紙面の事情で割愛。

将来、NPO法人化も検討課題にのぼっており、会計担当の重要性を改めて実感すると共に、今後も精進、努力を重ねたいと思います。

新人研修を担当して



藤田　昔三

我会では、入会にあたり二つの関門をクリヤーして戴くことになっています。

1. 毎週山行を計画実施しています。例会山行に2回以上参加して頂くことになっています。歩き方、協調性、仲間たりうるか、その人柄を審査致します。
2. 私達が担当致します新人研修講座の受講であります。福山山岳会とはいかなる会なのか、知っていただき納得してもらい入会していただいております。会則、約束事、山行のやり方、組織、山の装備その取り扱い方等、初歩的なことを教育しています。

会員の守るべきこと

① 山岳会において、政治、宗教、経済活動をおこなわない。
② 自己責任の原則、自らの行為、結果について自ら責任をもつ。
③ 自分の実力にあった計画に参加する。
④ 山行中は、リーダーの指揮に従うとともに協力すること。
⑤ 山のマナー 登山はチームワークのスポーツであり、礼儀を重んじ和を尊ぶこと。
自然環境を守ること。持っていったものはすべて持ち帰る。

樹木、草花を取らない、決められた登山道を歩くこと。

新人研修担当には、平成13年4月より、登山の大先輩に囲まれて、いろいろ教えを頂き新人研修受講者数、約90名位中高年の登山ブームも峠を越した感がある時勢となり淋しさを感じます。

新人研修担当として、よかったことなし、経験も浅く、知識も無いものが研修担当として就くことが申し訳ない気持ちであった。

◎入会前の研修で多くの方に顔を知って貰ったことは、プラスでありました。

受講者の方が経験も豊富な方でも素直に聞いて下さるのは感謝の念が湧く、印象深いこと別段なし。一方通行が多いので受講される方も遠慮があってか?

◎変わったこと　福山山岳会も老人クラブのように、高齢者が多く、若い者がいませんねとの声があり、実績を積んだ経験豊富なハイカーが多く国内でも会発足90年を迎える山岳会は余り多くありません、と伝えると驚いて、そんなに歴史があるのですか、それは素晴らしいことですね、自慢できますね、誇りですね、と福山山岳会を見直したと言った声もあり、若い人の趣味も多様で、しんどい山登りよりもっと格好良い楽な道を選ぶ人が多い。どこも同じと思う。

◎新人会員に望むこと

ア. 出来る丈、例会山行に参加して戴きたい。
イ. 末永く会員であって戴きたい。
ウ. 先輩会員の素晴らしい実績を引き継いで福山山岳会の名声を高めて戴きたい。
エ. どこまでも謙虚であって欲しい。

◎今までの山行で印象深いこと

1　福山山岳会に入会して、最初の一泊山行和歌山県の高野山,国史跡指定道高野山開創時の面影を残す町石道を歩いて見ませんかと、お誘いを戴いて参加させて貰い、高野山奥の院金剛峰寺と静寂の中を歩いたのが、特に印象的でした。大門～九度山までの22km、長い下りでした。

2　大和路探訪(奈良県)　高松塚古墳～津風呂湖畔～喜佐谷万葉のこみち～吉野、一泊二日の山行でした。雨に降られ大変な山行であったが、素晴らしい体験を得ることが出来た。

第1日目、雨の中道に迷うと言う、アクシデントが生じ日没もせまり、焦りを感じた者も多かったと思う。迷ったと思う時点まで引き返し、山の鉄則を守られたリーダーに頭がさがりました。慌てることなく、みんな協力して無事宿舎に入ることが出来ました。

途中尾根コースでは、大きな声をだすことを薦められ、前後交代で号令を掛け合いました。大きな声を出す事は苦しみを乗り越える力となり、仲間意識をより強く持つことが出来ました。数多くの山行をしていますが何と言っても大和路探訪が一番の想い出であります。

編集付記

投稿頂いた藤田昔三氏は平成18年12月31日に逝去されました。皆様ご存知の通り、温厚な方で山岳会の常任理事として長年、会の運営に寄与されました。謹んで、ここにご冥福をお祈りいたします。

運営部を担当して
山の集い



三　藤　敬　子

山の集いは会員間の情報交換、意見発表等により交流を深めるとともに、勉強会を通じて、知識を得て技術の向上を図ることを目的とし、毎月1回、第一火曜日に、中央公民館に於いて、午後7時から2時間、開催されています。

内容は例会山行の予告や報告、会員の関心のある事項、タイムリーな事項を取り上げています。天気図の描き方等の基本的な山の知識の勉強会も会員の要望により実施しております。

新会員が増え、歌える人の少なくなった【会歌】を復活させ練習しています。

山岳会の行事や、他の山岳会の交流の場で誰もが歌える様になりたいと思っています。

会員の要望を聞き、参加しやすいような内容、関心のある事項を取り上げて山の集いを盛り上げてゆきたいと思います。

最近の活動状況

開催日		内　　容	人数
2005	06.07	登山の楽しみ　夏山山行計画　テント登山の装備　初心者沢登り	33
	07.05	沢登り（装備・危険知識）　雨と雷　これは便利（バンスト・アイゼンバンド）	35
	08.20	ビアーガーデン（ロッツ屋上）	23
	10.04	写真の取り方　蔵王山登山コース　これは便利（ペットボトル）　夏山報告　市民ウォーキング大会PR	31
	11.02	テーピング　ストレッチ体操　福山山岳史懐かしいスライド	24
	12.06	ホームページ開設　野外料理　地図の見方　山スキー用具　雪山市民ウォーキング大会PR	27
2006	01.09	新年互例会（高野山別院）	62
	02.03	冬山の装備　雪崩の知識　アウトドア用GPS	18
	03.07	毎日のトレーニング　テント山行　ストレッチ　山菜の調理法　登山用具手入法	27
	04.09	写真のポイント自然観察　軽量テント山行　ロープ確保のやり方	54
	06.06	夏山計画　新型ビーコンの説明と使用方法　九州福智山の食中毒　山野の春の花　無線の取り扱い	28
	07.11	子供と孫とのキャンプ（ながの村）予定・日程　地図の見方　鳴滝山から富士山・ヒマラヤへ	16
	08.27	ビアガーデン（ロッツ屋上）	25
	09.05	ザックと靴の修理　ロープの輪の作り方　ながの村の報告　剣・立山の報告	19
	10.03	懐かしい山の映像	19
	11.07	私のお勧めする本　第3回福山市民ウォーキング大会報告	11
	12.05	冬山訓練机上講習会　雪崩にあったらどうすれば良いか　役立つ天気予報	15
2007	01.05	新年互例会（高野山別院）	43
	02.06	2006年山行CD写真（子供と孫とのキャンプ・万葉の旅・私がみつけた花）	25
	03.06	大山レスキュー伝達講習会　徳本峠山行報告　山岳保険の説明 緑町リレーマラソンの説明　海外の山　涸沢山行報告	16
	04.15	総会後植物観察　写真の撮り方教室　蔵王岩でクライミング研修	30
	06.08	国立公園2泊3日トレッキングの旅　春山報告（堂ケ森～石鎚山縦走・立山・九重山）	25
	07.03	私のトレーニング方法　スライド（2500回記念登山・3000回記念登山）	19
	08.08	ニコル氏講演会の打ち合わせ　山の名前について	34
	09.01	4000回例会山行記念行事の打ち上げ（備後遺族会館）	30

ホームページを担当して
fsk-e.comに込めた思い入れ



高　垣　隆　光

04年5月頃、赤松さんより福山山岳会にホームページを開設するので協力して欲しいとの要請がありました。

何度か赤松さんのオフィスで会合を持ち、概略のページを決め、トップページの作成に取りかかりました。

04年8月頃トップページの概略を作成し、了解を得て少しずつページ数を増やしてゆきました。本格稼働は05年10月1日と公表していましたが、ずれ込み05年11月26日と設定させて戴きました。開設に向けご尽力戴きました福原、赤松、綿谷、江種、村上眞理各会員に感謝申し上げます。

さて、本題のfsk-e.comに込めた思い入れで御座いますが、山好きの方はもとより自然派志向の皆さんの情報交換、情報発信のツールとして、可能な限り新しいWeb技術を取り入れ、参加型のHPを構築したいものだと考えております。

最近会員の方でPCを購入したいが何が良いかなという声をよく聞くようになりました。私事で恐縮でございますが、父が、78歳の時よりPCを始めました。操作方法を電話でよく尋ねてきておりました。ご承知のようにWindowsには、リモートデスクトップ、リモートアシスタンスという機能があり、これらを使ってインターネット経由でPCのメンテナンス、操作方法のアシストを頻繁にやったものです。株取引、経済情報の検索等なかなか研究熱心でありました。その父も昨年6月83歳で永眠いたしました。父が使っていたノートパソコンは現在私の手許にあります。いささか旧式のPCですがメモリーを増設し、まだ現役で使用しています。

初心者の方、年配の方も気軽にfsk-e.comの世界に遊んでいただければ幸いでございます。

今後、HPを構築するに当たって

1. 会員ページにて、大容量写真の配賦が出来るようダウンロードコーナーを設けたいと思います。CDで写真を配賦しなくてもダウンロードコーナーにアップし、各自ダウンロードコーナーよりダウンロードできるようにしたいと思います。
2. 当初設けていた掲示板に、外国からの無作為の悪戯書き込みが削除しても次々とあり、これをしばらくの間、休止しておりましたが、日本語以外の書き込みを禁止する対策を施し、再スタートしております。

   また、会へのメール連絡のためのメールアドレスを公開しておりましたが、海外の違法検索ロボットに補足されているようで、毎日100件以上のジャンクメールが届くようになり、メールアドレスを変えても際限が無いので、アドレスをテキストデーターから画像データに変更し、やっと悪質ないたずらも収束したようでございます。サイト運営していて、一番苦慮しておりますことは、これらセキュリティー対策と、顔写真、氏名等個人情報をどの程度開示すればよいかでございます。この点、ご意見ご指導を賜れば幸いです。
3. 会員の皆様にブログページを開設して戴きまして、会員の皆様より、情報発信していただき、そのブログにリンクを張らせていただければと考えております。
4. これらの操作をサポートする動画によるマニュアルも考えております。
5. HP編集ソフトはmacromediaのSTUDIO MXで作成しておりますが、本ソフトと親和性の非常に高いコントリビュートを会で保有していますので、有志の方にお貸しいたします。HPの編集、維持にご協力いただければ幸いで御座います。

eはeコマース、eラーニングのe。com　はコミニュケーションのcomすなわち、パソコンやコンピューター、インターネット、ネットワークなどを利用して自然派志向の皆さんとコミニュケーションを図りたいという希望を込めて銘々させて戴きました。

事務局を担当して



江 種 幸 男

平成12年1月に事務局長の天野暢夫さんが亡くなられて、事務局の大役を分担して引き受けることとなりました。先ず「会報の編集」の役を、河崎忠昭さんたち数名で担当しました。

事務局の役割としては、

① 登山報告書　登山届け　入会・退会の取り扱い　会員名簿　無線機　庶務

② 会報編集　印刷手配　発送

③ スポーツ保険　日山協山岳遭難共催　市体協　県岳連

等がありますが、②の中の会報編集のみを引き受け、他は皆さんに分担していただきました。現在は、当時と比べ事務が少し増えましたが、下記のとおりずいぶん手伝っていただいています。

現在の役割分担は、

① 登山報告書　登山届け　会員名簿　無線機　庶務　会報編集　印刷手配　会の装備品の管理

江種　幸男

② 入会・退会の取り扱い　発送

世良　元

③ スポーツ保険　日山協山岳遭難共催

妹尾　英明

④ 市体協　県岳連

福原　不二雄

となっています。

会報編集の作業に一番時間がかかりますが、庶務的な作業として、常任理事会、理事会の準備とか総会等の資料作成（予算関係を除く）、2年に1回の会員名簿の作成があります。

皆様のご協力により、なんとか頑張っています。今後ともよろしくお願いします。

はいまつ　歴史寿ぐ

機関紙【ハイマツ】の歴史



小 土 井 薫 計

今回「はいまつ」が14年ぶりに復刊されることになった。心からお祝いを申し上げる。

新しい会員は、「はいまつ」とは何かなと思われる方もあるだろう。「はいまつ」は、福山山岳会の活動の記録、紀行、随想、小論文、短歌などなどをユニークにまとめた会誌です。「はいまつ」を読めば、その時期に活動した人々が、どんな活動をし、何を感じ何を考え、又会の雰囲気なども感じ取られた文章が集約されている。

福山山岳会は皆様ご承知のように、1919年（大正8年）2月23日発祥登山を行い、今日まで88年間、連綿と活発な活動を続け、ますます発展している日本有数の古い山岳会です。

福山山岳会会誌「はいまつ」の歴史を紐解いてみよう。

1952（昭和27）年5月18日
福山体育会山岳部 部報第1号
800回登山記念特輯号
1957（昭和32）年11月20日
臨時会報、福山山岳会アルプス号

その後は福山山岳会「はいまつ」と改称された。

はいまつNo.1（1959-昭和34年）
はいまつ2号（1960-昭和35年）
はいまつ3（1961-昭和36年）
はいまつ4（1962-昭和37年）
はいまつ5（1963-昭和38年）
はいまつ6号（1966-昭和41年）
[1500回登山記念号]
はいまつNo.7（1974-昭和49年）
はいまつ8（1976-昭和51年）
[2000回登山記念号]
はいまつ第9号（1980-昭和55年）
[草創60周年記念号]
はいまつ第10号（1988-昭和63年）
[草創70周年記念号]
はいまつ第11号（1991-平成3年）
はいまつ別冊（1993-平成5年）
[3000回登山達成記念誌]

※はいまつの名称は当時の表紙のタイトルを掲載。

爾後は今回復刊されるまで休刊。

なお現在までに発行された「はいまつ」福山山岳会会報、登山報告書などは保存されている。

次に「はいまつ」の記事の内容のごく一部を抜粋し紹介しよう。

はいまつのいわれ

「はいまつ」第1号が初刊されたのは、昭和34年2月、孔版刷りの56頁。10名の方が執筆されているが、大方の先輩は物故されている。

ところで、「はいまつ」という会誌名が決定したのが、第1号発刊の前年の11月であった。

福山山岳会の創始者である故藤井大観氏が次のように書いておられる。

這松〈注　はいまつ〉には微塵も虚栄追求の影が無い。

厳然として酷寒の猛吹雪にも耐え、常緑の操を堅持しているのは忍苦の象徴である。

幾千万株が仲良く並立しているのは団結心の旺盛を示す。

よく雷鳥の類をはぐくみ猛禽のめをさえぎるのは慈愛に富む証拠であり、遠く都塵を離れ、雪線に近く、樹木として高度の極限に定住するのは潔癖なのかもしれない。誤って群落を踏破せんと突入すれば進退に窮し始末におえなくなる。

剛毅で無欲で慈悲深く、知略に長けている……。

はいまつ3号から6号までは、縦十九糎、横十七.五糎の四角に近い製本が異彩を放つ……。

〈故かとう哲英　はいまつ第11号〉

福山山岳会の歴史

会の歴史については、平成5（1993）年5月23日発行、福山山岳会記念誌　3000回登山達成記念　「はいまつ」別冊（編集責任者　小土井薫計）に『福山山岳会沿革』としてまとめてある。当時の会員には配布してあるが、すでに14年経過しており、またその後入会された会員には、接する機会はないと思う。新しい歴史を追加した増補版が、作成されることを切に期待している。

これらの貴重な資料、記録に接すると、ひたむきな山への憧憬、登山を通しての人間的な思いが、それぞれの時代を背景に、克明に記され、充分に語り綴られており、深い感動を覚えると共に、畏敬の念さえ感じられる。

生　き　る
故大田祥子＜はいまつ第10号＞

朝日受け穂高の峰みね燃へ立ちぬ
モルゲンロートの言葉の如く

縦走のわが道しるべ野うさぎの
足跡点点と雪に続けり

大山の尾根を伝へば北壁は
吹雪荒るるに南壁は紅葉



第一回福山市民ウォーキング（里山歩き）大会



小林　征三

今、私の家に平成17年11月始めに生まれた、柴犬が居る。とても大切に育てている犬です。
この犬の事は後にして、第1回のウォーキング大会を思い出すと走馬灯のように色々な事が思いだされてくる。
会の諸兄には陰に日向にご助言、ご協力いただいた事、親切に対応して下さったマスコミ、想定外の多数申し込みに急に会場を綱渡りに体育館に変更できた事、リハーサルでの桜の記念植樹、又数日前になって駐車場が使えないかもとの連絡いただき大慌てした事、大会前までに、ふれ愛ランドのコースを歩きながらコージツ山荘で出会う人にチラシの手渡し中でも一番の思いでは、9月4日に蔵王山駐車場と山頂に大会の立カンバンを設置し山頂のボックスにチラシを10枚ばかり置きました。以後蔵王山山頂のボックスの減ったチラシの補充の為に、毎日、毎日、会社からの帰りに蔵王山に登りに行きました。

9月中頃でしょうか、時々、捨て犬と思われる犬に出会うようになり、初めは近づいて来るその犬が気持ち悪く、小走りに逃げていた。10月ともなれば日没も早く、会社帰りの時間蔵王山で出会う人はいなくなり、唯スベリ台の所で、その捨て犬が出迎えてくれた。夜の登山道の一人歩きの淋しさを私の後を毎日いつも一緒に歩いてくれる事で、いつの日かその捨て犬にある感情が湧いていた。
大会前日の11月2日、いつものようにその捨て犬と一緒に歩き、スベリ台の所まで下山したが、その日にかぎってなかなか離れずふと家に連れて帰ろうかと思いましたが、連れて帰れば山行きも制限されると思い、私は登山道をさけてブッシュの中を藪をこいて犬とやっと離れる事ができた。
大会も終わり、山頂ボックスのチラシ補充の仕事はしなくても良くなりましたが、その犬は気がかりで、会社帰りに時々ヘッドランプをつけて蔵王山に登りに行きましたが、いつの日かその捨て犬と出会う事はなくなりました。薬殺されたのだろうと想像するとあの時連れて帰ってやれば良かったと後悔した。大会の間中、夜道を一緒に歩いてくれた一匹の犬の命を救ってやれなかった事でしばらく心を痛めた。
5月から11月3日までの約半年間、私にとってたいへん大きな目標ができ、次々に出て来る仕事と問題に、やりがいを感じながらの日々を過せ、どの山に行った思い出よりもはるかに11月3日のウォーキング大会は心の奥深く残る事になりました。
その大切な思い出に、11月初めの頃生まれた蔵王山で出会った犬に似た柴犬を買いました。
平成17年11月3日は、私にとっていつまでも忘れられない日となりました。
皆さん、ありがとうございました。
大会準備の流れは別表の通りです。

別表

年号平成17年は省略します

4月19日 常任理事会にて福原会長より市民参加の登山大会をすると発表された
5月 5日 登山大会の候補の一つふれ愛ランドの森を会長、常任理事数名で歩いてみる
5月17日 常任理事会にて市民参加の登山大会の会場をふれ愛ランドで行う事を決定し大会企画運営を小林征三に指名される
5月22日 ふれ愛ランドに行き所長に協力をお願いする
5月29日 登山用品店コージツ山荘福井氏に大会の協力をお願いする
6月17日 常任理事会にて大会企画運営方法のたたき台を発表し実行日を11月3日と決定、赤松副会長に後援いただく団体への手続をお願いする
6月21日 理事会にて会長より大会を行う事が発表される
6月24日 記念植樹する場所の地主に許可をいただきに行く
6月24日 桑田造園に記念植樹の桜を発注する
7月 3日 東部安全登山講習会にて新市山岳会の方に参加をお願いする
7月 5日 山の集いの時、記念植樹購入の為の協賛金をいただく
7月10日 大会のチラシの図柄を作製し会長、副会長、事務局にFAXする
7月13日 事務局江種氏によりチラシの図柄をパソコンにて作製
7月17日 ふれ愛ランド所長に後援をお願いに行く
7月19日 常任理事会にて、大会チラシ200枚印刷する事、一般参加者の参加費を500円とする事決定
7月20日 チラシ200枚発注
7月21日 福原会長と一般参加者の参加費の事で再度話し合う
7月25日 チラシ出き上り
7月31日 大会のリハーサル、大雨の中決行参加者24名
7月31日 大田祐介市議に福山市の公報に掲載への手続をお願いする
7月31日 福山西警察署津之郷交番に大会の計画書を提出する
8月 6日 ふれ愛ランドへ会場使用許可書をいただきに行く
8月1日～10日　市内小学校72校公民館70 チラシ発送の封筒の宛名書き
8月12日 藤田氏に福山西警察署へ交通整理の計画書を提出していただく
8月18日 常任理事会で世良氏にチラシの小学校、公民館発送をお願いする
8月21日 福山市内に無料配布する新聞社リビング、プレスシードに行き掲載をお願いするが、リビングは休みだった
9月 3日 蔵王山にチラシを設置する為のカンバンの作製
9月 4日 中国新聞社、読売新聞社外、福山各支局各社をたずねるが、いずれも休みだった
9月 6日 FMラジオ・レディオビンゴで放送される
9月11日 中国新聞にFAXで大会案内する
9月11日 ふれ愛ランドにチラシを置いてもらう
9月18日 新聞各社に大会案内を郵送する
9月27日 理事会にて大会案内の役務をお願いし大会の方法を発表して協力をお願いする
10月 1日 福山市の公報に載る
川西氏に会場正面に掛ける大会名を書いていただく事をお願いする
10月 5日 読売新聞に大会の事が載る
10月18日 綿谷氏に記念植樹の杭を三好行平氏に依頼する事をお願いする
10月19日 参加者への記念品の大分タオル200枚を発注
10月20日頃 事務局江種氏より参加者100名を越えそうだとの連絡をいただく
10月21日 大会の式典会場を研修会会館から屋内体育館に変更してもらう
10月24日 救援の方のゼッケン作製
10月25日 事務局の江種氏より一般参加者が150名くらいとの連絡をいただく
10月26日 川西氏宅で垂れ幕を見せてもらう
10月28日 一般参加者多数で2つに分けて一方を赤松氏にお願いする
記念植樹を10月30日に行う事とした
10月28日 レジ袋購入
10月29日 ハピーマートにて子供用の菓子を買う
10月30日 大会2回目のリハーサル参加者34名
記念植樹桜5本植える
自宅にて大会参加者への記念品の袋詰め
11月 1日 駐車場案内の立カンバン作製
ふれ愛ランド大会の打上料理をお願いする
11月 2日 消防署へ救急の場合の救助の依頼をする
11月 3日 **ウオーキング大会　本番当日**
駐車場案内の立カンバンを設置する
駐車場の鍵を地主に借りに行く
大会の打上げ
駐車場の鍵を返しに行く
駐車場案内の立カンバンを回収

平成18年
1月24日 理事会にて大会の報告
参加者210名

柏餅今昔



石井　裕子

今年初めて柏餅山行のリーダーを任され、家でもあまり作ったことがなく不安でしたが、先輩が教えて下さるとのことで挑戦してみました。

当日は本隊が柏餅の葉っぱであるサルトリイバラを採りながら赤坂のふれ愛ランドのキャンプ場に来て、その葉っぱを使って柏餅を作る手はずになっていました。

10名余りの方には材料や用具も分担し、下準備をしていただきました。2ケの大型コンロとガスはプロパンガス屋にて借用しました。大きな鍋にザルや、もろ蓋、すのこなども必要です。蒸篭は3段で2セット組まれました。柏の粉は20kg、粒餡10kg、漉し餡10kgを会員のお菓子やさんから購入しました。500個位できる予定です。たちまち必要な葉っぱは前日に採ってきていただきました。

大量に捏ねたり蒸したり葉っぱに包んだりし、今回の参加者は47名でしたので、一人13個位分けられました。少しはお土産になったでしょうか。

いつ頃から恒例になっているのか、参加者中、一番古い鈴木さんに聞いてみると、40年前入会したときには既にあったとのことです。当時は福山山岳会の会員数は20名余、各人が飯ごうを持参し、各人が自分用につくっていたとのことです。飯ごうの底にすのこ代わりの枝を敷き、蒸して作ったそうです。飯ごうはお米を炊いたり、おかずの煮炊き、お湯を沸かしたり弁当箱になったりと便利な物とは聞いていましたが、このように蒸すのにも使用できるとは驚きです。でも、何人かはこげたりして上手く出来ず食べられない人もあったとか。

今はこのように大人数で何百個という数を作ります。時代は変わったものですね。

以前からこの行事に関わっている先輩は「粉はぬるめのお湯で捏ねたほうが良いのよ」「よく捏ねた方がなめらかになるのよ」などてきぱきと教えてくださいます。柏の葉にオリーブオイルを塗っておくと、後で御餅と葉が離れ易いそうで、一枚ずつ塗っていきます。耳たぶ位の柔らかさになるように力を入れて丁寧に捏ね、捏ねた塊はラップに包んで乾燥を防いだりしていましたが、餡子を入れる直前にもう一度捏ねるとなめらかさが増すというのは今回のアイデアです。

下準備をしていると歩行リーダーの小林氏が本隊を連れて来られ、一度に賑やかになりました。おしゃべりを弾ませながらもどんどん手分けをして作られます。会員のお孫さんも餡子を入れたり葉っぱに包んだりと楽しそうです。

40年以上前からの会の伝統を引き継ぎ、美味しい柏餅が作れました。初めての柏餅のリーダーでしたが、皆様の協力により無事に役目をはたすことが出来感謝しております。ありがとうございました。



子供や孫と行くキャンプ



藤谷　操枝

帝釈峡の近くにある永野小学校が廃校になり「ながの村」として改装オープンされました。私も植物観察会や芋煮会で良く現地に入っており何か利用できないかと考えていた時、会長からキャンプというヒントをいただきました。

そうだここなら自然が一杯で、宿泊設備もあり、また川遊びも出来て最高だと直感しました。

会長の意向は「夏休みに子供を預かり、お母さんを楽にしてあげたい」「子や孫にキャンプの楽しさを伝えたい」と聞いていました。

役員さん達の協力を得て何回も現地に出向き、計画を練りました。豊松村には紙ヒコーキタワーもあり、珍しく面白いので計画に入れました。

帝釈川のそばにある今話題の幻の鍾乳洞も入れました。きっとびっくりすることでしょう。

第一回目は参加者35名、内子供は18名でした。

年齢も中学生から幼児まで大半は小学生ですが幅広い年齢層がありました。

子供達はすぐに打ち解け仲良しになりました。

初めに行った山頂のヒコーキタワーから紙ヒコーキをつくり飛ばしあいました。

年長の中学生は「隊長、隊長」と呼ばれみんなからしたわれていました。彼も大人に代わり皆の面倒も見てくれました。みんなでテントを張りました。みんなで薪を取りに行きました。

竹を切り火吹き竹をつくりました。はじめは何をして遊ぼうかと思案していましたが心配後無用、子供は遊びの天才です。

縄跳び、綱引きあるものを使って遊びます。飯盒炊飯などの仕事も遊びに変えて楽しみながら頬を膨らませてやっています。女の子達は怪談好きでテントの中に集まり熱中しています。

キャンプファイア、花火遊び、川遊びの後昼食はソーメンを堪能しました。

工作の時間には竹トンボをつくり飛ばしました。

またこの時期「ながの村」では中国から来た人達が語学研修中であり、朝はラジオ体操をして交流もしました。

カレーライス、焼肉等食事は大変でしたがみんな良く協力してくれました。

来年はどのように成長しているのか楽しみです。

楽しいキャンプの体験でおじいさん、おばあさんの株も上がることでしょう。

子供達、山岳会の後継者になってくれそうですか。

皆さんも来年もまたお越し下さい。

待っています。



福山市民雪原ウォーキング



赤　松　勇　二



当時、副会長をしていた私に会長から福山市民を交えた雪原ウォーキングを企画するよう話がありました。「一般市民を冬山に連れて行くのか」ちょっと迷いましたがスキーや雪遊びや雪合戦等の経験も、私達の年代ではやっていたことなので、市民に雪山の楽しさ、怖さをどのようにして伝えるかを考え計画を立てました。

考えるにつれ、雪山というのは一般市民にとっては非日常的な体験であり、きっと感激するだろうと手ごたえも感じてきました。

　雪山のイメージは深い雪を掻き分けて進むラッセルの苦しさを思い浮かべるが、最近ではスノーシューの普及で雪に埋まらず、雪面をアメンボウの様にスースーと自由に歩けるようになり愛好者が急増し、ブームになりつつある。

初めての大会ですが参加者は45人。

山岳会の山行に市民が同行するような体制をとり、経験者の山岳会員が市民参加者をガードしました。

場所は吾妻山国民休暇村。標高差もあまりなく安全で有り、頂上に立った達成感もあり、展望も良いというのが選んだ理由です。

当日は雪も十分あり天候にも恵まれました。

先発隊は前日より現地に入り大きな雪洞をつくって迎えてくれました。

雪が珍しい子供達は、子犬のように雪の中を転がりまくっています。

2班に別れリーダーより用具の使い方、歩き方の説明を受けスノーシューを履き、いざ出発。

真っ白の白銀の世界、新雪に点々とつらなる獣達の足跡、これは兎、この足跡は雉ですよ。

アニマルトレッキングの勉強です。

平坦なところは快調であるが急坂となれば、体力とスノーシューの性能の差が大きい。

大汗をかき稜線に出ると強い風に氷のつぶてが加わり頬が痛い。

はるかかなたに雪をかぶった大山が眺められる。

体温を奪う強風が冬山の厳しさを教える。雪庇も発達している。上に乗ると滑落するよ、要注意。

穴を掘りツェルトを張って暖を採る。

見るものすることの全てが新鮮で面白い。

山頂で展望を楽しんだら、眼下に広がる雪をまとった山々を眺めながら下山しましょう。

上りに苦労した急斜面も帰りは一気に尻すべり。

快調です。

市民の皆様からも楽しかった、良い経験をしたと好評でした。

今後も更に研鑽を積み充実した大会として継続していけば良いと思います。

緑化功労賞を受ける



福　原　不二雄

「山の日」運動は山岳愛好者が「海の日」と同様に山の日の国民の休日を作ろうというのが発端でした。広島県植樹祭を発展させ、昨年は全国育樹祭が中央森林公園で開催され、その盛り上がりを受けて今年6月、「ひろしまの森づくり県民税」（森林税）が創設されました。この税金は森林を保全し、水源の確保、災害の防止のため森林の手入れの為に使用されます。

　このような経過を受け、平成19年10月21日「山の日」県民の集いは福山をメイン会場に県下7箇所のサテライト会場に約11,000人を集め開催されました。そのメイン会場である福山ふれ愛ランドの式典において我会が（社）広島県みどり推進機構から栄えある「緑化功労賞」の表彰を受けました。

この慶事を喜びたいと思います。

先ごろ、広島県農政課の方が事務局にこられ、いろいろ実情を聴取されたと聞き、候補に挙がっていることは聞いておりましたが、数多くの候補、団体の中から何故我山岳会が「緑化功労者」に選ばれたのか。

　何十年と続けられた蔵王山清掃活動、毎月のように実施される登山道の草刈、整備活動、登山者の為の標識の設置、登山道を利用してのウオーキング大会などの市民への啓蒙活動、この運動も今年で3回目を迎え定着してきました。更に今年は福山城の石垣や噴水の清掃、自然環境をテーマにした講演会なども実施、福山市の協働のまちづくり活動の一端も担うようになりました。

このような幅広い活動が認められて今度の受賞につながったのでしょう。

我々の登山活動を通じて、福山市民の健康増進、明るい社会づくりに貢献できることは我々の喜びとするところです。

　また、今日この受賞が出来たのも、先輩の皆様が営々と続けられてきた活動の成果のお陰であります。

受賞により我会の責務も増してまいります。

そして、この栄誉を汚さぬよう更なる精進を続けてまいりましょう。

皆さん受賞おめでとうございました。



コースガイド 80 ガイドブック 誕生の歩みの記録



萩原 有朋

1919年山岳会としての初登山から、創立80年を迎えるに当たり、三つの記念事業が企画され、その一つがガイドブックの作成です。
想えば1976年(昭和51年)2000回記念の時、当時の立花会長より、仮称(備後の山々のガイドブック)を作成する主旨のため多額の寄付を頂きました。実現化のため立花基金とし、何回か企画されたのですが、完成にいたりませんでした。
1997(平成9)年4月筆者が会長に選ばれ、80周年の記念事業になにをなすべきかを考えた結果、懸案のガイドブックを作成することにしました。

この記録は当事のスタッフの協力を謝し、各位の苦労を記録するのが目的です。
以下、コースガイドを作るに際して、事務局関係と編集会議の経過、及びガイドの執筆者と概略図・版画・写真等の提供は別表の通りです。

事業をするにあたって、幾多の不安材料がありましたが完成したのは、協力執筆を依頼した方と、多くの会員が何回も下見していただきました結果です。
又編集委員の方々は多忙にも関わらず編集会議に何回も出席して頂き、多くの仕事をしていただきました。
その中で特に名前を挙げたい方は、参与の藤井雅人さん、常任理事の熊野正さんです。
藤井さんは1954年の入会で会の歩みに詳しく、熊野さんは校正、編集面でのよき相談相手でした。
後記、藤井さんには費用面でも援助頂きました。
コースガイドに載せる山は先輩諸氏が歩いた備後、備中の山、更に希望の山を会報で募集しました。
初めて執筆される方が多いので、最近のガイドブックの傾向を研究し記載要綱を作成しました。
又最近は尾根を線などで書く概略図は減り、国土地理院の地図を利用する方法が増えており、使用許可を得ることにしました。そのため、私と熊野さんで広島にある国土地理院中国測量部に行きました。
地図にコースの書き込み方など、色々なアドバイスも受けました。平成11年国土地理院より複製許可がおりました。
この間、常任理事の三藤さんが広島に通勤されており、お世話になりました。
他の地図に関しては、福山市、尾道市からも使用許可を頂きました。

予算の件です。
会員には無料配布することにしましたが、予算案以外の余分な費用は出せないとのことで大変苦労しました。
私、熊野さん、平松さんで印刷所に出向き、再三に及ぶ見積の依頼、その他多くの話し合い協議をしました。
さて、予算内で納めるためには発行部数を増やす必要があります。
600部で1,260円、800部で950円、1,000部で840円です。私は1,000部と思ったのですが、会員からは600部との強硬な意見もありました。
仕方なく、予算内に収まる800冊を発注して200部は私が個人的に引き取ることにしました。
金銭面の苦境を前記藤井雅人さんより、多額の寄付を受け、助けていただきました。
感謝の言葉もありません。
最終的には寄付、残り本の販売等々で約20万円の黒字を会の会計に残すことができました。

想えば、黒字になったのは、編集委員の方がほとんど無報酬で何回も下見等をして頂いた結果です。
もう少し交通費など支払うべきであったと思っています。
私が個人的に購入した200冊も、多くの会員が一人で何冊も購入頂いたこと、及び新聞に記事掲載されたため、注文が殺到して在庫も無くなり、その後の多くの注文を断るに苦労しました。

想えば、コースガイドを企画して2年間、心休まる日はありませんでした。
書いていただける人がいるかどうか、金銭面、役員の中にも、賛否両論があり厳しい質問もありましたが、私は断固出版すると答えました。
尚、【はいまつ】は作らないのかとの問いには、永年の夢であったガイドブックを作って残し後輩に伝えるため、この度は作らないと答えました。

この時、友達の呼びかけで、四国八十八ヶ所の遍路参りをしたら少しは心が安らぎ、現在も時々歩き遍路参り、又マイカー等でお参りしております。

完成後はマスコミに取り上げられ追加注文が多く、断るのに大変で嬉しい悲鳴でした。
なにぶん初めての事で、反省する事が多かったと思います。例えば、編集実務の不慣れ、金銭面、印税がかかるかどうか、今後のため記念事業の基金の積み立て、ボランティアの限度、広告等いろいろありました。
最後に、この企画を最初に提案され基金を寄付された故・立花元会長に感謝します。

尚、雑誌(岳人)に寄贈させて頂いたところ次のような記事で紹介されました。

【1919年に活動を始めてから80年、本書はそれを記念して約80の登山ハイキングコースをガイドブックとしてまとめたものである。
刊行にあたり、何度も現地に足を運び、42人で手分けして、執筆したという労作である。
誌面をたっぷり取り、大活字と薄刷りの地形図に情報を入れた解かり易いつくりである。
各コースは、家族・一般・健脚と各向きに分類されており、初心者でも使いこなせる内容になっている。
80年間で3400回を超える山行に裏づけされた完成度の高いガイドブックだ。】

別表

事務局　関係の経過

年月日時間　　テーマ

1998年
1月　：会報に　山のガイドブックを作ることを発表。
　範囲を広島県東部　岡山県西部とし、希望の山を事務局に連絡をお願いする旨、会報に載せ募集した。
2月17日：建設省国土地理院中国地方測量部で地図使用について印刷方法その他いろいろアドバイスを受ける。
4月12日：総会において予算案　承認
4月17日：常任理事会において(ガイドブック)に載せる山名(案)を説明し編集委員を次の方に委託した。
　萩原有朋・清水順子・三藤敏照・世良元・多田由美子・熊野正・天野暢夫・福原不二雄・平松携・上原寿美子
　理事会において[ガイドブック]の事を説明
7月　：ガイドブックに関する事務局を会長、萩原有朋自宅とした。
7月28日：10―11　A社と打合せ　　17―18　B社と打合せ
8月11日：10―11　A社と打合せ　　13―14　B社と打合せ
8月20日：10―11　A社と打合せ見積
9月17日：19―22　常任理事会において　書名、見積もりを報告　再度見積もりをすることにした。
9月22日：13―15　A、B社と打合せ　再見積もり
10月15日：　常任理事会にて　見積もり額と今までの印刷物の実績
12月　：　福山市都市計画課　―万縮小　都市計画図の複製申告
　尾道市都市計画課　―万縮小　都市計画図の複製申告

1999年
1月20日：広島市　国土地理院　25,000、20万縮小複製の申告
　尾道市より複製の承認
2月18日：福山市より複製の承認
2月22日：国土地理院より複製の承認
3月　：会報で中間報告
4月30日：現地調査　神石郡
5月 6日：現地調査　三原市
7月 9日：原稿校正
7月20日：原稿校正
9月　：[コースガイド80]完成
　会員に無料配布　贈呈先配布　県連関係は役員会で渡す
　印刷所に会計より600部支払う　会長個人購入分200 部支払う
11月　：12月の会報に　別紙にて80周年記念行事の完成報告
11月 3日：蔵王山にて打ち上げ会
尚この事業に対して、下記の団体と各位よりお祝いをいただきました：
新市山岳会・福山市役所山の会・三和印刷・石田都美・池田剛・藤井雅人・瀬戸内ワンゲル会・福山歩こう会・アシーズブリッジ・パワーズヤマナカ

**編集会議の記録―覧表　**

年月日時間　　テーマ

1998年
5月 9日：13―17　執筆要綱、モデル文、地図記入方法、文字数、山名リストの検討、原稿依頼
7月27日：19―22　製本体裁の検討
9月 1日：19―22　執筆者との打ち合わせ
11月14日：9―17　現時点までの原稿チェック　用語の統一
12月 5日：9―18　原稿チェック　コース記号点検

1999年
1月 9日：9―17　文書校正と記録写真の校正
2月13日：9―17　校正
3月13日：9―17　校正
3月27日：9―17　校正
4月 8日：9―16　校正
5月 8日：9―16　校正
5月17日：13―18　校正
6月25日：14―17　19―22　最終校正
6月28日：13―17　その他
7月 1日：13―17　地図校正、
7月13日：9―12　その他
7月14日：9―16　ゲラ刷り校正
7月20日：　2回目ゲラ刷り校正
7月31日：　3回目ゲラ刷り校正　最終確認

執筆　概略図　版画　写真、等の提供は次の方です。

天野暢夫	3	山田義人	1	平松　携	2	藤井キヨ子	1
福原不二雄	5	藤井　繁	4	江種幸男	3	榎本正信	1
越智君子	2	田中安雄	2	溝部幸恵	1	佐藤律夫	1
熊野　正	4	石井芳男	1	藤井洋行	3	黒飛晴光	1
久保　充	2	小土井薫計	3	鈴木康仁	2	金山　正	3
加島信子	1	越智修三	1	橘高　照	2	山内充人	1
門田敏昭	1	河崎忠昭	2	佐藤光恵	1	三好利宏	2
三好行平	1	佐藤宇源	3	藤田昔三	1	多田由美子	1
藤井雅人	3	坂本　豊	2	萩原有朋	8	世良　元	1
清水順子	1	三藤敏照	2	谷坂治行	1	木村富枝	2
野田愛子	1						
上原寿美子	2						

＊数字は執筆頂いたコース数(山数)＊

贈呈先　―覧表
藤井元名誉会長　立花鶴雄(元会長宅)　河原田俊男　三好寿雄　藤井雅人
県連関係
種村重明　京才昭　長谷川忠彦　加賀谷建一　山田雅昭　平田恒雄

県連事務局
三好忠行　羽奈伝　田中勝彦
広島山岳会
他　加盟団体に3部計38部
国土地理院　福山市役所　尾道市役所　福山体育協会　福山教育委員会
瀬戸内ワンゲル会　福山歩こう会　誠之館ワンゲル部　尾道東高校ワンゲル部
福山図書館:中央②　東部②　松永②　北部②　県立図書館②
県立福山文化センター　尾道市立図書館　神辺町立図書館　国立図書館
府中市立図書館　沼隈町立図書館　西城町教育委員会　東城町教育委員会
新市町教育委員会
マスコミ(新聞は福山支局)　朝日新聞　中国新聞　毎日新聞　山陽新聞
サンケイ新聞　読売新聞　NHK福山　中国放送福山　RCCラジオ福山
広島テレビ　ホームテレビ　テレビ新広島
山と渓谷社　雑誌岳人　(中日新聞東京)

写団福岳
写真愛好家集団の思い出



斎藤　楠輔

好きこそものの上手なれ
下手の横好き

大正8年2月23日、当時の福山体育会藤井会長、中木評議員はじめ総勢13名が熊ヶ峰に初登山。これを発祥登山とし、同年6月福山体育会登山部を新設。

月日は流れ、昭和33年2月23日、福山山岳会の草創記念祝賀行事として第1回登山を実施した。爾来、山岳会会員の営々として弛まぬ努力の結果、本年8月に行われた富士山登山で第4000回登山の大金字塔を打ち立てる事となったのである。

月日は経つ。しかし、各会員の弛まぬ努力なしでは、会としての実施登山回数は伸びないのである。

この4000回登山を記念して様々な行事が催されが、その中の一つとして、久しく途絶えていた会誌「はいまつ」が、平成5年を最後にこの度、14年ぶりに再刊されることなった。

この間の空白を資料的にも埋めるべく、色々の出来事や資料なども掲載したいとのことであるので、そこで当会会員のみの写真同好会としての集まりであった、わが写団福岳の系譜を残すことも一興かと、稚拙な筆を起こした次第である。しかしながら写団福岳の前身となる同好会らしきものは、遡ること、平成3年のことであり平成9年頃になって、後の写団福岳の中心的存在となる人たちが集い始めたのであるが、何ぶんにも長い時間的経過のゆえ、ご当人たちも記憶の定かでない点も多く、些か不確実な記述となる恐れもあろうかと危惧するが、その点についてはご容赦願いたい。

平成3年。その後、福山山岳会の第9代会長となった坂本豊氏（平成17年退会）が、市内高美台にある氏の会社事務所に併設した、氏が主宰する同好会として「C ＆ C」を発足。この会には写真をはじめツーリングなど数多くの種目を含むものであったようである。参加者としては坂本氏をはじめ、後の写団福岳のリーダーとなる河崎忠昭さん他、当会会員や一般からの参加者など多数であったと聞く。

それから数年、平成8年4月、後に写団福岳の中心的存在となる岩室節子さんが河崎さんの誘いで「C ＆ C」に入会した。平成10年には同じく中心的存在となる江種幸男さんも参加し、月に一度の例会には夫々が持ち寄った写真をスライド投影し研鑽に励んだのであった。

平成11年3月15日から22日の間、天満屋福山店で第2回福山山岳会写真展が開催され、河崎さんを責任者として会員総出の展示準備、会場整備に当った。会員による出品数も100点を超え、同店8階の展示場には北海道の山から順番に展示し、壁面全体に三段飾りとなる豪華なものであった。入場者数の正確な記憶はないが、1週間を通しての大盛況であった。当時からの会員の皆さんにはご記憶があることと思う。

この写真展の直後、私が前述の3名に続き参加した。この年の2月、吾妻山での雪山研修の時、河崎さんから熱心な勧誘を受け3月度の例会から参加することになった。更にこの年の秋には瀬良悦男さん、山田弘さんが続いて参加した。私が参加した時には既に坂本氏が主催したという「C ＆ C」の活動的雰囲気はなく、私自身は先に勉強会をしていた3人の写真同好会としての認識であった。こうしてメンバーは6名となり、後の写団福岳の基礎が出来上がったのである。この後もずっとメンバーが持ち寄ったポジ・フィルムをスライド機で投影し、作品に対する意見を交換し合ったのであった。

私が参加するまで既に、河崎さんは平成6年度のふくやま観光写真展において、山野峡で撮影した「秋のくぐり岩」で銀賞を受賞。他にも同年、平家谷つばき展や翌年には福山フジカラーのわが町フォトコンテストに入選。また岩室さんも「C ＆ C」の他、中国新聞の写真教室に入会し、平成8年、全日写連公募展に入選。10年には福山市美術展覧会（以降、市美展）で初入選ながら努力賞を受賞。他にも平家谷つばき展、市主催のバラ展にも夫々、入選を果たしている。また江種さんも平成11年には市美展に初入選を果たし、その他、キャノンクラブ福山支部にも入会。その年の秋にはキャノンカメラの全国版機関紙に「ブナの森」がゴールド賞を、その他にも入選するなど引続き入選入賞を果たしている。先に勉強会を始めた3氏は冒頭に述べた、「好きこそものの・・」を地で実践していたのである。この後も、この3氏をはじめとし、これ以降に参加した諸氏も着実に他流試合（写真コンテスト）において実績を残していくが、それらは追々後述する。

私がこの同好会に参加して毎月1回、夜7時から約2、3時間程度、高美台の会場に通っていたのであるが、その1年後、坂本氏の事務所の都合上、この会場を別の場所に移転する必要に迫られた。その時、市内若松町に住む山岳会員の田中安雄さんのお世話で、新幹線ガード下にあった若松町の町民集会所を拝借することとなった。記憶が定かでないが、ここで2、3回勉強会を開いたのであるが、この場所が町民集会所というパブリックな場所であるので、いつまでもプライベートな勉強会をして居座るのも如何なものかと配慮の上、河崎さん、江種さんの尽力で平成12年8月より市中央公民館の一室を月1回借りて研鑽することとなった。

この若松町町民集会所の頃、我々もこの勉強会が回を重ねるにつれて、会としての名称が欲しいものと、しばしば話し合っていたのであるが、丁度、碩学の田中さんのお知恵も拝借しながら「写団福岳」（しゃだんふくたけ）と命名した。写団は写真撮影集団の略としてカメラ愛好家のグループの名前に多く冠せられているものであるが、福岳はご想像の通りわが山岳会から二文字を頂戴したものである。しかし、当写団福岳は山岳会からの財政的支援やその他一切の支援は受けていないものの、いかにも日本人的な帰属意識や寄らば大樹の陰的発想で、当時の坂本会長の了解も得た上で、この二文字を頂戴したのである。

グループのリーダー的存在である河崎さんの真面目さと温厚さから、来る者拒まず（半面、去る者は追わず）の方針で、中央公民館に勉強の場を移して以来、新会員も漸次増大し、即ち、平成10年秋に岩原節子さん。翌年1月には原田千枝子さん（2年弱で退会）、秋には広川緑さんが入会する。ここで会員も9名となり会員が増えるにつれ、グループを束ねるリーダーの呼称も必要となり、河崎さんを「塾頭」と称して旗頭になって頂いた。また江種さんには塾頭補を。

そしてベテラン連も引き続き盛んに他流試合で入選入賞を果たし、写団福岳の名前が山岳会の中で浸透する基となったのである。

岩室さん、江種さんは市美展、広島二科展はじめ、各人が所属するNHK写真講座、キャノンクラブでも大活躍し（紙面の都合で省略）、なかんずく平成13年には岩室さんがNHKサロン大賞展で全国一となる大賞に輝いている。古い山岳会員の皆さんはこの受賞については、会報でご紹介したのでご記憶にあるのではと思う。

こうしたベテランをはじめ会員の研鑽の結果、翌平成14年には写団福岳の歴史に輝かしい1ページを飾ることとなる。この年の7月、第49回福山市美展で写団福岳より応募した6名が全員入選するという快挙を果たしたのである。即ち、河崎、岩室、江種、瀬良、岩原の各氏に小生である。こ

の時は当然、そごう百貨店（現ロッツ）の屋上ビアガーデンで大乾杯となった。忘れ得ぬ快事である。

応募者全員が入選するということは、その後も今もって実現できない難事である。

しかしながら前述の各氏は、その後も着実な歩みで市美展をはじめ、一般公募写真展にもその実績を残していることは、山岳会員の皆さんには周知の事と思う。

ここで話は前後するが、平成13年6月には第1回となる親睦撮影旅行を実施した。　都合で参加出来ない会員もいたが、参加は家族同伴も可とし会員6名、家族3名の9名で催行し、1日目は京都の嵯峨野めぐり、2日目は奈良県境のあじさいで有名な岩船寺から浄瑠璃時、興福寺、奈良市内を巡る1泊2日のコースであった。

その道中、笑いが絶えず、特筆すべきは同じような和気靄々でも、山行時のちょっぴり緊張感の伴ったものとは異なり、底抜けに明るい笑顔、笑顔であった。また、岩室さんがギックリ腰発症5日後の腰痛を押しての参加のため、混雑する京都駅のホームで列車の時間待ちの間、仰向けに寝っ転がり、通行人が好奇の目で通り過ぎる周りで、我々が騒いでいる図は今も懐かしく思い出されてくるのである。

また、この旅行で撮影した岩室さんの作品が翌年の広島二科展に入選し、手前味噌ながら拙作がNHKサロン大賞展で奨励賞を貰ったことも良い思い出として残っている。

その後も入会者は増え平成14年春には佐藤光恵さん、中島典美さんが入会。

この年の11月には第3回山岳会写真展がNHK福山放送局の1Fギャラリーを借りて、展示作品数が約150点にもおよび、前期後期の2週間に亘って開催され、会員挙っての協力により盛況裡に終わることができた。

平成15年2月には、前年の応募者全員の市美展入選の余勢をかって、冬の関門地区へ第2回目の親睦撮影旅行を行った。この度も家族同伴可とし12名が参加した。この時も皆の飾らない笑顔は前回に負けぬ明るさで、一段と寒さの厳しい関門海峡の風を吹き飛ばしたのであった。全員が門司側から関門海峡をワイワイガヤガヤ記念写真を撮りながら、関門トンネルを下関側まで歩いたのも、楽しかった思い出となっている。



平成15年夏以降には大野一夫さん、横手洋子さんが、つづいて元会長の小土井薫計さんも花の撮影の勉強にと入会。かくしてこの時期、写団福岳も総勢13名を擁する大所帯となったのである。また江種夫人も時折参加され花を添えてくれたのであった。

このうち大野さんは、既に入会前の同年3月と翌16年には氏の出身地である松江市の市観光公募展に入選を果たしている。

この頃になると所謂、デジカメの普及が著しく、当会でもその例外ではなかった。その為、従来よりのスライド方式の検討会だけではなく、デジカメで撮影したものは検討用にプリント（2Lサイズ）したものを3枚程度持ち寄り、参加者全員でそのプリント写真も検討、研鑽用として意見の交換をするようにしたのである。これはこれでスライド方式にはない新鮮さも感ぜられたものである。

平成15年11月末、塾頭の河崎さんが急な病を得、緊急入院したのであった。まさに寝耳に水とはこのことで、日頃から元気で、山岳会副会長としての責務も精力的にこなしていた氏の入院は、山岳会としても大きな痛手であった。

その後、写団福岳は元々、例会に使用していたスライド投影機は、河崎さんのものを借用しており、折から各人も年末年始の繁忙期と重なり、結果的に河崎さんが元気に復帰して来る翌平成16年2月初旬まで休会となったのである。

再開した例会もそれから1年間、前述のようにスライドと持ち寄ったプリントを見ながらの勉強会を重ねていった。市美展、広島二科展、NHK大賞展、福山ばら写真展ほかのコンテストでも常連組は入選入賞するなど着実に実績を残していったのである。

しかしながら長年運営していると、当会は元来、専門的な指導者のもとでの系統だったものではなく、勉強会の方法としては素人なりに色々と工夫はしたものの、所詮、仲良し集団の限界で、お互いの批評もルーティン化、マンネリ化の傾向が感ぜられようになった。また、大所帯ともなると次第に、夫々の都合で出席率も低下するようになったのである。

そこでメンバー全員と相談の結果、平成17年3月の例会をもって、一旦勉強会は終了とし、時候のよくなる5月に第3回目の親睦撮影旅行を行い、それをもって解散することとしたのである。

平成17年5月21日･22日の両日、最終記念旅行となる第3回親睦撮影旅行を出雲の地とし、初日は松江城とその周辺そして八重垣神社へ。2日目は鰐淵寺、フォーゲルパーク、築地松地区を観光した。この時も家族同伴可とし総勢16名で、初めてお顔を合わす奥方などもいて、記念旅行に相応しい賑やかな顔ぶれとなった。

ともかく、この会の旅行は日頃は山で気持ちを分ち合った面々であるから、遠慮の垣根は全くないし、前述したごとく、ここでは山でのような、ある種の緊張感もない。大いに盛り上がったのは云うまでもない。



この解散後においても、平成17年には岩室さんはアマ･カメラマンなら一度はと願望する二科会本展に見事入選を果たしたほか、広島二科展、市美展、NHK大賞展などに、また江種さんは市美展、市ばら写真展に、瀬良さん、岩原さんも市美展に入選。翌平成18年には江種夫人、中島典美さんも市美展にするなど、メンバーの活躍は続いていることをご報告して筆をおきたい。

こうして写団福岳は9年に亘る歴史を閉じたのであるが、その間、メンバーの研鑽により数々の写真コンテストに活躍し、また過去の山岳会写真展の開催では、その知識を生かし寄与したことは自負するが、こうして記念出版の会誌に寄稿できるように山岳会の中に於いて、我々の活動が認知されたことについて、メンバー共々よろこびとするところである。

第四章　山と語らい、山に想う



夜明けの常念岳



静寂・尾瀬

大山遭難事故



小土井 薫計

3000回登山達成記念事業を終えた半年後の、平成5年（1993）年12月26日、佐伯喜信、村上世履、佐藤明子、小宮祐一の4名が、大山天狗沢に消えた。

12月26日深夜、4名が帰って来ないとの連絡があった。翌27日、大山寺に現地本部、福山（福山山岳会事務局）と広島（広島山岳連盟事務局）に連絡本部を設け、1月2日までの7日間、大山全域の捜索援助活動を行った。その結果1月2日11時45分、大山天狗沢下部の雪中深くに埋もれた遺体を発見し、4名を収容、捜索活動を終えることができた。

7日間にわたる捜索救助活動は筆紙に尽くし難いものがあった。厳冬期荒天のもと、早朝から夕方まで連日の捜査活動は、必ず探し出さねばならないという執念と、山に消えた仲間に対する岳人たちの、厚い友情があったから出来たと思う。また福山山岳会後方支援隊は、多人数の宿泊、食事、配車、連絡、物資の調達などに、不眠不休、精力的に働いた。

この間捜索活動に従事された方々の人員は次の通りだった。

米子警察　77名　　鳥取県山岳協会　25名　　大山救助隊　9名　　広島県山岳連盟（福山山岳会員を含む）　207名　　現地サポート隊（大山寺での救助隊の食事など）　48名
福山対策本部（事務局）　54名　　広島県山岳連盟本部（本部）　10名

総合計　430名

その他日本ホイスト株式会社、関係会社などなど多くの方々関係各位に、物心両面にわたるご協力、理解あるご支援をいただいた。

追悼登山・追悼式

追悼登山：平成6（1994）年5月29日
午前6時福山出発

大山天狗沢へ登った。すばらしい登山日和に恵まれた。大山北壁がくっきりと浮かび上がり、天狗沢も指呼の間に望まれた。

参加者：　ご遺族　40名　　県岳連など関係者　22名　　福山山岳会会員　74名
計136名

追悼式：遺体発見現場近くに祭壇を仮設し、12時10分から開始。故人への黙祷、小土井会長の追悼の言葉、種村県岳連会長挨拶　献花　山の歌合唱　藤井キヨコ理事の「北壁鎮魂詩」朗読などしめやかなうちにも追悼の意のこもった、立派な追悼式が行われ参加者に大きな感動を与えた。

大山天狗沢事故報告書・追悼集

福山山岳会では事故発生10ヶ月後の平成6（1994）年10月、事故報告書・追悼集『煌きの氷壁』を上梓した。

『煌きの氷壁』の内容

第一部 事故報告書

事故発生時の状況、捜索活動の経過、支援隊の活動状況、遭難原因の検討、報道記事の抜粋などがまとめてある。

第二部 追悼集

故人の在りし日を偲ぶ、遺稿・遺作の写真・追悼文などがまとめられている。体裁A版280頁（内カラー写真25頁）上製箱入り（豪華本）

『煌きの氷壁』は、福山山岳会会員のご協力と、日本ホイスト株式会社社長村上正士様の、ご支援により出来あがりました。

そしてその際、お世話になった団体、個人並びに当時の福山山岳会会員に謹呈されました。絶版です。福山市内の図書館などには、配布してありますからご覧になれます。

厳冬の大山北壁



平松　携

私はこの数年、大山北壁の見えるホテルで温かいコーヒーを、やるせない想いで飲んでいる。決まったテーブルで飲みながらの北壁の大屏風岩と天狗沢が窓ガラスをとおしてよく見える。福山山岳会員の遭難事故が脳裏に重く浮かんでくる。遭難事故から13年が経過した。2006年厳冬の2月、早い朝のレストランは客はいない。ホテルの人は、朝食の準備を慌ただしくしているが後方なので視野に入らない。大山北壁は、稜線が東西に広く延び、しかも高くて厳しい。稜線の東側に日の出ると思われる箇所が明るくなっているが、まだ稜線から太陽は出てこない。稜線には谷から吹き上げる強風にのったガスが晴天の空に舞い上がる。福山山岳会発行の大山遭難追悼集「煌めきの氷壁」の頁をめくると雪をかぶった大山元谷の写真（桑田立男会員撮影）、ゾンデによる捜索活動の写真（読売新聞社提供）SOB小屋における捜索会議、大山天狗沢における福山山岳会の追悼登山などが目に留まる。「煌めきの氷壁」は、事故報告、追悼集であるから、必然的に編成もそのようになっている。福山山岳会員の執筆者をみると、小土井薫計（会長）、萩原有朋（副会長）、天野暢夫（事務局長）、鈴木康仁、福原不二雄、黒飛晴光、三藤敏照さんなどである。また、編集委員会で苦労された熊野正、藤井繁・キヨ子夫妻、金山正、河崎忠昭さんなどとなっている。当時の福山山岳会の総力をあげた「煌めきの氷壁」といえる。

佐藤光恵、上原寿美子、岡田美枝会員と私は、SOB小屋で捜索隊員の炊き出し班で駆けつけた。大山の捜索に入る40～50人程の山男を温かい食事によってもてなす事に紛争した。1994年の正月（元旦）の朝食は、「おとそに雑煮」であった。雑煮に入れる餅を石油ストーブの上で百数十個焼いているうちに夜が明けてきたことを思いだす。

温かい朝食をすませた山男達は、雪の降る大山のふところに消えていく。何時SOB小屋に帰ってきても温かい飲み物（酒、茶、コーヒーなど）と食事で苦労をねぎらう役目が炊き出し班と心得ていた。鈴木康仁会員から、寒くて冷たい捜索活動の昼食は、凍るような「むすび」は喉を通らない、熱いお茶で「むすび」を胃へ流し込んだ、と聞いた。

こんなことがあった。遭難者の家族は報道関係者に知られないようになっていた。夜になり報道陣をさけて、その日の捜索状況を遭難者の家族に伝えに宿に伺ったことがあった。当時は携帯電話はなく、無線による現場との交信であった。数隊に別れた捜索隊から無線による交信が捜索本部のあるSOB小屋に、そのつど入ってきていた。遭難者の家族にも無線機があったようで、山の仲間が「遭難者の山男、山女を捜し回る交信の会話」を無線機で聞いていると、家族の方は話された。家族の方は、入山し必死に捜索活動する山の男や、後方で捜索隊のサポート役に感謝の意の言葉を選んでおられた。そして私は、家族を励まし、翌日の捜索日程などを伝え、生存を祈りながらその場をあとにした。

1月2日の昼前、遺体が発見された。遺体発見者である黒飛晴光会員が福山市に帰られ、福山山岳会にその場の状況を報告された。報告される場にたまたま同席していた。黒飛晴光会員の報告は、概ね次のようであった。ゾンデによる午前中の捜索活動は、昼食時間になり、他の多くの山男は昼食時間に入った。黒飛会員は、昼食前の最後のゾンデを雪面に刺し込んだところ、石でも木でもない別の感触を得た、という。これまでにない感触のため、少し掘ってみると鉛筆のような太さの「色のもの」が見えた。さらに掘ると鉛筆でなく「ザイル」であった。その場にいた捜索隊員が必死に掘って4名の遺体を収容した。結ばれたザイルの色からAさんとBさん、CさんとDさんの組であった、と。

その晩、福山山岳会の役員が分かれて通夜にお参りすることになった。その場にいたこともあって、通夜に遺体発掘現場の様子を遺族に伝える役目を仰せつかった。通夜の読経の始まる前に遺族に伝えるには、遺族のどなたに、事故現場の様子を具体的にどの程度伝えるか迷った。迷った結果は、奥さんが適切と思っていた。ところが残された子どもさんや女性である奥さんが念頭にあり、通夜や葬儀を前にして遺体発掘現場の生々しい残酷な現実を伝えることはできなかった。伝えたのはお兄さんになった。遺体発掘現場の状況を男性のお兄さんに、かなり詳細に、しかも正確に伝えた。しかし、伝えられなかった部分もあったように思う。が伝えられなかった内容は13年後の今日、思い出せない。

この数年、厳冬の大山北壁の天狗沢と屏風岩をせつない気持ちで眺めている。朝早い時のコーヒーには香りも味も感じない、心の重い想いである。遺族の子供さんは成人されたであろうか。



厳冬の大山北壁

山歩きの楽しさに出会った私



野田　道子

人生の節目・還暦を迎える前に、一つくらいは何がやりたいかを決めていなければ、定年後の自由な時間がありすぎて、急に老け込むという話をよく聞いていました。

特別これといった趣味のない私ですが緑の美しい自然の中を歩くことは好きでした。
私の体力がどのくらいのものか分からないが自分に見合った山を歩いてみれば、至福の時間がもてると思い山岳会へ参加するようになりました。

草創登山の時などには、この会は歴史があること、先輩の歩んでこられた苦労、昔の服装のこと、若い頃登った時の山の様子、日頃のトレーニングのこと等々、あらゆることが話題になりました。私にとって、山好きの方々との会話は自分の知らない世界のことが多く参考になることばかりでした。

周囲からのアドバイスは私を少しずつ成長させてくれたように思います。いくつかを挙げてみると、「登山は積極的な休暇なんだから、明日からの活力を与えてくれ、心優しくなれるよ。」
「山の花は写真などで見覚えたり、写真に撮って帰って調べたりしながら、一つひとつ覚えていけばいいのよ。あせらなくていいのよ。」「読図を習慣づけることが大切よ。」等々です。

さわやかな気持ちと充実感を持ち続けられるように山歩きの基本をマスターし、計画を練ってゆっくりと急がず、山歩きを仲間と楽しみたいと思っています。

家族と自分の健康と安全登山を心がけながら一回でも多く参加したい。そんな気持ちでいる私です。

里山あれこれ



小土井 薫計

私の里山観

「里山」と云う言葉はよく耳にする。里山とはさてどんな山なのだろうか？　人里、村里、山里、古里などとはどう違うのだろうか？ 里山のイメージを求めるために、まず、岩波国語辞典のさとの項を開いた。

それには、

①人家がある程度集まっている所。人ざと。「里を離れた山奥」いなか。在。内裏（だいり）以外の京都の町。いろざと。遊郭。中古の行政区画。郡に属し、人家五十戸から成る地。郷と書くこともある。

②ある人が育った家。などとあった。里に山を続けた〔里山〕。

何となくわかった様にも思えるが、まだすっきり理解はできない。里山という言葉が使われていない時代、これに当たる語として、私はよく〔背戸の裏山〕との表現を用いていた。そしてあちこちにリポートも残している。しかし里山という新語が流通しだした後は、この語の方がよく人の心をつかんでいる様に想い使わなくなった。

里山学入門〈2002年　中村慎吾著〉によれば、里山の定義はつぎのようにされている。「伝統的な農業生産・日常生活のため、身近な自然へ人びとが入り、自然へ手を加えながら資源の持続可能な利用を通して形成された二次的自然」と。学者の見解はなかなか難解だ。「里山とはどんな山?」について、私はこんな山だと書いている。（NHK福山文化センター　第234回　野山の植物を楽しむ　解説資料より）〈山にはクリの木が生え（クリの木は海抜約700m以下の土地に育ち、稲作上限地帯にほぼ一致する）、近くには人びとが住み、田畑には四季折々の作物が耕作され、古い社（やしろ）や祠（ほこら）も見かけられる。すなわち人の営みに深くかかわる山野の広がりを、里山と呼んだらよいと思う。〉上記の〔里山観〕は、かつて私が幼少時代過ごした「ふるさと」を脳裏に描いて構成したものである。

ちなみに私は幼少時代、海抜約550m近い油木高原〈吉備高原〉の中央部に住んでいた。

周りは山また山と山並みが続いていた。小学校1年から毎日、上り下りのある山道往復8㎞を通学していた。車は荷車が中心で、移動はすべて歩いていた。私の山歩きの原点はここにあった。

私の「ふるさと」＝「さとやま」だ。

里山の四季

里山には四季のうつろいがある。私の「ふるさと」は帝釈峡に近い。一帯の地質は石灰岩に覆われ、石灰岩の母岩も随所に露出する石灰岩地帯だ。日陰にまだ残雪の見られる頃、フクジュソウが顔を出す。

フクジュソウは広く分布しており、早春の花としてもてはやされ、かつては多くの家々の庭先に植えられていた。今では乱獲され少なくなってしまった。

惜しい。続いて白やピンク、また白とピンクの絞りの花をつけるケスハマソウ、ぴんと花びらをそり返したカタクリ、清楚な白花のイチリンソウもよく見られた。

新緑が芽吹き始める頃になると、コバノミツバツツジが花のトンネルを作り、ヤマブキの枝には黄花が一杯。まさに春爛漫の季節を迎える。

ホタルが乱舞する頃になると、ハルゼミ、遅れてアブラゼミの大合唱が始まりだす。カブトムシも現れるようになる。裏山のコナラ林の、ひときはよく成長した木の傷口に、集まるカブトムシを採りに行き、よく遊んだ遠い昔の記憶は、今でも鮮明で忘れられない。後年墓参の際、カブトムシの住み家を訪ねたが、コナラの木の傷口はすっかり乾き、カブトムシは見られず空しい想いだった。

アカトンボ（アキアカネ）の群れが見られるようになると、秋も次第に深まり、オミナエシの花が風に揺らぐようになる。

この季節、忘れられないものに、鎮守の森の秋祭りがあった。

クライマックスになると、沢山の太鼓の音にあわせ、山鳥の羽で作ったしゃぐま〈冠の類〉をかぶり、特有の衣装を着けた、大勢の踊り子による勇壮な踊りが繰り広げられた。秋の収穫をよろこぶにふさわしい一大行事だった。

しかし何時しか過疎と少子化の波に押され、以前のような賑わしい祭りは行われなくなった。寂しい限りである。冬の寒さは本当に厳しかった。現在より積雪量もはるかに多かった。あかぎれとしもやけに悩まされながら、春の到来を待ちわびたものだった。

里山の暮らし

約40年位以前までは、伝統的な里山の暮らしが続いていた。各農家は思い思いの地に点々と居を構え、集落を構成していた。何代も続いている家が多く、家長制度が確立し、集落内には暗黙のきまり、しきたりが守られていた。

そして安易には他を受け入れない傾向もあったように思う。しかしその後封建的な制度は改められ、経済界には高度成長の波が押しよせ急激な社会構造の変化が生じ、里山の暮らしも全く変わってしまった。伝統的な里山の暮らしは、米作りを中心にした、自給自足の体制により成り立っていた。つまり水田稲作を基盤にして里山文化が発展していた。

こめづくり

米作りは、種まきから始まり、苗代づくり、田ごしらえ、田植え、水の管理、除草、稲刈り、脱穀、精米へと続いた。田植え時期には多くの人手を必要とするので、近隣の人びとは共同で田植えを行っていた。その間には、相互扶助、助け合い、近隣の和合などなどの美風も培われていた。また田植えには激しい労働を伴うので、共同田植えが終わると、「花田植え」と称する慰労の行事も、地域によっては行われていた。米という字は、米作りに八十八回にわたる手間がかかっていることから、字になったとよく聞かされていた。

また水田の一隅（多くの場合少量の水が湧き出ている箇所）には田の神様を祭り、水が枯れることなく、豊作を祈る風習もあった。現在の機械化された米作りには隔世の感がある。

黒毛牛

伝統的な里山の暮らしを支えていた、黒毛牛について記してみよう。たいていの農家の母屋の横には、「だや」（注　駄屋？　駄は馬に関する語のように思うが、「ダ・ダ・」とか「ダァーダァー」とか牛に綱をつけて操る際の、掛けことばとして使われていた。駄は馬に限らず地方によっては、牛に使われることもあるのでは?）と呼ばれる立派な「牛小屋」があった。普通小屋には二部屋があり、各部屋には一頭の成牛、若しくは子連れの親子牛が飼育されている場合が多かった。

しかし農家の規模、季節などにより、飼育される牛の頭数は違っていた。

この牛は、すきを引かせて田の掘り起こしや、マンガを引かせて田の水面を平らにするためなどのほか、刈られた草や、収穫物の運搬等の使役に、またたべ残した飼料、排泄物は堆肥作りにも使われた。さらに子牛を飼育して売れば、かなりの現金収入になるなど、生活の一端を担い、生活の中に溶け込み貴重な存在だった。各農家とも牛を非常に大事に扱っていた。

各地に牛神さんが祭られ、鳥取県大山の中腹にある大山寺は、牛の神さんとして信仰の対象になっていた。かつての牛はこのように崇敬されていた。しかし現在では肥育された肉牛としての価値しかなく、牛小屋も無用の長物となり、農家の物置に使われたり、取り壊されたりしている。

肥だし（こえだし）

こめづくりは過酷な労働を伴っていたが、中でも「肥だし」作業はきつかった。屈強な人しか出来ない作業だった。前述した牛小屋1部屋の広さは、通常6〜8畳程度だった。牛はこの中に囲われ、特に使役のないときは、終日餌を食んでいた。餌は春から秋までの、青草がある時期は、田の畦や

原野などで毎日、早朝、露が落ちないうちに刈り入れられた草が与えられた。毎朝草を刈り、与えることは大変な作業で、勿論留守は出来ない。これがほんとの朝仕事だった。

霜が降りるようになると、米の収穫を終え、取り入れられた稲わらを押し切りで短く刻んで、米ぬか等をふりかけ与えていた。しかし牛糞が直接牛につかないようにする為、敷き藁は常に与え、しとねとされていた。刈り草や敷き藁と牛糞や尿の、踏み固められたサンドイッチは次第に堆積して、うず高くなると「肥だし」が行われる。牛を外に出してつなぎ、牛小屋を開放して、「肥だし」がはじまる。

牛によりしっかり固く踏みかためられた草やわら、し尿は、いちいち三つ鍬で掘り起こし、堆肥舎まで運び込まれる。狭い牛小屋の中で行われるこの作業は、牛の体臭、糞尿の悪臭が立ち込め、特に気温の高い時期は難作業だった。

半日以上この作業は続けられて終わる。堆肥舎に運び込まれたこの物は、静かに醗酵を繰り返し、すばらしい堆肥になり、早春の頃各田んぼに配られ、こめづくりの重要な肥料として使われた。

ここにも里山に生きる農民の、自給自足の生活の知恵が感じられる。最近の言葉で表現すると、自然と調和した循環型社会の一環と言えるでしょう。

畑作（はたさく）

私の古里の地域は、水田のほか、水田に適しない耕作地は畑として利用されていた。平均的に見ると、田（六.五）、畑（三.五）位の割合だったと思う。はたさくとは、畑で作物を作ることの総称だ。稲の収穫が終わると、畑には麦の種まきが始まる。（当時は畑ほぼ全部に麦が植え付けられていた。）麦が芽を出す頃には木枯らしも吹き始め、長い寒い冬がやってくる。

やっと地面の雪が消え始めると麦踏（むぎふみ）の時期になる。地上に出た幼い麦の芽を足で踏み、麦の分けつを増やす作業だ。実に単調な作業だった。麦は大麦、小麦が栽培されていた。
畑のげし（岸の方言）の新茶の茶摘が始まりだすと、麦も穂を出し始める。田植えも終わり、しばらくすると麦刈りが始まり、梅雨の時期も近づいてくる。

昔の梅雨は長く、雨も多かった様に感じていた。梅雨の晴れ間に麦刈りを終わるとよいが、長雨に遭うと麦は茎についたまま種から芽を出し、茎は倒伏してしまう。こうなると麦は減収、長い間の苦労も無駄におわる。現在ほど天気予報の精度は高くなかったので、観天望気（勘）により作業日を決めていた。麦の収穫が終わると、畑には大豆、小豆などが植えられた。

特に小豆の収穫は、天候により左右されることが多く、収穫量に変動があり、小豆の値段は毎年大きく変動していた。葉タバコは換金作物の筆頭として、広く栽培されていた。しかし専売品だから、いろいろと制約があり、また栽培、収穫、収納には激しい労働と、家族ぐるみの協力が必要だった。

いま古里を訪れてみれば、かつての水田は放棄水田となり、畑に作物はなく、畑の面影すらなくなっている所も随所に見られ、寂しい思いで一杯だ。

水車小屋

昔は谷川のほとりには、必ずと言っていいほど水車小屋があり、水車の「コットン…コットン…」という杵の音がのどかに響き、農村の風物詩になっていた。谷川の水は樋により、水車の上から落ち、水車を回す仕組みになっていた。水車小屋は個人あるいは数軒の共同として使われた。

朝、臼に玄米を入れておくと、翌朝までに水車の動力により、杵が断続して落ち、精米できる仕組みになっていた。水車場は必ずしも家の近くにあるとは限らず、水車場まで遠い場合も多く、往復にはかなりの時間と労力が必要だった。

この営みも長い間習慣化されて、続けられていた。今では観光用の水車小屋しか残っていない!!。

本稿は「温故知新」の想いをもってまとめた私のふるさとへの挽歌です。

私の入会　そして再開



山内　充人

確か24歳の時でした。手ぶらで一人観音岩場に出かけ、ザイルもつけずに登りつめると（今ではとても恐ろしくてそんな事は出来ませんが）、岩場のテッペンでザイルを枕に横になっている男がいる。驚きましたが、彼も驚いたはずです。それが藤井繁さんとの出会いでした。その時は少し話をして別れたのですが、その後、既にザイルパートナーだったK君と繁さんの3人でよくあちこちの岩場に出掛けるようになりました。鈴木さんを紹介してくれたのも繁さんでした。

翌年2月、K君と大山屏風岩鏡ルート途中でルートを間違えた為、時間がかかりすぎ、最終ピッチを抜けた時は既に真っ暗、やむなく岩壁上部で雪中腰掛ビバーグ、米子の町明かりは今でも憶えています。
しかし、福山では下山が一日遅れたことで遭難騒ぎ、鈴木さん、繁さん達が大山に向け捜索に出掛けようとした時、間一髪、無事下山の連絡が入ったとの事でした。
迷惑をかけ、また心配してもらった事に感謝をし、入会する気になりました。

結婚後は山から遠ざかっていましたが、忘れることの出来ない1993年12月19日、広島での山岳指導員講習会の帰り、佐藤明子さんが「23日、岩場観音での練習の後、キャッスルホテルで忘年会をするんだけど来ない?」との誘いで私だけ練習はせず、忘年会に参加しました。10人位の参加だったと思います。佐伯君とは何回か会って知っていましたが、村上さんとは初めてでした。みんなの熱気に押され、佐藤さんの「また始める?」の問いかけに返事をしました。
26日の遭難、当初は信じられませんでした。3日前に話したばかりの3人、どこかに生きているとの思いで捜索に参加、しかし、年明けの発見。
その年末、黒ちゃん、洋行君とテント泊で大山天狗沢に出掛け、線香を手向けました。
その後は毎年末どこかに出掛けています。
「また始める?」の問いかけに答えているのでしょうか。
入会から33年、遭難から14年、月日の経過の早さを感じています。



白馬・大雪渓

山仲間のHさん



上原 寿美子

当会会員のHさんが、「まだ五十歳になりませんか」と、山行で会うたびに私にそう尋ねる。私が五十歳になったその日、「やっと五十歳になりました」と、手紙を出した。
すると折り返して、「五十歳は立派なババアです」と、返事が来た。

封書の中にはたったその一枚だけが入っていた。これを言いたくて、何度も聞かれていたのかと思うと、唖然とした。
数年後、Hさんが五十歳になられた時、私も、「五十歳は立派なジジイです」と、お祝いのお便りを出した。

あれから15年経った。私もとうとう本物の立派なババアになった。当会の会員さんの孫と、私の息子が結婚して、私は待望のおばあちゃんになった。ところがその孫と私の誕生日が、昭和と平成の年号こそ違え、同じ年月日であり、孫の誕生を聞いたのは、比婆山の山頂であった。
偶然はまだ外にもあって、私の父も同じ月日の誕生日で、三代続いたことになる。

山岳会に入ったおかげだと思っているが、たくさんの人とのとってもいい出会いに恵まれ、本当に感謝で一杯である。
このHさんとの忘れられないエピソードがいくつかある。
そのひとつには、Hさんが初めてリーダーをされた日は暑い日だった。途中の休憩のときに、「初めてリーダーをする時は（これからよろしくお願いします）と言って、ビールの一缶ずつでも配るものよ」と、私が冗談で言ったのに、「それは知らなかった」と言うと、走って下まで行ってビールを買って来られた。そのときは、私の方がびっくりしてしまった。
その日、頂上のトイレで6、7人並んでいた。「トイレには年寄りに先に入ってもらうものよ」と、言ったら、「へエー、山岳会にはそんなのありか」と感心されたり、誰かが夫たちのことを濡れ落ち葉に例えて話をしていたら、その例え話しにも、えらく感心されていた。
こんな例は、みんな知っているものと思っていた。で、Hさんは日頃若いお嬢さん方とばかり接しているので、こんな話は出ないのだろうと思った。このHさんには冗談は通じないし、それでいて口は悪い。気弱な私などは、いつもへこまされっぱなしである。

「ところでHさん、若い人たちの指導はもう充分ではないですか。これからは、愛すべき山岳会の熟女の指導をよろしくおたのみ申します。あ、それから会員のみなさん、私にシッポをつかまれないようにお気をつけ遊ばせ、次はあなたの出番かもよ。」



山と歴史のロマンをたずねて



綿谷 弘志

登山とか山行に全く無縁だった約20年前、念願だった黒四ダム観光に行った。しかし憧れの黒四ダムより、アルペンルート途中の室堂から見た立山連峰の美しさに驚いた。何日経っても何をしていても寝ても醒めても室堂の、あの光景が脳裏を離れなかった。
「あそこへ登ったら何が見えるんだろう」と毎日思い出しているうち、我慢出来なくなり翌月、親友二人に「あれを見て感動しない奴とは金輪際縁を切るぞ」と強引に誘い、室堂山荘に一泊しジーパンにスニーカーで雄山山頂に立った。富士山と富山湾が前後に見える光景に声が出なかった。
声の代わりに涙が出た。同時に今まで「山男」とか「山で遭難」等の活字を見る度に、冷ややかな眼で見ていた自分を大いに恥じ大いに反省した。罪滅ぼしと云えるかどうか。
当時私の交友関係の顔ぶれを見ると、大多数は山に無縁の人達ばかりだった。その人達を此処へ立たせてみたい、この感動を共有したいと考え身近な友人達に相談し、2年掛かりの準備の末、50人の友人を引き連れ雄山を目指した。今から考えるとトンでも無い無謀な行動だったと冷や汗が出る。モノを知らないとは強いモノである。
「小さな親切、大きなお世話」とはこの事であったろうか。
スナックのママにブティックのママ、美容院のオーナー、不動産屋さんが居ればタクシー・ドライバー、大会社の社長とホステスさんの隣に、零細企業の専務も居る。無関係の第三者が見たら「何の団体か?」と呆れたと思う。メンバーの大半は「ビアガーデンより高い所へは行った事がない」のを自慢する連中ばかりである。山の知識、経験が豊富だったのは現山岳会会長の福原氏だけだった。
その後、彼の薦めで親友4人と福山山岳会に入会した。
何でも許し合え、気心の知れた男だけの雪山、沢登り、北ア…愉しい一時もあったが、やがて仲間は一人去り二人去り、私だけ残った。
仕事の関係等で、福山山岳会の例会山行に滅多に参加出来なかった私は、たまに参加しても話し相手が居なかった。
独りよがりの疎外感と孤独感を感じて、その内、「自分は山が好きなのか」、所詮は「やはり野に置けレンゲ草」では無いのか、と思うようになっていた。それならば福山山岳会に在籍していても意味が無い。仲間は脱会していったではないか。会報に全く眼を通さなかった。

当時山岳会で顔見知りと云えば、福原氏はともかく「小土井氏・天野氏（故人）・上原氏」くらいだったか。この方たちと縁が切れるのは寂しいが、山岳会の事は我が人生の中での一ページと割り切ろう。脱会の腹は決まった。未練は無い。最後になるであろう会報に何気なく眼を通した。
或る部分で眼が釘付けになった。「坂本龍馬脱藩の道研究。希望者は〇月〇日〇時、中央公民館へ」。私は驚いた。
「山岳会でこんな企画をするのか。こんな事を考える男がいるのか」。中途半端に歴史が好きな私は、司馬遼太郎の幕末維新に関する本の中でも、特に「龍馬が行く」は2回読んでいた。

わが国の歴史上、最大の動乱期は幕末維新であると私は思っている。無数の憂国の志士が激動の時を駆け抜けたが、諸国の藩を考えた時、薩摩、長州と並び土佐藩の存在は大きい。幕末維新の核と成ったと言っても過言ではないのが西郷隆盛と坂本龍馬だとも思う。疑問符の一つが「龍馬の脱藩」だった。脱藩に至る経緯はともかく、私の疑問は実際にどんな山道だったのか。いや、道の無い所も有ったはず。どのようにして四国を斜めに駆け抜けたのだろうか、推理は果てなかった。ひたすら空想を思い巡らせた時期もあった。その坂本龍馬脱藩の道が実際に自分の足

で歩ける。小躍りした。舞い上がった。当日は仕事を休んで中央公民館へ駆けつけた。

7、8人の会員の方が談笑していたが、当然、誰一人として知った人はいなかった、話し相手がいない、場違いな所へ来たと思った。私の居場所は無い。一瞬「帰ろう」と思った。しかし脱藩の道が歩きたかった。1999年5月だった。

この時のリーダーは田中安雄さん、サブリーダーは斎藤楠輔さん。この方達との出会いは、私の「福山山岳会を脱会する」と言う考えを見事に吹っ飛ばしてくれた。「山岳会」と「歴史街道」、一見相反するようだが、歴史街道とは言え標高1,000m前後の山々、峠をいくつ越えたか。後日、斎藤氏が参加者に「坂本龍馬脱藩の道を往く」と云う小冊子を配布してくれた。彼は文中述べている。「(略)…歴史を辿りながら地元の史址や人情に触れる事は、ドイツ・ワンダーフォーゲルの発祥精神と健全な山旅の心に併せた、まさに中高年登山として第二の青春を謳歌したものであった‥(略)」学生時代、ワンダフォーゲル部に在籍し多くの山を踏破した彼ならではの言であろう。徹底した「モノを家に残さない」主義の私だが、この小冊子だけは今も大切に保管している。

翌年から田中さんを中心にした「熊野古道」に参加した。5年連続での熊野古道も素晴らしかった。



5回の山行で写した1684枚の画像は今でも時折、パソコンのスライドで楽しんでいる。

特に印象深かったのが「十津川村」。日本で一番広い村と聞けば北海道か東北地方をイメージするが、その村は奈良県吉野郡に位置する。標高1,000mを越える山を100座以上有する広大な村は、行政区として日本最大の面積を有する。以前から興味深かった。歴史の重要な転換期の舞台裏に必ずと云って良いほど躍り出る「十津川の男」。
何ゆえ、「十津川の男」なのか。例えば、後醍醐天皇をして「今夜は十津川郷の者が警備してくれているから枕を高くして寝られる」と言わしめ、他方、龍馬が盟友、中岡慎太郎と京都近江屋で暗殺された時、警護役だった下僕の藤吉を安心させるべく、刺客が云い放った言葉も「十津川郷の者です」だった。「十津川」と言う固有名詞は明治維新以前の日本の歴史を考える時、節目節目の舞台裏に見え隠れする事が多い。

十津川村の山中を登っている途中、それは果無(はてなし)山脈の麓だった。斎藤さんがイキナリ走り出した。
登り道だが眺望が開けつつある場所だった。私は「オイオイ、斎藤さんは我慢に我慢をしていたトイレを遂に見つけたか」と思って見ていたら彼はカメラを構えた。何枚も何枚も写している。
私も同じ場所に立った。私の目には何の変哲もない風景だった。
しかし何処かで見た風景だ。何処だったか。そうか、思い出した。JR福山駅の構内で「十津川村」を紹介するポスターに載っていた同じ風景だった。
私の節穴の眼は、当初は何の変哲もない風景にしか写らなかったが…眼前に展開する光景は、まさしく十津川村そのものだった。私はシャッターを押しながら、ふと考えた。

当時、私は初めて福山山岳会でリーダーをさせて貰えるようになった頃だった、自分みたいな人間にリーダーが務まるのか。私のリーダーで誰が参加してくれるのかと悩んでいた時でも有った。しかし「山と歴史」を組み合わせた山行なら自分にも出来るかも知れない。シリーズで企画し継続して出来ないものか。出来るかな、難しいかな。しかし、やってみたいと思った。きっかけは「十津川村」だったが原点は「坂本龍馬脱藩の道」だった。「山と歴史のロマンをたずねて」このネーミングの決定は「脱藩の道」の時が初対面だった村上博満さんにアドバイスを頂いた。理事に任命され初めての理事会で「山と歴史のロマンをたずねてシリーズ」をやりたいと宣言した時、居合わせた全員が暖かい拍手と笑顔で、賛同してくれた事を今でも鮮明に覚えている。

2006年11月の出雲神話街道で「山と歴史のロマンをたずねてシリーズ」は既に10回を数えた。今思うと、どの企画もソレなりの紆余曲折があった。しかし、苦労した何倍もの喜びもあった。そしてそれらは全て私一人では出来ない企画ばっかりだった。何人の人達に支えてもらったか。

「青は藍(あい)より出でて藍より青し」と云う言葉がある。同じ意味合いで「氷は水より出でて水より寒し」と云う言葉もある。教えを受けた者が、やがて教えてくれた人より優れた存在になる事を云う。
この言葉は見方を変えれば、教えを受けた者は、教えてくれた人を追い越すのが恩返しとなる、と言う事であろう。

残念ながら私は到底、田中さんや斎藤さんに恩返しは出来そうにない。しかし不遜ながら、いつの日か、福山山岳会の中で私に恩返ししてくれる人が現れるとしたら、その日まで「山と歴史のロマンをたずねてシリーズ」を細々とでも良い、ささやかでも良いから続けたいと思う。
陰で支えてくれている人達に感謝しながら。



天城越え(旧天城隧道にて)

蔵王山と私



田中安雄

福山山岳会から今度はいまつに何か記事をというご指示をいただき、さて年々低下している頭脳で思い巡らした結果、やっと一つ思いだした事がありましたので何卒ご笑讀の程を…。

私が山岳会に入会しましたのは、思い起こせば20年前、60歳の頃だったと思います。
入会後は先輩諸兄姉にいろいろの山々に、ご親切な誘導を賜り、心から感謝しています。
その中でも、蔵王山は自宅からの距離が近く、又高度的にも私の体力にマッチしていましたので、好天気の日には一人で毎日登山する習慣がつきました。結果として3年で1000回登っております。
それによって、福山近郊であれば何所にいても、蔵王山々頂を見つけさえすれば、自分の居場所を逆算することが可能となり、羅針盤さえあれば方向を見つけて自宅へ帰ることが出来ます。



頭注意　足元注意



栗村　繁允

思えば8、9年前になりますか、入会前の見学的参加をさせてもらい府中の「亀ヶ岳」に登った時の事、新米の私は先頭集団に付いて歩きました。
途中足元の草むらにワイヤーが張ってあり「足元注意」すぐその先に倒木が覆いかぶさりうっかり通ると頭を打つところを抜けると「頭注意」の大きな声が有りました。
その意味は判るが、後方を登って来る仲間に伝達を促す言葉であるとは後で気がつきました。
私が黙って歩いていると私の後ろの人が大きな声で復唱しましたが、なぜか途中で立ち消えになりました。
どうしたのかなと思うと同時に「やったあぁ」とか「うわぁ惜しい」と言う声が同時にあちこちで聞こえ、何と皆イヤホンを付け長野オリンピックのジャンプ競技の実況放送に夢中だったのです。
「頭注意 足元注意」は、うわの空だったようです。
そこに登場なさったのは立派なヒゲを蓄え外見は怖いが頼もしい体育の先生みたいな人が現れて以下の注意をしました。
「この先広い道に出たら車の往来の邪魔にならない所に全員揃うまで待機して下さい」。
「山行の目的は、体を鍛え自然に親しみ和を尊び、出かけて帰るまで安全に、がモットーだ」、「何事もリーダーひとりの責任ではない!参加者一人々が自己責任の原則を常に念頭に置き、気持ちを持ち引き締めて行動するように」…
先日、総会で会長挨拶の中で聞いた中に、リーダーはただ早く歩くのでなく、全体の足並みを考えて弱い人にペースを合わせまとまり有る行動を… また別の日のリーダーの方は「町なかを通過の時は、あまり間を空けず長い行列を作らずまとまってスマートに歩いてください」等々…
私は体力も衰え、今後出かける山は低山になるのは間違いない。しかし、せっかく見つけた楽しみだから皆様の迷惑に成らないよう洞察力・判断力・決断力・天候・地形の事等を、配慮しつつ長く山行を続けたい。

山越えの熊野古道



門田　敏昭

四国八十八ヶ所の巡礼を終えて、平成17年当初から「熊野古道を歩いてみたい」と思っていた。

熊野古道のうち、熊野本宮から那智大社に至る約40キロの道は小雲取越え・大雲取越えと呼ばれ、その昔、熊野詣での行者たちが汗を流した道である。
今もすべて山道だという。この道ならば観光客の姿もなく、静かな山歩きを楽しみながら古道歩きの気分を味わえるに違いないと思った。

私は3月14日青春切符で福山を出発し、田辺で一泊して翌日、歴代の上皇たちが歩いた田辺から熊野本宮に至る中世の険路（中辺路・40キロ弱）を歩いて翌々日である17日朝、小雲取越え入口に立った。
先日お参りした熊野本宮大社の賑わいが嘘のような静けさである。道端に「小雲取越え入口」と書かれた道しるべがひっそりと立っている。これに従い細い道を登る。杉林に入ると道幅が広くなり、緩やかに山腹を縫った。あたりは深い杉木立で静かだ。道の傍には苔むした石仏が枯れ草の間から顔をのぞかせ昔の人たちの往来のあとをわずかに留めていた。古道の面影の残る石畳道を過ぎるとぱっと展望が開けた。小雲取越えの最高所で北と西の眺めがよい。腰を下ろして汗を拭う。低い山々が重なりあう向こうに、果無山脈がひときわ高く連なっている。
汗がひき雨が降りだし薄ら寒くなってきたので再び歩きだす。
しばらく下ると立派な林道が現れ驚いた。やがて茶屋跡という所に出た。
その昔、休み茶屋があったようだ。
古びた立て札には「茶屋のおやじは、はるか谷底の道を登ってくる白装束の姿を見て、急いで米を蒸し、餅をつき彼らの到着を待った」ということを書いてあった。ここまで登ってくるのに、そんなに時間がかかったかなあと、少し大げさな話だと思った。

雨は大降りとなり、そのはるか谷底に今日泊まる集落がかろうじて見えている。苔むした石畳のでこぼこ道を下りきった所が小口の集落の入り口らしく、少し大きな仏様が石囲いの祠の中に立っておられる。
かなり古いもののようだ。ここを通る熊野詣での人々の哀歓を、じっと見続けてこられたに違いないと思った。私もその中に加えてもらおうと手を合わせた。

翌日、夜明けと同時に宿を出た。大雲取越えは20数キロを越える長丁場である。すぐに急な尾根の登りになった。山峡は深く、雪は舞い、霧が立ち込めていて薄暗い。古道の両脇には天にもとどく棚田の形跡の残る杉木立が幽霊のように浮かぶなかに石畳が続く。道幅は1.5m間位である。両端にある石は厚い苔に覆われ真ん中の石は一か所だけ滑らかにへこんでいる。
昔からずっと人々が真ん中ばかり踏んできたに違いないと思った。数百年という年月がそれに刻まれていると思うと、思わず手を伸ばして撫でてみたくなった。

やがて越前峠の登りにさしかかった。
高度差600メートルもある。ほぼ真っ直ぐで休みなしの登りが続いている道中随一の難所で胴切り坂と呼ばれている。
これが「蟻の熊野詣で」という言葉を思い出した。蟻のようにこんな苦しい坂にもめげず、黙々と登る白装束の列をなしてお参りする様子を言ったものらしい。
今ではとても考えられない光景である。
現に一昨日熊野本宮ではあれほど参拝者で賑わっていたが、この山越えではわずか大学生一人に出会ったにすぎなかった。
それほど昔は人々の信仰心が厚かったのだろうと思った。

3時間かかって標高900メートルの峠の頂に着いた。道中の最高所であり積雪は3センチ位で銀世界であった。木は茂って展望はなく、残念であった。ここにも立札がある。峠の由来を書いた終わりに「旅人が多く、旅籠が栄えた。駕籠屋が繁盛し、駕籠かきのはく草履を作る人が忙しかった」とある。これは、風が吹けば桶屋が儲かる理屈だなと、昔も今も変わらぬ景気拡大の有様に一人うなずいた。この先、いくつも登り下りを繰り返し、大雲取山（標高1,000メートル）の山腹を巻き気味に那智へと下っていく。

ここからの展望はよかった。東に熊野灘が意外に近く、青く輝いている。北から西にかけては目の届くかぎり山また山が連なり、まさに「紀の国は、木の国」である。
それから古道を下り2時間位で舟見峠に着いた。さしもの長丁場もあと少しで終わりである。木々の間越しに海が見える。
大雲取山から見た海より青い海が、すぐ近くに見える。
その昔、熊野詣での人々が望んだころは、今よりもずっと広大な眺めだったのに違いない。
そして「おお海だ」「舟が見えるぞ」と涙を流したことだろう。私もそれと同じ思いにかられた。
那智大社と青岸渡寺は、そこから一投足の距離である。お参りをして石段を下るとき、左手に那智の滝が見えた。
胸のすくような一筋の白い帯が夕陽に輝いていた。
翌日は、那智から右に熊野灘を眺めながら新宮まで歩き、速玉大社にお参りした。

私は、このように100キロにも及ぶ熊野三山を無事歩き、お参りできたことにお礼を言いたい。

残る余生は、巡礼の旅で終わりたいものである。

合掌

四国八十八ヶ所　　歩き遍路　同行二人

平成14年10月10日～12月9日



瀬 良 悦 男

(一)

団体でお参りをしている頃、歩き遍路さんを時々見かけていましたので、究極の歩き遍路をしたいと思っておりました。

しかし、二ヶ月もの休暇は会社勤めの身では残念ながら取れません。

平成14年3月で定年を迎えたので、さあ、これからと、志を遂げたい一心で、周囲の皆に、遍路に出ると宣伝して頭を丸めて、後には引けないような状態を作って背中を押してもらいました。私は子供を小さい時に、亡くしておりますので、子供と両親の供養の為にも、途中で挫折は出来ないと思いながらも本当に二ヶ月間歩き通すことが、可能だろうか、不安な気持ち一杯でした。

阿波の国（徳島県）は発心の道場
土佐の国（高知県）は修業の道場
伊予の国（愛媛県）は菩提の道場
讃岐の国（香川県）は涅槃の道場

10月10日いよいよ家内と娘に、一番霊山寺まで、車で送ってもらい、門前から勇躍お遍路に出発しました。



1日目は七番十楽寺までで、2日目には、足に豆ができ、それが段々大きくなり、吉野川の潜水橋を渡っている時パチンと破れました、ようやく十一番藤井寺へ着くことができたのです。

そこから、十二番焼山寺までの山道は、八十八ヶ所随一の難所であり、「遍路ころがし」と言われております。登り下りの連続で厳しく、遍路ころがしと言われる所以とつくづく思いました。

足の豆は、日に日に増して痛いし、厳しい道であります。焼山寺の門前に着いた時は、正直言ってほっとしました。

次の日は、十三番大日寺から十八番恩山寺までの予定で歩き始めましたが、足の豆が化膿して、歩くのにも痛いのです。

恩山寺まで行くのは諦めて、途中の民宿に泊まりました。足の状態が、最悪になり、明日は恩山寺と立江寺まで行って、帰るか続けるか、決めようと思いました。立江寺で、残念ながら出直そうと思い、一旦治療に帰ることにしました。（10月15日）

帰宅した翌日、お大師様のお陰を頂いたのです。

叔母から電話があり、叔父と従兄弟が、病が重く入院しているとの、連絡がありました。

まさか、見舞いに行った、翌日に叔父が亡くなるとは、思ってもみませんでした。

その翌日又も従兄弟も亡くなり、お大師様は、私が帰って来ることを、見ておられたかのように、3日間でお見舞いとお別れに行くことが出来たのです。

その間に治療していた足も良くなったので、10月22日お遍路に再度気構えを整えて出発したのです。

(二)

気構えも新たに、立江寺に遍路の無事を、お願いし、二十番鶴林寺へ向かって歩き始めました。

四国八十八ヶ所歩き遍路は、総延長約1400㎞と言われ、福山から青森県の八戸までの距離に相当します。

徳島県の道は悪く「日和佐トンネル」の歩道は壁から50㎝位の所に、白線が引いてあるだけで、大型トラックが通ると、笠が飛ばされそうになるし、体も振られ、恐い思いをしました。

般若心経を唱えながら歩き、顔は汗と涙と鼻水で、くしゃくしゃになり、トンネルを抜けると、生きていることに感謝し、ホッとしました。

この様なトンネルを通り抜ける時には、「南無大師遍照金剛」をお唱えしながら歩きます。

「南無」は帰依し発心する、身も心もおまかせすること。

「大師」は弘法大師さまのこと。

「遍照」はご本尊さまの慈悲の恵みは、誰へだてなく草木にいたるまであまねく照らすこと。

「金剛」はみ仏の教えは普遍不滅で金剛のようであること。

つまりご本尊さまの御教えの如く生きられたお大師さまに帰依し、身も心もお任せいたしますとの意味なのです。

歩き遍路で、一番の難所は、累積標高差を基準に考えますと、阿波の藤井寺から焼山寺へ登る道です。

それに続くのが、雲辺寺と石鎚山系の横峰寺、その次が阿波の鶴林寺、土佐の神峰寺。

道のりの厳しさを考えると、二十三番薬王寺から二十四番最御崎寺に至る太平洋を見ながら歩く海岸線の道で、3日間の内1日は、家が一軒もない道です。

(三)

善根宿とは、歩き遍路の人々に対して、無料で泊めてもらえる、お接待宿のことです。善根宿にはお蔭様で何回も泊まらせていただきました。どこももったいなく頭が下がります。

善根宿で特に心に残りました所は七十六番金倉寺と七十七番道隆寺の間にオパールニットと言う会社が多度津町にあり、そこに接待所善根宿【まんだら】が設けられています。

そこでのことです。

電話で予約連絡を入れておいて到着してみると、社員の方が案内してくださり、設備の説明もして頂きました。

男女別の部屋になっており、布団もあります。シャワーの設備もあり、お湯も沸かしてくださっています。

お茶、コーヒーも遠慮なく飲んでくださいと言われ、ミカンと茶菓子も置いてあり、自由に食べてくださいとのことです。

何から何まで至れり尽くせり、本当に心より手を合わせて感謝させていただきました。

しばらくして社長の奥様がこられたので、善根宿を作られた時のお話を聞かせてもらいましたところ、当初は食事を出されていたそうです。ある日、一人の遍路さんが来て一ヶ月位住み着かれたそうです。その遍路は米がなくなれば米がなくなったと言い、それから先は次から次へと、あれとこれと、買って下さいと書いたメモを渡されたのです。米などは社長宅で買うより多かったようで、奥様はあちこちと少し安いお米を探されたそうです。

ある日、社長宅へ以前お世話になった方から礼状が届き、文中に泊めて頂いたばかりか、弁当まで作ってもらいありがとうございました、と書かれていました。ああ、それでお米が早くなくなっていたのだと、奥様は思われたそうです。

しかし、その遍路さんは、その人なりに、自分にできるお接待をされておられたのです。

それでも、家計が成り立ったのは、お大師様のお蔭様ですと奥様が言われるのです。

途中から社長も来られ一緒に相槌を打たれていました。

そのようなことで、一応食事を出すのをやめられたそうです。そうするとその遍路は何処かへ出て行ってしまいました。

あるとき、70歳位のおばあさんが、泊めてくださいとこられたのです。そのおばあさんは、動物的な目をしていたようです。

（その日の糧と泊まるところを探しているのでそのような目になったと思います）

その人は身寄りもなく、帰るところも無く何年もお遍路をしていたそうで、その晩倒れてしまい、入院させたのです。
一ヶ月位入院しており、その間の費用は社長さんが払われたのです。
治って退院し、【まんだら】へ帰ってきたのです。
これから先、どうしようかと思い、名古屋の人のようなので親戚を探してそこへ電話をしました。すると当方は縁が無いので関係ありませんと言われました。こちらでは、これ以上面倒をみてあげられないので、名古屋へ帰ってもらおうと社長が旅費を負担したそうです。やれやれと思っていると、1日だけですぐ戻ってきてしまったのです。
どうしようかと、思案し養老院へ入れてもらおうと役所と散々掛け合いました。役所の言うのに、この町の人でなく、名古屋の人だから、そこの養老院へ入れてもらったらどうですかと言われたので、いやこの人は何年もお遍路をしているのだから、もう四国の人ですよ、と返事しました。何回も交渉された様子で結局入れもらえたのです。
後日、養老院の方へ行きますと安心されたのか、厳しかった目から、穏やかな優しい目をされておられたようです。

普通にはできないことに、感動を受けました。この話には後日談があります。
その話を聞きつけて私も入れて下さいと何人もこられたそうで、それ以後は丁重に断られたそうです。
このような、素晴らしい善根宿をされておる社長夫妻のようには、私は到底真似のできないことですが、お大師様に助けられているからこそできるのですと、奥様は話しておられました。できないながら、その万分の一でも、今後人様のお役に立つことで、返していける自分にならさせてもらいたいと、つくづく思いました。

(四)
泊まりました所で、印象深く残った場所は、高知県に入って室戸岬へ行く途中、水尻海岸の砂浜にテントを張った時、夜になると、満天の星で空が綺麗で、こんなに星があったのかと感動しました。香川県（讃岐の国）に入ると、最後の難関は、雲辺寺です。
そこを下ると、だんだん結願の寺、大窪寺が近くなり、もう歩かなくていいのかなと、ふと思ったりします。嬉しいような悲しいような、複雑な気持ちになるのです。
手作りの納経帳を持参し、表紙の裏に好きな言葉、
「まだたりぬ　歩き歩いて　あの世まで」
と自分で作った句、
「亡き子との　歩き遍路や　大窪寺」
と書いています。
納経所の人が、それを見て、何才で亡くされたのですか、と問われ、三才と答えました。可愛い頃だったでしょう、との慰めに、「ジーン」と来て、子供と供に歩みこし八十八ヶ所の道中を思い出し涙が止まらなくなり、言葉が出なくなりました。誰も居ない境内で、太師堂前の階段に座り、ぼんやり雲の流れに目をやり、時のたつのも忘れていました。
何年たっても、何時になっても、忘れられないものです。親と言うものは、一生涯背負って行くのだと思いました。ゆっくり腰を上げ、次の八十番国分寺へ向けて、歩き始めました。
国分寺から白峰寺・根香寺へは、旧遍路道で、森林の中を歩き、誰にも会うことの無い、快適な遍路道でした。

とうとう次の日は女体山を越えて、大窪寺で結願する予定です。
大窪寺に着き、人の居ない境内で、長い間思い詰めていた歩き遍路四国八十八ヶ所が結願出来ました。この足で良く歩いてこられたものだと、心からの感謝をし、家族にも友達にも、まして四国の皆様、そしてあの人この人にも、心からの感謝が出来ました。
納経所で御願いして、今晩の宿に通夜堂をお借りして、泊まることにしました。お寺の境内の中に、泊まらせて頂くことは、本当に感謝でございます。
ご本尊薬師如来様の懐の中で眠る様で、安心して眠ることが出来ます。
結願した最後の夜でもあり、遍路を歩き始めた頃を思い、又途中の厳しかった事を思い出し、それから、途中で出会って、色々お世話になったお四国の方々の事を思い、又途中一緒に歩き一緒に泊まった、お遍路仲間のことを思い出して、なかなか眠れませんでした。

一番霊山寺までここから、2日間の日程です。
四国八十八ヶ所参拝させて頂いた、御礼参りをして、やっと遍路が結願するのだとの思いで、御大師様に再度御願いして、霊山寺へ向けて出発することが出来ました。
大窪寺からずっと下りで、切幡寺の下に出て、それから遍路を初めた頃に歩いた道を、東に向かって戻る。
最後の晩の泊まりは、熊谷寺の通夜堂をお願いしたのですが、先客があるのでと、鐘楼へ泊まらせていただきました。
重要文化財ですので、火の用心だけはしてくださいと言われました。
鐘楼内は吹き抜けになっていて、夜寒いかなと思いましたが、余り寒さは感じませんでした。

(五)
その晩、福山の友から電話が入り昨日は通じなかったが、今日は何処に泊まっているのか、何時結願の予定か、等々聞いてくれるのです。
明日の夕方には霊山寺に着いて、明後日には福山へ帰る予定にしていると言うと“良く頑張ったね”と友は心より喜んでくれました。
出発当初から心配してくれて、途中で燃料のガスが無くなった時、道中に同じものがなくわざわざ福山から四十番観自在寺まで送ってくれたりもしました。
この時ほど本当にありがたく、又友を思う心遣いに感謝と言うには申し訳ないほどの心になりました。

この様な思いで、次の日これから歩く1日が2ヶ月間歩いた最終章です。しばらく歩くと最初に泊まった神社が見えてきました。期待と不安で泊まった日のことを思い出し、よくここまで歩いてこられたと、お大師様と四国で出会った多くの方に感謝も一入(ひとしお)です。
昼ごろ友より電話あり、二番極楽寺に着いたら電話をくれる様にと言われ、もしかして此方へ来ているのではと聞くと、結願を一緒に祝いたいとの話し振りでした。
極楽寺に着いて、友に電話を入れると、駐車場を見てくれと言われるので、見慣れた車があり、友が手を振ってくれており、“よく頑張ったね”と労ってくれました。朝3時に起きて福山から迎えにきてくれたとのこと、感激と感謝とで顔が涙でくしゃくしゃになりました。
霊山寺まで後20分でしたが、友が車で後を伴走してくれました。

(六)
寺に着く間に家族のこと、亡くした子供のこと、友のこと、そして、お四国でお世話になった方々の思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡り、涙が頬を伝い止りませんでした。あっと言う間に到着したように思われました。



霊山寺の本堂・大師堂で、御礼の般若心経をあげさせて頂き、大窪寺よりは違った思いで、お参り出来ました。
納経所で最後のページにご宝印を頂き、無事歩き遍路四国八十八ヶ所が結願致しました。
合掌



追記　四国八十八ヶ寺霊場会より、公認先達の称号を頂きました。

郷愁



山本 マチ子

郷愁―その熱き思いは、いつも古里の山々へと帰っていきます。

はるか郷里の山へ思いを馳せる時。私の夢は無限に広がって行きます。

ガイドブックを開けると、更にその思いは募ります。

老いた母を見舞う為、二ヶ月に一度は帰省する古里。しまなみ街道をひた走る車中。母に、そして懐かしい山々に会える喜びで私の心は踊ります。

でも、帰省の度に、移り行く環境。著しく変化する時代の流れに、私の古里も例外ではありません。

草ひばりが歌うのどかな田園風景は、またたく間に、拡大な宅地へと変貌して行ったのです。

いったい、私が育った豊かな大自然は何処へ行ったのでしょう･･･

夕闇迫る川面をホタルを追っかけた幼き日。

遠く、はるかに続く浜昼顔の土手。咲き競う月見草。河原ナデシコ等。それからは皆、分厚いコンクリートの下に閉ざされてしまいました。この失った物の大きさを忍ぶ時、私の心はいつも、いい尽くせない悲しみと、むなしさと、憤りを覚えます。

そんな中。

幾年、幾十年が過ぎても、いつもと変わらぬ姿で私を迎えてくれる山々がそこにあります。唯一、私が誇りとしている古里の山々です。

ふるさとの　山に向かいて　言うことなし。

ふるさとの山は　ありがたきかな。

大好きな私の歌です。

しまなみを抜け、今治小松道に入ると、その先は、一直線に小松インターへと高速が伸びています。今治市と旧東予市との境に、世田山があります。坂を下りながら、晴天ならば右手に深い東三方ヶ森。真正面には、西日本の最高峰、石鎚、瓶ヶ森。笹ヶ峰と、雄大な山々がそびえ立ち、見る者を圧倒します。

その美しい景観!私は感動の余り思わず絶句!涙することが再三あります。高速道路を走っていて、大好きな景色がもう一ヶ所あります。

高松道を抜け、松山道に入り、西条、小松、丹原を経て、桜三里に至る道路です。深い谷間を縫う様に、幾重にも幾重にも織り重なって行く稜線。ここでも私は又、感動の涙です。

その名の通り。松山へ至る旧桜三里は、渓谷美もさることなら、その谷に沿って、遠々と三里続く桜並木は、たとえ様もなく、美しく華やかです。

見よ、そそり立つ石鎚の　ふもとに開く道前の、

高校の校歌です。小、中、高校の校歌に必ず出てくる石鎚の峰。幼き頃から、朝に夕に、登下校に至るまで、いつもこの雄大な山々を仰ぎ見て育った私です。

そして、思い出される追憶の日々。

甦るのは高校時代のことです。

当時、大学を卒業したばかりの若い先生が群馬から赴任して来られました。四国の山に魅せられて、この地を選んだ地理の先生でした。

こうして、この先生の元、夏場だけの登山部が発足しました。と、同時に、私の登山もこの時から始まったのです。

もう一人の若い先生と共に、まず第一歩は、笹ヶ峰への山行でした。

若い先生二人へのあこがれでしょうか。それとも、山へのあこがれだったのでしょうか。

ともかく、部員は総て女子ばかり?男子がいたか否かは定かではありません。

下津池でバスを降り、遠々と長い列を組み歩き続けたことを覚えています。頂上では、お行儀良く一列に横に並び、かけ声と共に、一斉に笹すべりをしました。夜は丸山荘。翌朝早く朝日に映えて金色に波うつ笹の原を眺めました。処々の白骨林も、とても印象に残っています。その後、石鎚山･瓶ヶ森･笹ヶ峰、その他の山々を角度を変えて登山を試みました。

その中で、

夕刻に西条側からロープウエイで成就に入りテントを張って早朝の朝日を見る（商大のワンダーフォーゲル）石鎚の山行に連れて行ってもらった時の事です。

一の鎖、二の鎖と順調だったのですが、最後の三の鎖では、決死の覚悟で登ったことを覚えています。高所恐怖症の私は、下を見て震えあがり、手はかじかむ、その上鎖は凍りついていた様でした。それでも、何とかよじ登れたのは、やはり若さがあったからだと思います。頂上について、キラキラと朝日に輝く樹氷を見ていると、その疲れも消えてしまいました。

いつの場合もそうなのですが山頂に立った時いつも感じることが多々あります。それは、自分自身の心の狭さに気付かされることです。天上から眺める下界は、何と小っぽけでしょう。そんなマッチ箱の様な家で又、街で人間関係や習い事に、勝った負けたなどと一喜一憂している私･･･そんな私が、とても小っちゃい人間に思えて、情けなく悲しく思えて来ます。

どうしてこの山々の様に、大らかで豊かな気持ちになれないのでしょうか。総ての物に感謝をし、不平不満を言わないで寛大でやさしい気持ちで過す事が出来たなら、どんなに幸せでしょう。私にとって山行は、多くの物を学ぶ研鑽の場であるとともに又、私自身を見つめ直す、いいチャンスの場だと思っています。私の古里には、私を魅了してやまない多くの山があります。

夢は限りなく

①高たる渓を探したい。

②どうしても登りたい堂ヶ森。さらに石鎚山･瓶ヶ森･笹ヶ峰への縦走等。

現実（私の体力）とのギャップを飛び越えて、膨らんで行きます。もし機会があれば、何度でも登ってみたい。私の心の友であり又、いつまでも愛し続けていたい古里の山々です。



晩秋の里

花との出会い



北村　道子

去る5月初旬。花大好き仲間5人（多分花より団子好きな人約一名）で、以前から行ってみたいと思っていた佐渡のドンデン山へ3泊4日の花見トレッキングに出発した。

朝6時過ぎに福山を出発し、新幹線、ジェットフォイルと乗り継いで、両津港に近い旅館に着いたのは午後4時を回っていた。期待の夕食は海の幸いっぱい。皆んな「おいしい!」の連発。ああ幸せ!!団子好きな人は勿論の事、花好きな人も大いに満足したのである。

翌朝晴天の中、タクシーで登山口へ。小川のせせらぎ、小鳥の声を聞きながらアオネバ渓谷の樹林帯の中に入って行くと、白いかわいい花を付けた二輪草の大群落が私達を出迎えてくれた。名前の由来は2個の花を付けることによるが、いろいろな条件で1個又は3個のこともあるようだ。質問その一。

「三個花が付いたのを別名何と言う?」「三輪草?」「親子草?」誰かが「それは不倫草だよ!」

一同大爆笑。

佐渡の山
　風とたわむる
　　二輪草

標高が高くなってくるとシラネアオイが姿を見せてくれだした。淡紅紫色の径7センチ程の大輪の花（花びらに見えるのは萼片）は、実に気高く美しくとても魅力的である。

2年前北海道の大千軒岳に登った時のことであるが…雪解けの凍りつくような冷たい川を素足で渡り、いくつかの雪渓を横切り、かなり苦しい登りを頑張ってやっと頂上近くに到達した時、突然目の前に一面のシラネアオイの花畑が広がっていた。青い空。連なる雄大な峰々。「ワァーすご〜い!」と思わず歓声をあげたのである。そのすばらしい光景は登った者でしか味わえない心に残った宝物であった。

だんだん上に登って行くにつれ、その時のシラネアオイに負けない程数も増え、二輪草とのコンビは新緑の中に溶け込んで私達を存分に楽しませてくれた。

青ネバ十字路を左にしばらく進んでマトネに着く。目の前は開け彼方に金北山の姿も望めた。ここからは尾根歩きになり、道の両側にはカタクリ、キクザキイチゲが主役となって、サンカヨウ、オオミスミソウ、エンレイソウ等々の花が林の中に足の踏み場がない程延々と咲いている。まるでステキなメルヘンの世界にいるようなすばらしいフラワーロードであった。

心和ませてくれる美しい花々。会へ入会の理由の一つに、「高山植物を現地で見たい。アルプスに行きたい」との一途の願いがあった。でも…諸々の不安が頭を横切る。ある時チャンス到来。意を決した時は入会してすでに5年が過ぎていました。レッツゴー! 目指すは日本第2の秀峰北岳である。そこで目にした数多くの花々との出会い。自然の雄大な景観。

登山のつらさもすべて感動となって心に残っている。それ以後自信も付いて、高い山にも挑戦するようになり、沢山の花を見ることが出来た。

白馬岳で初めて見た高山植物の女王コマクサの可憐さ。後立山縦走で体がヘトヘトになっていた時、碧紫色のタカネマツムシソウの美しさに元気を貰い。又里山においても岩の隙間に咲いていたスミレの可愛さに感激し、偶然福山の山で見た念願のナンバンギセルに感動したり等々、いろんな花との出会いが思い出としてよみがえってくる。

現在山野草ブームで心ない人の盗掘問題がありますが、その場所にあるからこそ美しいと思う。すばらしい大自然を大切にして、ずっと残していきたいと心から願ってやまない。

佐渡トレッキングの満足感に浸りながら、これからも花との出会いを楽しみに、登山を続けたいと霞む山々を後にした。

“変形性関節症だった”考



藤井　和之

平成8年に入会して10年、南アルプスに（連れて行ってもらい）、近郊の里山にと、山登りを満喫している、青春真っ只中の小生にも（皆様と同じ様に）他人には言えない秘密があります。

それは、中高年になれば、誰しもではないが、かなりの確率でもって発症し、付き合わなければならない症状と思いますので、私個人の秘密、実状を公表して、会員皆様のご参考に供したいと思います。（資料として、整形外科病院のパンフ「変形性膝関節症」を一部引用しました。）

私の症状は、両足親指の第一関節が、歩行時（曲げる時）痛んで、ストップしたり、べた足で歩かざるを得なくなる状態です。

当初は、単なる突き指位いと思って、ポキポキ鳴らして直ったと思っていたのですが、度重なる痛みを整形外科へ訴えた次第。

すると、少し前の還暦（?）の頃に、膝の痛みを覚え、整形外科でX線撮影から、変形性膝関節症といわれていたものの一連の症状のようです。

一般的な症状は、膝の痛みと水がたまることです。症状が進むと、膝の動きは制限され、O脚変形が生じる。これに、痛風、リウマチが重なると、ご苦労が多くなります。

原因としては、

① 加齢　② 酷使による障害　③ 外傷
④ 肥満　⑤ 遺伝、などと書いてある。

⑤は、山岳会とは関係ないけれど、お心当たりのある個人にとっては、由々しき問題で、親を見ればすぐわかる。

親御さんがご存命なら、今からでも、湿布や電気治療、リハビリ通いなどの親孝行に精出して、その姿を子供達に見せつけて、そのお蔭のお返りを待ちましょう。

①②③④は、山岳会員に共通の条件、要因であり、それぞれに工夫、努力しておられると思います。

①は、関節軟骨が年齢と共に弾力性を失い、骨の内部が空疎、もろくなり、変形、痛み発症に。

②は、使いすぎにより、軟骨がすり減り、骨が直接当たったり、棘が怒って発生して、痛み発症、関節が変形する。

治療としては、

i 薬物療法=外用薬（塗布薬や軟膏）、内服薬（消炎鎮痛剤）、関節内注射
ii 理学療法=大腿四頭筋強化訓練、温熱療法、装具療法など。
iii 手術、入院となる。嗚呼。

予防としては、

大腿四頭筋（太ももの前の筋肉）を強化する。

肥満であれば減量する（摂取量を減量するのが先決。脂肪を燃やす有酸素運動が得られる山行へ参加する）。

正座をさける。　膝を冷やさない。

洋式トイレを使用する。

急に痛むときは冷やすが、慢性化したら温めて血行を良くする。

上の②の対策として、

登山の下りでは膝に負担を掛けないように慎重に、慣れたら両手にストックを持つ。　体重が負荷とならない運動（水中運動やサイクリングなど）も組み合わせる。

以上は、主に膝に関する話ですが、足指に関して追加、注意することは、

窮屈な靴で指先を詰めない。
（少し大きいサイズの靴に変えると痛みが和らぐことあり。）

靴底は硬くて丈夫な、足指に負担が掛からない靴を選ぶ。

足指に負担が掛かる運動方法をさける。

以上、長々と記しましたが、諸病を、恐れず、侮らず、上手に付き合って、きれいな景色と空気が楽しめ、英気が養える山行を、末永く楽しみたいものだと思います。また、山の楽しい話の序でに、色々な症状、病気等の、ブルーな話、体験談、克服談の交歓もあって良いのではないかと思います。（おっと危ない、仕事と政治、宗教は禁句だよ。）

足腰の多少の痛み飛んでいく、あなたと一緒の山行だから、人の一生は笈と関節痛を負うて、遠き山を登るが如し

生　涯　現　役
「山で死んでもいいのでは」



福原 不二雄

日本の百歳以上の人口が25,000人を突破、皆様も百歳まで生きるということも夢ではなくなりましたね。
紛争のない平和な社会、豊かな食生活、医療技術の進歩により平均寿命は今後も高くなっていくことでしょう。
しかし、命があるだけで病気で寝たきりでは長寿でも意味がありません。
平成18年1月、101歳で亡くなられた日本スキー界の草分け、三浦敬三さん、99歳のとき親子三代でモンブラン氷河を滑走、その徹底したトレーニング振りには驚きました。
医療福祉分野でTVや講演に超多忙の医師、日野原重明さん若々しい声と情熱はとても94歳とは思えません。
毎日スクワット150回で鍛えている、女優の森光子さんは86歳、「放浪記」を42年間演じ、公演回数も1,700回、舞台でもテングルマされる柔軟さには脱帽です。
これらの人は元気な老人パワーの象徴です。
それを可能にしたのは地道な日々の訓練の積重ね以外の何者でもない。
我会でも金山正さんは92歳を超えても元気に山に行っておられ会員の模範とするところです。
他にも70歳を越えても日々トレーニングを心がけ50歳代の体力を有する元気な会員も多数おられます。
しかしその一方で体力が衰え仲間についていけないといって退会する会員もおられます。
年毎に体力の衰えるのは仕方ないことです。
会の発展に貢献された会員が体力の衰えを理由に退会されるのはまことに残念なことです。
訓練しても若くはならず現状維持が関の山とも言われていますがそれでも老化防止の効果は十分にあります。
いずれ皆、年をとり、激しい登山は出来なくなるのですから気にすることはありません自分が出来る山行を計画されれば良いと思います。

自分が楽しかった、感動した山行は他の人も必ず喜んでくれると思いませんか
低山、里山を2～3時間散策し、後は温泉にはいり旧交を温める山行も良いのでは･･･
体力に応じて楽しめるのが登山の特徴ですから。
会では若返りを計るため、活動の活発化、ホームページや情報公開、市民登山大会を行っています。
その一方で内部では高齢者や初心者のことも考えた山行計画を立てないといけないと思います。
若いときの会社の縦組織から定年後高齢者になると趣味の会など横社会の人間関係が大切になります。
人間は一人では生きられません。
仲間がいる人は仲間のいない人より倍以上長生きできるとの研究もあります。
私も妻を亡くしたときには生きる希望を失い大変落ち込んでおりましたが、山仲間の励ましにより立直ることが出来ました。
登山をやっていて本当に良かったと改めて思いました。

私の知人にゴルフの好きな人がおられます。
その人のお父さんもゴルフが好きで70歳半ばにも拘らずゴルフ三昧の毎日でした。
ご本人も「ゴルフ場で死んでも悔いはない」といい、家族も好きなことをして楽しんでいるのだからと認めておられました。
念願どおり(?)ゴルフのプレー中に亡くなられましたが本人が望んでいたことなので悔いはなかったと言っておられました。

ゴルフ場ならすぐに救急車も呼べ手当も出来ますが、山にあってはすぐ救急車というわけにはいきません
治療行為が遅れれば助かるものも助からないことも起きるかもしれません。
しかし寿命ということもあります。
人間何処にあってもいつかは死ぬ。
病院で、また自宅で家族に見守られ、別れの言葉を交わし、臨終を迎えられれば言うことはありません。
私の身内には自宅に居っても心臓発作をおこし、発見したときにはすでに死亡していたという例もありました。
自宅にあっても孤独死はおこりうるのです。
極論かもしれないが、持病等により山行きを遠慮している人もあると思いますが、家族　本人が納得していれば好きな山を楽しんでいる最中に、山仲間に看取られ死ぬのも悪くはないと思えてきました。
仲間はびっくりし、お手数をかけることのなりますが･･いずれ自分も順番が回ってきて仲間に迷惑をかけるかもしれないので、順送りで仕方ないと諦めて面倒を見てください。
山岳会会員の皆様には生涯現役の心で山と付き合い、一生涯を山岳会で終えるとの決意を持ってもらいたい。
そのためには二つのことを心していただきたい。
その1　仲間を大切に、和をもつて貴しとすること。
登山とは、協力すること、助け合うことを楽しむスポーツです。
各自が自分の役務を完全に果たすことにより目的を達成できる。
それにより互いの信頼もチームワークも深まる。
個人と団体の関係はちょうどパズルに似ていますね。
ひとつでも欠ければ完全なものは出来ません。
「3人よれば山岳会」という言葉どおり登山のやり方、考え方は違います。
違うからといって相手を排除したのでは会はまとまりません。
相手の立場、考えを尊重し妥協点を探る努力をすべきです。
苦楽を共に、相手の長所を認めれば、短所もその人の人柄に思えてきます。
助け合い、協力できなければ仲間ではない。
会員の河崎忠昭さんは病のため半身不随になられました。
言葉も定かでなく、歩行も困難な状態でした。
でも山仲間は見捨てず、家族と共に支援し山に同行し、本人もその目的のためリハビリに励み驚異的な回復を示しました。
信頼する仲間がいたから出来たことだと思うし、その強い意志にかえって仲間も勇気づけられました。
我会の入会審査は体力や知識の有無を問うものではないと思っています。
それらは何回か山行に行けばすぐに取得することが出来ます。
仲間たりうるか、他人を思いやる心、協調性があるかを審査するものと思っています。
その2　目標を持つこと
目標がなければ訓練を続けるのは困難です。
「事を始めるのに遅いということはない」という言葉がありますが目標を持って訓練している人は本当に若々しい。
我会の活動内容も近郊の里山歩きから3000m級のアルプス縦走、冬山登山、山スキー、沢登り、さらにアイスクライミングと多様な活動をしております。
目標を持ち、高みを目指しチャレンジしてみませんか。

平成18年1月22日、県民の森スキー例会山行に参加された清水順子さん。
年に似ず上手なのです。
長年の杵柄で上手なのだろうと思いつつ　『いつからスキーをされているのですか』と聞いてびっくり「いまから○年前、67歳からはじめました。3級の資格があります」
改めて繰り返します
「事を始めるのに遅いということはない」
「そのとおり!　納得」

私の山岳会でのあゆみ



上原 寿美子

もう20年も前のこと、新聞に“里山山行”の小さな案内が出ていた。

いつもであれば、体力が要ることには全く興味を覚えなかった私が、ちょっとどんな所なのかと行ってみたくなり、知人を誘って参加してみた。それが、今日の「山大好き」の私の原点であった。

高等学校の遠足以来の山歩きで、鈍った体にはきつ過ぎ、帰ってから一週間ほどは筋肉痛に悩まされたのだが、なぜかまた行きたいなあと思うようになっていた。

その後、数回参加し、その間に靴やザック等も専門店で買い揃えていった。当時の事務局長に勧められて会員にもなった。それでも山での歩きが遅れぎみの私に

「ゆっくりでいいですよ」

と、いつも優しく励まして下さったのが、金山さんだった。

入会して一番驚いたのは、会員の皆さんが博学なことだった。

初めの頃は、人の話に感心して聞き入っていたが、こんな話を聞きもらしたらもったいないと、せっせと山行に加わった。

初夏のある日、先輩たちの日本アルプス行きの計画を耳にし、とても羨ましかった。

里山ばかりではなく、私も行きたいと思っていた翌年の夏、萩原さんリーダーの北アルプスの蝶ヶ岳・常念岳コースに参加させて頂いた。

憧れのアルプスはきつかった。このとき、山小屋も初体験だったが、楽しみにしていた夕食も朝食も、見ただけで食べられなかった。

「食べておかないと歩けなくなるよ」

先輩はそう言って、食べなかったものをビニール袋に入れて私に渡してくれた。結局お腹の空いたお昼に食べたのだが、好き嫌いをなくさないと、山小屋へは泊まられないという一つの勉強になったのだった。

小土井先生には、植物を追い求めていろいろな山行に参加させて頂いた。いつも足が遅れぎみで、ずっと先を行く先生に、

「この花の名前を教えて下さーい」

と、叫ぶと、引っ返して植物辞典まで出して教えて下さった。その間休憩するのだが、心の中でごめんなさいと詫びつづけていた。

3年目の冬、福原さんの大山行きに、私も行きたいなあと、遠慮がちに言ってみた。

それまで雪山を見たことがなかった私は、空の澄み切った青さのもと、キラキラ光る雪にスッポリと覆われた山々を見て、雪山のとりこになってしまうほどの感激であった。

藤井さんには、岩登りのご指導を受け、沢にも連れていって頂いた。初めて岩を登ったとき、「ヤッターバンザーイ」と、心のうちで叫んでいた興奮は、今でも忘れられない。

田中さんが熊野古道を歩くと聞いたとき、私は一番に手を挙げていた。まだマスコミにも取り上げられていなかった時代であった。

その後を引き継いだリーダーが斉藤さんであり、古道も一部が世界遺産に登録され、見違えるほど整備されていった。しかし、私には少し俗化ではないかと違和感があった。

いろいろあった20年余りの歳月の中、悲しく痛ましくて忘れられないのが、冬の大山で遭難した山大好きの仲間たちのことである。きっと助かると信じていた、山小屋での一週間だったのに…。

振り返ってみて、私の人生って山岳会抜きにしては考えられないことばかりとなっていった。そして、この夏、私たちの山行も延べ4000回を数える。これは先輩たちの並々ならぬ努力の賜物だと思っている。

このことを忘れることなく、みんなで次の世代へ引き継ぐことこそ、私たちの責務ではなかろうかと痛感している昨今である。

一歩の力



南 妙子

平成5年に福山山岳会に入会して、早14年になります。益々、山に惹かれています。
私の人生で、家族との出会いの次に幸せな事が山に巡り会えた事なのです。

私はよく、山岳会の方に『私達みたいに登山の喜びに出会えた者は、神に選ばれた人ヨネ〜♪』‥ナンテ言っているいのですが、本当に私は山を通して、すばらしい方に出会い、学び、育てられたのです。

重いザックを背負い、急登で喘いでいる時、『ナンデこんなに苦しい事をしているんだろう…』と、思うことはありますが、小さな花に、小鳥のさえずり、頬をなでるそよ風、せせらぎの音に励まされて頂上に立つ登山“人生そのもの”を実感します。

人それぞれ、多少の重軽はあっても、ザックの中に自分の人生を背負って生きていると思います。人生を全うするに当たり、到達する頂上は同じでも、そこまでに至るコースは人それぞれです。登山口から、いくつもあるコースの中から自分で選んで歩みますが、登山口からすぐに急登になり、フーフーと言いながら乗り越えると、やがてなだらかな稜線歩きになるコースもあるでしょう。その反対に、最初、歩き易い登山道でも途中（年を取って）に岩場やガレ場があるかもしれません。

昔からのことわざに、『若い時の苦労は買うてでもせえ』…というのがありますが、こういうことなのかナ〜と自分流に想っています。

山岳会に入会して、大きな教訓を得た山は中央アルプスの“御嶽山”でした。御嶽山は、体力・技術とも初心者向けの山でしたが、私は途中から皆さんについていけなくなりフーフー言いながら一人遅れて歩いていました。

いつも上原さんが、オモシロオカシク言っている言葉に『ナメクジがイカリを引きずって歩いる…歩き方』そのものでした。（清水さんがそんな私に歩調を併せて歩いてくださいました。加島さんが、何か持ってあげようか〜と言ってくださいました）私は、『ここで皆さんが下山されるのを待っていようかナ〜』と思ったのですが、目の先、2メートル程先。とても遠くに見える小石を目標に、『あそこまで頑張って歩いてみよう』と一歩…。一息入れて、又、一歩…と、小石に向かいました。気が付いたらたどり着いていました。ゆっくりの一歩に感動し頂上までたどりついていました。愛ちゃんがトマトを下さいました。このような状態の時に優しくして頂くと本当に嬉しかったです。

この時から、私は『一歩の力』を座右の銘にしています。御嶽山登山で、自分自身、思いもしないような体調の変化に遭い、『これからは、皆さんについて歩けないかもしれない…』という不安から山行にも申し込みが出来ず、それでも『山に登りたい!!』と、いう強い気持ちから、自分で登山を計画するおもしろさを学び、鳳凰三山・千丈岳・甲斐駒ケ岳・白根三山を、夫を連れて、又は一人で縦走する貴重な体験をすることができ、挫折の中から大きなことを学ぶことができました。
登山でも、人生でも“想い続ける”ことはきっと実現するものだと想います。

私は、今まで、仕事をしながら、登山をしていましたので、行きたい山に誘って頂いても、想うように参加できませんでした。『きっと何時か行ける時が来る』と、想い続ければ本当に、無理の無い時期に、最も良い仲間といけるものですネ!。
屋久島縦走がそうでした。山岳会で“屋久島縦走”が計画された時には、本当に参加したかったのですが、勤めがある身、あきらめました。それから

何年も経って、屋久島の観光課から資料を送ってもらい、何冊か本を読んだりしていると、行けそうな気がしてきました。
期は熟した。～五月の連休に!岩原さん♪上原さん♪前田さん♪すぐにメンバーは決まりました。決まったら早い、私は声を掛けただけでしたが、岩原さんは実行力があり、すべて彼女が進めてくれました。上原さんはムードメーカー(＾０＾)楽しい仲間との屋久島縦走!♪縄文杉との出会い!4人だけの静かな森の中。朝霧のベールにつつまれ、三千年の時の流がどんな想いで何を私達に伝えようとしているのだろう…対面した時は神々しくて涙がでました。

今年、仕事も退職し、念願の専業主婦となり、登山出来る時間も年齢的に先が見えてきていましたが、行ける時は行く!!
私の人生登山も、“母を看取る”と、いう大きなピークがやって来ました。このピークも一歩々あゆみながら、私の山の頂上を目指したいと思っています。



坊ガツル賛歌



平 松　携

1999年5月、福山山岳会の山行でメンバーは、リーダーの藤井 繁・佐藤律夫・佐藤茂利雄・江種幸男・中川一安・山本逸男・吉岡　徹・木村三郎さんであったと思うが、久住山に登山したことがあった。長者原の久住登山口から雨ヶ池を越え、坊ガツルの草原にテントや食料を置き、登山道に咲き乱れるミヤマキリシマに心をとられながら大船山の峰に出た。大船山から平治岳への下りは、飛ぶように足は軽かった。大戸越えから平治岳の登りも苦にはならなかった。鮮やかなミヤマキリシマの歓迎を受け快調であった。平治岳から大戸越えに下った処にミヤマキリシマのひときわ広い群生があって、今でもそのミヤマキリシマの鮮やかな色が甦ってくる。坊ガツルに戻って、テントを張り始めた。その時、誰かが冷えたビールがいると宴が始まらないと、法華院温泉に冷えたビールを買いに走った。藤井 繁さんの夕食のすき焼きは実に旨かった。四方山々にかこまれた坊ガツルに、カッコウ鳥が「カッコウ、カッコウ」とカン高く鳴き、坊ガツルに響きわたる。坊ガツルで山が好きな男どもが酒を酌み交わし、たわいもない会話に花が咲く。やがて酒に酔いつぶれテントに沈没して朝をむかえた。

元福山山岳会会員でエベレスト登頂後、不慮の事故死された大田祥子先生の法要にお参りした。そこで「坊ガツル賛歌」を歌いながら涙したことがあった。(「エベレストに登った菩薩」尾道文化23号　尾道文化協会発行　2006年)
2006年5月　大田祥子先生の三回忌の法要が岡山市浦安で行われた。バス2台に乗り70余名が参列した。農耕文化と佛教館でご主人の大田さんが笑顔で出迎えて下さった。曹洞宗の僧侶による読経に続き法話があった。僧侶によると三回忌において、血縁のない方々が七十余名参列されることは例がないと話された、という。参列者が多いことから、大田祥子先生の高潔、円満な人柄が伺われた。　御斎の後、青い山脈、四季の歌、「坊ガツル賛歌」等の歌詞が配られた。事前にこれらの歌を歌うことを聞いていた。「坊ガツル賛歌」を歌うと涙が流れ、鼻水まで流れ落ちたことがあったことから、みんなの後ろで隠れるようにしていた。最後に「坊ガツル賛歌」を歌う番がやってきた。やはり一番の「人みな花に酔う時も　残雪恋し山に入り　涙を流す山男」になると涙が流れて声も涙声になって歌えなかった。私の右側におられた福山山岳会員の池田富美子さんも、頭を垂れて涙声で歌っておられた。私は「坊ガツル賛歌」から山の仲間であった大田祥子先生を偲ぶのである。
2006年6月　大田祥子先生の次男の図らいで岡山県久米郡美咲町の生家に線香をあげに伺った。参列者は、福山山岳会の池田敏美夫妻、鈴木康仁夫妻、黒飛晴光夫妻、萩原有朋(元会長)、本田靖二さん、それに関わりの深い人達であった。不如帰の鳴く山深い人里で94歳の大谷秋子さんが私たち山の仲間を迎えて下さいました。
その日の大谷家を訪ねた情景を、会員の池田敏美さんは次の俳句にしておられる。

生家にて
　万緑や思いは深し鄙の里

遺影前にて
　柏餅遺影に供え師と語る

三休公園にて(大田祥子先生が出資された碑の前)
　新緑に石文語る顔は映え

線香をあげ御斎が終わってから、生家の庭に建立された大田祥子碑の前で大田祥子先生を偲んで「坊ガツル賛歌」などが歌われた。

　一番の涙を流す山男

　二番の峰を仰ぎて山男

　三番の夜空を仰ぐ山男

「涙を流す」「峰を仰ぎて」「夜空を仰ぐ」という句が私の心に響いてくる。大田祥子先生と久住山の坊ガツルに同行したことはないが、多くの山行で大田祥子先生を囲み、池田敏美・鈴木康仁・黒飛晴光・山内充人さんと坊ガツルのような場所で、酒を交わし、福山山岳会の話題、時事問題、老後の生き方など語り合った。そして大田祥子先生の手料理と旨い酒に酔いつぶれたことがしばしばあった。
このように、自然の山に登って弁当を食べ、時には酒を酌み交わし、たわいのない会話をする単純なコミュニケーションが胸の奥深いところに残っていて、「坊ガツル賛歌」を歌うと純粋な子どもの頃にかえったように涙が出てしょうがない。



大田祥子先生生家の前にて

登らざるの弁



高橋　進次

第一章

同級生から声がかゝり、私がO先生の供をして富士山へ登ったのが昭和59年。
先生は高名な登山家田部重治氏の弟子で、日本山岳会会員であった。
富士は晩年に登るのがよい、という師の助言に従って80歳のこの年、富士登山と決めた。

私は、山歩きから遠ざかっており、先年、富士吉田口大崩落で多数の死傷者が出たこともあって、緊張のうちにトレーニングを始めた。
県内の山は近くの蔵王山と蛇円山しか識らなかったが、比婆山連峰を熊野神社から宿舎一泊で三井野原へ抜けてみて、県北の山々の魅力に初めて触れた。
道後山では雷雨に遭い、家族が心配して最寄りの駅に電話をする騒ぎがあったり、鷹ノ巣、カンノキ山でのすばらしい展望に感激したりして管弦祭の日、弥山を登り安全を祈願し準備を終えた。
二度目の富士は好天にも恵まれ、無事に登山を達成した。

第二章

久しぶりの山歩きで味わった快感は暫く消えないでいた頃、新聞紙上で福山山岳会の記事を発見し、早速に入会を申し出た。
記憶が定かでないが、どんな登山をしたかなどと電話でやりとりしたように思う。
手続きを終えると会報と、発行されだしたばかりの機関紙「ちんぐるま」が送られてきた。会の雰囲気を確認して山行に参加しようと思っているうちに、母が体調をこわして翌年逝き、半年後、父も死亡し山は無縁の状態となった。
故あって、生活の本拠を東京に移し、昭和63年1月上京した。山岳会は退会しようかと迷ったが一度も顔を見せずに消えてしまう身勝手も嫌だったし、それ以上に毎月の会報に資料的魅力があり、特に藤井繁夫妻（以下も敬称は省略する）のガリ版刷りの「ちんぐるま」は大変面白く、年会費を払い続けてずっと読みたい気持ちも強く、会に止まることにした。なお「ちんぐるま」は発行7年後、85号で終刊となった。夫妻のご努力に敬意を表します。

当時の会報をみると、私と同年に入会した現福原会長、金山、田中、橘高、木村、故佐藤らの山への傾注ぶりは瞠目すべきものがあり、年間の登山回数の星取り表ともいうべき当時の会報記載「個人別山行回数」を参考までに記すと、昭和60年佐藤35回で2位。同61年金山48回1位、田中32回、木村28回。同62年田中43回1位、金山39回、佐藤34回、木村24回。同63年金山51回1位、田中49回2位、木村25回、佐藤20回。平成元年田中47回1位、金山46回2位、木村22回。同2年田中40回1位、金山38回2位、とあり、同期会員が当時から山行にかけた熱情に頭が下がるのである。

同時に、先輩会員がこれら新会員に互し上位山行回数を重ねていることも注目され両者が一体となって会を発展させていったことが読みとれるのである。同期会員は更に進化して会の中核、古老として現在も健在なことは心強い限りである。

それに反し、私といえば会員名簿上だけの会員として、遥かに会の発展ぶりと会員、特に同期の活躍ぶりを喜び驚嘆しているばかりであった。会との唯一度の接触といえば、登山3000回記念品のザックを受け取るべく、たまたま帰福中に天野事務局長宅を訪れたことである。懇切にザックの不具合を説明され穏やかな口調で山登りは続けていますかと尋ねられたのに対し、折々に奥武蔵、奥多摩の1000m前後の低山を歩いていると話したことが懐かしい。

第三章

平成13年春東京での生活を打ち切って福山に戻ってきた。齢すでにして60代後半、今浦島にも似た心境であった。17年前に歩いた県内の山々も様変わりしていよう。
いま、この年で初めて山行に参加して何を目指そうとするのか。小学校4年生だったか、奥多摩の御岳山にケーブルで昇ったのが山との出会いだったが、60年経過して、山とのかゝわりをどのように終えるべきかなどと考えることしきりだった。

第四章

顧みると、私が初めて2000mを超えたのが昭和28年、英国隊のエベレスト登頂、日本隊のマナスル遠征が登山ブームを巻き起こした年だ。親湯から急登に音を上げながら蓼科山に登った。八ヶ岳赤岳からのアルプス展望の中で甲斐駒ケ岳の山容に強く惹かれた。
翌年甲州側から尾白川を遡って5合目への急坂をがんばり仙丈岳に至り戸台へ抜けた。
その翌年も甲州側から黒戸尾根を辿って前年のコースを再び下った。

翌々年友人たちと富士へ登った数日後、白根三山へ出発した。新宿発普通列車最終便は山ヤで超満員、払暁下車、地蔵岳を目指した。キスリング一杯の米、野菜、進駐軍放出の寝袋を背負って、寝不足のまゝただ黙々と登高を続けた。
翌早暁、地蔵の肩から野呂川を隔てて朝日に包まれた北岳と対峙した感激は記憶の中にある。
広河原へ下り、登り返して御池小屋泊。草すべりを経て北岳から間ノ岳へと、この間、果たして人に会ったのかすら今となっては曖昧である。農鳥小屋への下り道で雷鳥の親子に会ったことを覚えているのに。翌日、大門沢を下降し西山温泉着、初体験の混浴に目のやり場に困りながら心身が次第に疲労から解放されていった至福のひとときなど、若き日々をいとおしく回想するのである。

高い山、厳しいコースとはそれが、お別れだった。
富山市生まれの母は、父親（私の祖父）が吹雪の室堂で幾日か閉じこめられた幼い日の思い出が鮮烈だったのか、雪山や岩登りに拒否的だったし、私も長い休みがとり難いこともあって、のんびり、ゆったりと秋の山などを楽しむ方向へ進んでいった。

北八ヶ岳にゅうの独峯に座りこんで樹海の中で浮いているような白駒池を眺めたり、奥秩父から十文字峠を信州梓山へと越え、白木屋旅館で囲炉裏に手をかざしながら家族と歓談したこと、人影稀れな美ヶ原を逍遥したことなど印象深い。
作家の筆を借用させて頂くと、「当時取り憑かれたように山に登っていた私は」「山登りといってもアルプスのロッククライミングのような先鋭のものでなく、尾根の縦走や峠越えや原生林を分けるさすらい派であった。そのために勝手気ままに歩ける一人旅が多かった。」（森村誠一『人間の証明』角川文庫『あとがき』より）この記述は当時の私の登山スタイルそのままであった。

終章

ともかく歩き出してみよう第一歩から、と新入会者の気持ちで山行に参加したのは、平成13年4月、虚空蔵山での総会登山だった。

山歩きを音楽に例えるなら、トランペットやティンパニーのような高らかな響きを奏でることは私には望むべくもない。それよりフルートかチェロの音色で穏やかにメロディを歌いたい。それもソロではなく三重奏や五重奏。時にはシンフォニーの形で。そして演奏途中で弦が切れるようなことにならないことを願う。

再び作家の筆を借りる。愛読する尾崎喜八は言う「『あの山なら僕も知っている』といってしまえばそれまでである。大切なのは君が登ったそれらの山のひとつひとつに、それぞれどれだけの思い出なり感銘なりを持っているかどうかということである。」「問題は踏んだ山、登った山の数やその高さではなくて君がそこから得た感動のいかんである。」と。

これからは一山一山を一期一会と心得てゆっくり、ゆったりした気分で登りたい。リーダーや会員に迷惑のかゝらぬよう心しながら。

第五章　高みをめざして、極限への挑戦



冬雲・北アルプス（空撮）



ガウリシャンカール（空撮）



渋滞剱岳



登頂訓練のため、リュッヘルホルンの岩場にて。
7日後背景に見えるマッターホルンの登頂に成功した。
2007年8月

パルチャモ登頂記
2003年4月20日〜5月11日



黒飛　晴光

1.目的の山　パルチャモ（6187m）
　　ネパールヒマラヤクーンブ山群
　　& ロールワリン山群境界地区
2.登山期間　2003年4月20日（日曜日）〜
　　5月11日（日曜日）21日間
3.隊員
　隊長: 田中　勝彦　（64才）
　隊員: 佐々木　弘磨（66才）
　　鈴木　康仁　（66才）
　　大田　祥子　（62才）
　　黒飛　晴光　（57才）
4.行動記録

4月20日
　関空〜上海経由ロイヤルネパール航空にて夕刻、カトマンズに降り立つ。2年振りの喧騒の街が懐かしく感じられる。

4月21日
　現地エージェントと、翌日からのキャラバンの打ち合わせを行い、その日はのんびりと過ごす。

4月22日
　一番機で空路ルクラへ。ここで今回のキャラバンのスタッフ全員が揃う。ゾッキョに荷物を分けて積み込む。一頭当たり60kgの割当てで10頭。サーダを入れたシェルパ5名、キッチンスタッフ4名、ゾッキョ使い2名、それに我々隊員5名を加えて計16名のキャラバンの開始である。
　懐かしいエベレスト街道を北に向かってゆっくりと進み、宿泊地パクデン着。

4月23日　快晴
　ドウードウ・コシ沿いに快調にキャラバンは進む。心なしか、トレッカーの数が少ない。ラリーグラス（石楠花）の花が散見される中、元気にナムチェ着。

4月24日　快晴
　終日ナムチェ滞在。高度順応を兼ねてエベレストビューホテル（3800m）へコーヒーを飲みに出かける。快晴の中にエベレスト、ローツェ、アマ・ダ・ブラムが遠望出来る至福のひと時を過ごした後、シェルパの里クムジュンに足をのばす。

4月25日　快晴
　ボーテ・コシ沿いにターメを目指す。トレッカーの姿は見当たらなくなる。途中赤・白・黄色様々な色をしたラリーグラスの群落の中、テンギリ・タウの切り立った雄姿を遠望することが出来た。今日まで全く雨らしいものにお目に掛かっていない。この時期にしては珍しいことである。
　ゆったりとしたキャンプ地で、冷たい雪解け水にて、久しぶりに身体を洗う事が出来た。

4月26日　快晴　夜小雨・雷
　高度順応の為終日ターメ滞在。
近くのスンドルピークの4500mまで登る。北にチョー・オユーを遠望出来た。またチョー・アユーも望める。

4月27日　快晴
　ターメにデポしてあったアタックテント2張りとザイルをヤクに積み込む。ここから高地となるためにゾッキョ2頭とヤク2頭とが入れ替わる。4500mを過ぎる頃から、風が冷たく感じる様になった。前方にビッパラ・ゴ・シャル（6729m）が白い姿を見せる。振り返るとタムセルク等のクーンブの山々が見える。午前中にキャンプ地テンポー着。めいめい昼寝。

4月28日　小雪
　降雪の中を出発。1時間ほど歩いたところで雪も小降りとなり太陽が雲を通して覗く 様になった。雪が止んだところでモレーン氷河上のBC（4800m）着。

4月29日　快晴後ガス　午後雪

夜半に雪が止む。約5㎝の積雪。朝日に輝くパルチャモの東壁が目前に迫る。チリン、ロック、テンジンの3人のハイシェルパが、ルート工作に出掛ける。

我々も高度順応を目的にハイキャンプ（5700m）目指して出発。5000m附近でガスが出てきた。

視界が極端に悪くなる。5300m附近で昼食。岩の窪みに登攀用具等デポし、雪の降る中を下山する。

4月30日　みぞれ

休養日。早朝よりチリン、テンジン2人がルート工作に出掛ける。1日中雪とみぞれで沈澱の日が暮れた。

5月1日　晴　多少雲

ハイキャンプ目指して出発。上空に雲が厚く垂れ込み、雲の切れ間より太陽が顔を覗かせ、温室効果で気温が極端に上がる。30℃以上有るか？暫くすると下から雲がわき出て来た。5300m附近でガスと小雪が降ってきて、気温が急激に下がる。

ハイキャンプ直前の急斜面をフイックスザイルにユマールを用いて越えた。そこからハイキャンプまでは深い雪田の中でラッセルを強いられ、やっと16時ハイキャンプ着。

2名が遅れたため、テンジンが迎えにゆくが、BCに引き返してしまった。

テンギリ・タウの岩壁にぎりぎりのスペースに張ったテントは田中、大田、黒飛の3名がやっと横になれるスペースしか無い。2人には悪いが、結果オーライである。

北斜面を見せるパルチャモの山容は、三角錐の堂々としたもので頂上が夕日で朱色に輝いて美しい姿をみせる。雪煙が上がっていて、風の強い事を暗示している。夜半から雪が降ってきた。

5月2日　　快晴　風強し

1時30分起床。いよいよアタックの日である。簡単な食事を手早く済まして、3時30分出発。満天の星の下、ヘッドランプにコンティニアスにて登り始める。先頭を元気なチリンがラッセルしながら進む。

大田、テンジン、黒飛、田中、ロックの5人が続く。1時間程比較的平坦な雪田の登りであったが、徐々に急峻な登りへと変わってゆく。シェルパの事前のルート工作によりフイックスされた7mmのザイルにユマールを通し、バイルを使いながら登る。

途中で空が白み始めた。本日の晴天を約束するような太陽が顔を覗かせた。約45度の雪面を皆声も出さずに黙々と登り続ける。アイゼンがよく効いて気持ちが良い。高度が上がるにつれて、周囲の山々が朝日に照らされた姿を大きく見せる様になる。さすがに大田先生は強い。追いついてもすぐに離してゆく。田中さんもなかなかの者で、3人共一丸となって登って行く。八ピッチ登って標高6000m直前の勾配が少し緩くなったクレバス帯に着く。もうこの頃になると日差しが強くなってきたが、同時に風も強くなり、寒さを感じる様になってきた。新雪に隠されているが、所々にクレバスが口を開けて居る。ここまでは、事前のルート工作でロープがフイックスされていたが、これから先はルートファンティングしながらの登攀となる。

緩斜面は僅かで、すぐに急登となる。少し西側に巻いてから　ザイルをフイックスしながら2ピッチ登ってからそのままトラバース気味に西側の斜面をコンティニアスで登るが、ここも新雪が50～60cm着いており、先頭をチリンがラッセルしながら進んで行く。

大田先生もラッセルしながら続く。稜線は雪庇が大きく東側に張り出している。西斜面は大きく切り込んでいて下が見えない。

ここでもし誰か滑落すると、そのまま西斜面に全員消えて行きそうな緊張の中で10時、頂上の数メートル手前にピッケルを打ち込んだ瞬間、ピッケルの先から、50cm～60cmの厚さのブロック状の表層雪崩が、進行方向に約30m幅で発生し、東斜面に落下して行った。もし我々の足下から発生していたならば確実に巻き込まれていたことであろう。

全員肝を冷やす。

目の高さ約2m登れば頂上であるが、今、目前で起こった事象に、今いる所を頂上とし、記念の写真を急いで撮り、早々に引き上げる事とした。しかしながら、頂上からの眺めはさすがで、遠くにひときわ高くエベレストやローツェが見え、その周囲をマカルーをはじめクーンブ山群のほぼ全部の山々が、またロールワリン山群のほぼ全部の山々が晴空の下で遠望出来た。

フイックスザイルにエイト環でアップザイレンしながら下降して6000mの緩斜面に到着。チリンとテンジンの2人のシェルパはフイックスザイルの回収をするため、少し遅れてきている。

大田、黒飛、田中、ロックの順でコンテにて登りのトレースをたどって下降をしていた。

（これからは黒飛の回想である）

ここはクレバス帯であるという意識の中でふと5m程右側を見ると、クレバスらしき雪の窪みを見た途端にザーと目の前が雪で真っ白になった。一瞬にクレバスに落ちたと感じ、大声で「落ちたー」と叫んだ。一瞬の事ではあるが落下スピードが徐々にゆっくりとなりスーッという感じで止まった。つぎに感じたのは、前を歩いていた大田先生がロープに引っ張られて続いて落ちて来るだろうと思った。しかし落ちてこないので、うまく確保してくれたなと感じて、気持ちが楽になった。

後面は田中さんが確保してくれている。従って二点で確保して有るので、これより落ちる事は無いという安心感で、気持ちに余裕が持てた。

上の人たちが心配していたらまずいので、大きな声で「大丈夫だー」と2、3度叫んだ。（結果的には声は届いていなかったので上は大騒ぎだった様である）周囲を見渡していると、映画の「バーチカルリミット」のシーンを思い出した。

クレバスの幅は1mで左右を見ると、左側（西）はかなり奥まで続いている。右側（東）は約10m先で明るくなっている。下はずーっと続いており底は見えない。緑色の闇が続いている。青氷という言い方でなく、緑色の氷の中に居る。上を見ると白色で、自分の落ちた穴を通して空が見える。その左右は雪が塞いでいて、その雪を通して日光の透過光が見える。クレバスの途中にはチョックストーンならずチョック・スノウ・ブロックが所々に挟まっている。（雪に覆われて見えない雪の割れ目であるヒドゥイン・クレバスに落ちてしまったのだった）クレバスの壁は垂直で、上を見ると約7m落下して止まっていた。ユマールをザイルにセットした後に、どうやって登るか？と考えてみた。一つは右側にトラバースして10m先の明るい先に出る。もう一つは垂直に登る。いずれにしても、今確保しているザイルは途中の雪の中に上から1m位の所で2本共壁に食い込んでいるので、登攀には使えない様に思えた。いずれを取るにしても、背中のリュックは邪魔である。補助ロープを投げてもらい、まずリュックを引き上げてもらった後に、再度補助ロープを投げてもらい、それを用いて脱出しようと考えた。大声で補助ロープを投げる様に依頼した処何回目かで聞こえた様で、補助ロープが降ろされてきた。それにリュックを繋ぎ、引き上げる様に合図を送ったとたんに、私を確保しているロープが急に引き上げられた。そのザイルが両方の雪の壁にぐんぐんと食い込んで行く。私は急いで体制を整え、ぶら下げていたピッケルを両手に持ち、アイゼンを前面の雪壁にあてがって雪の壁を垂直に歩くような形で引き上げられた。クレバスのエッジ近くで思いっきり両足を踏ん張って、落下口の両岸に身体を預けた。進行方向のエッジに両足のアイゼンを、反対のエッジに背中の上部を預けるブリッジの恰好で暫くそのままの姿勢でいたが、さすがに私の息も上がって腹が大きく波打っていた。チリンが私のピッケルを捕まえて引っ張り、足を踏ん張っている側に思いっきり跳ねて来いと言う。その通りにして、やっと脱出することが出来た。

クレバスはエッジの部分が欠落し易いため、救助する側も、簡単に穴を覗いたり、引きあげたりは出来ない様で、救助する方も大変だし、落下した方も、エッジ近くから上に上がるのはなかなか難しい。やはり両側から引っ張り上げるのが、最良の様である。この間約30分位で有った。

また、クレバスの中は、冷凍庫と一緒でかなり寒い。リュックを先に手放すにしても防寒の用意をしてから手放す様にしなければ、長時間になると身体が言うことを利か無くなるおそれがある。

登りのトレースを辿っての下山で有り、よもやク

レバスの上を横切っているとは思いもしなかったという油断があった事は確かであり、反省すべき点で有る。幸い無傷で脱出出来た事は幸運で有った。

クレバス帯を慎重に抜けた後。さらにフイックスザイルにてアップザイレンで下降する。チリンとテンジンは、すべてのフイックスザイルを回収しながら下降してくる。7mmといえども、50m×11本（全長550m）ものロープの回収を2人でこなす彼らのスタミナはたいしたものである。14時にハイキャンプにたどり着いた。休憩なし、食事なしの11時間であった。インスタントラーメンを手早く作り15時にハイキャンプを後にした。

登りにフイックスしておいたザイルでアップザイレンしながら、ひたすらBCを目指して下降していった。18時BC到着。鈴木さん、佐々木さんをはじめ、BCのスタッフ全員に笑顔で迎えられた。

その夜から降雪と共に風が出てきた。アタックチャンスとしてはラッキーであったと言える。

5月3日　休養日

5月4日下山予定日

早朝にヤクが上がってきた。その背に荷物を積み込み、降雪の中を下山の途に着き5月7日ルクラ着。

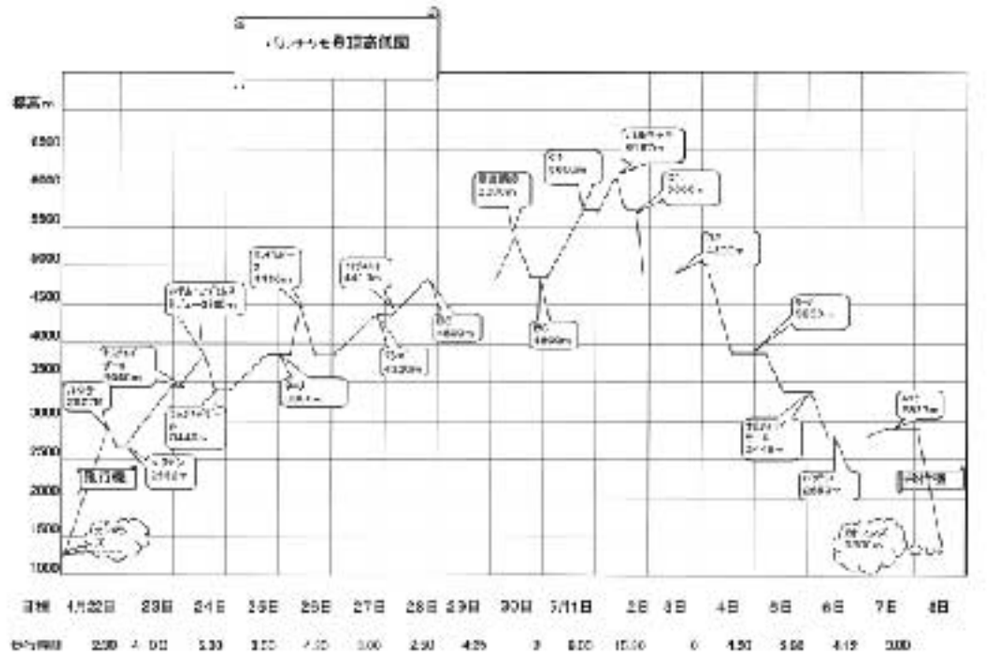
5月8日　ルクラを一番機にてカトマンズに帰る。

5月9日

カトマンズにて佐々木さんの友人のブッティ・ラナさんの実家であるネパール王家の血縁に当たるラナ家に昼食の招待をされた。めったに経験することは出来ないネパールの家庭料理を堪能することが出来た。

5月10日

帰国の途に着き、翌11日無事に関空に降り立った。



北アルプス穂高連峰縦走

2002年7月23日〜27日



妹尾　英明

生涯に一度は登ってみたい岩峰、日本でも一、二を競う穂高岩峰縦走は古希を迎えた体力では今が最後の機会と思い、好きな酒も断ち、体力トレーニングを続け体調を整え山行に備えた。
気象情報を確認しながら、梅雨明けを待つ。

7月23日　晴れ
ザックの荷物を出来るだけ省き、13キロ担いで早朝の新幹線で福山を発ち、高山経由で
新穂高温泉バスターミナル着　13:30
千石園地からは蒲田山、錫杖岳、笠ケ岳、西穂高岳が眺望され、樹林帯の緑も美しい。
ゆっくり西穂山荘へ登って行く。
西穂山荘着　　15:38

山荘前広場から眺める常念岳、六百山、霞沢岳、が夕日に染まり、茜色の輝く稜線が美しい。
同部屋の一期一会の皆さん、今夜は広島の酒と瀬戸内で獲れたチリメンジャコを持参して来ましたから、明日の安全のために乾杯しましょう。
皆さんと楽しく山談義に話が弾む。
明朝は天気がよければ早立ちのため、早めに休みましょう。
同山荘泊

7月24日　晴れ　山荘発4:15

丸山の辺りまで来ると、東の空が一段と錦色に輝き、遙か彼方の稜線に、ご来光のお出まし。眼下に梓川が白い糸のように見え、上高地の樹林に囲まれた赤い建物、大正池は水面に霧が立ち込めて乳白色に染まり、オトギの国を眺めているようだ。
後方の焼岳、遙か乗鞍岳、西には笠ケ岳がモルゲンロードになり、息を呑むような素晴らしい景観だ。

独標に着く、初心者はここで怖いと思ったら引き返すこと、安全第一です。
ここで、必ず観天望気で前進するか引き返すか、的確な判断が重要である。
観天望気とは？　地形・高度・気流・気温・霧の状況から、その土地特有の気象状況を掌握することを言う。
西穂高稜線では、笠ヶ岳にかかる雲が格好の指針で、頂上にかかった場合、早ければ数時間後には、現在地の稜線も霧に覆われる確立が高い。

西穂高岳着7:00

眼前に明神岳、前穂高岳、つり尾根が迫ってくる。眼下に岳沢ヒュッテの赤い屋根、樹林の緑のコントラストが鮮やかで美しい。
つり尾根の縦走路から紀美子平へ重太郎新道のジグザグの急坂道が鮮明に見える。
登山用品店で購入した岩場歩き用の靴、(￥15,000)は歩きやすく、快適な岩場歩きができ実に楽しい。
岩峰の高度感も薄れて、自信が湧いてくる。

間ノ岳着9:00
登ってきた方向を振り返って見ると、焼岳が低いところに見え、遙か後方に、乗鞍岳、その左後方に御岳山が見えている。
小さいピークをいくつか越えて。

間天のコル着　9:27

好天で日差しが強く、空気も乾燥しており、緊張の連続でのどが渇く。
飲み物は3ℓ絶対必要。
度々少量を口にする。
緊張の連続で空腹は感じないが、のどが渇く。
オレンジの蜂蜜漬けも口当たりは良いが、ウイダーinゼリーの方がのど越しによく、渇きを潤してくれる。
ジヤンダルム頂上着12:30
ロバの耳、馬の背、13:40〜14:15　無事通過する。
奥穂高岳頂上の方位板にやっと辿り着く。
14:35　ほっとする。

宿泊手続きを済ませて呑むビールの咽喉越し味は、忘れられない。
穂高岳山荘着　15:30
同山荘泊

7月25日　風強し曇りのち晴れ
　台風の影響で風強し、今日の宿泊地北穂高小屋までは歩行時間約3時間と短いので台風が遠ざかり風の収まり具合を見てから発っても遅くはなく9:00出発。
涸沢岳着　9:20
　眼下に涸沢カールのキヤンプ地、赤、青、黄色、のテントと残雪とのコントラストが美しく鮮やかに見渡せる。先着の中年の女性、頂上の一番良い場所へ座り込み、なかなか動こうとしない。自然の移ろいの美しさに、感動して心ゆくまで堪能しているのであろう、写真を撮りたいが、あきらめて、次へ進む。頂上から約50m進んだところから右へ、垂直に落ち込んでいて高度感のあるところに、鎖がしっかりとりつけてある。体を前向きにして岩の上に座り、鎖を両手でしっかりと握り、ゆっくりと体を後ろ向きに振り替えて、足の位置を決めてから、三点確保で降る。
涸沢のコル、に近づいたとき、上の方から落石!と大声で叫ぶ、その瞬間、前方2～3m先、進行方向に2、3個の石が唸りを上げて勢きよいよく落ちてゆく。　直撃を受ければこの世にはいない、落石は厳禁。
　ドームを過ぎて北穂高南峰の登りきったところに目印のペンキが足元に塗ってある。　危険なところ、2、3、歩踏み出せば千尋の谷、断崖絶壁が大きな口を開けておる。
右へ折れて降りて行くと、南稜テラス→涸沢カール→北穂高岳→奥穂高岳の立派な標識がある。

北穂高岳着　12:30
　よく晴れ渡り空気も澄み切っていて、槍ケ岳がはっきりと見える、北アルプスの山々の眺望が素晴らしい。

北穂高小屋着　13:20
この辺りの山小屋では、少人数での宿泊は予約なしで、受けていただける。小屋では味噌ラーメン、如何ですか!と勧めてくれる、早速注文する、テラスから自然の移ろいを眺めながら、冷えたビール、味噌ラーメンの味は格別、幸せを感じる最高のひと時、イワヒバリが、下方の岩陰から、声高く飛び立つ。茜色の夕日が沈み、ガス灯の明かりで、ウイスキーを雪溶け水で割り、クラシック音楽を聴きながらグラスを傾ける、窓には星が煌めき、夜は静かに更けてゆく。(同小屋泊)

7月26日　(金)　快晴　4:45発
　晴れ渡ってすがすがしい天気、小屋の北側から急に落ち込んだ浮石の多いジグザグの悪路を慎重に下りてゆく、無風状態で澄み切った空気、今朝はこのたびで一番良い天気、左手に見える滝谷の岩壁は黒々として無気味みな感じ、迫力満点、鳥も通わぬ滝谷と言われるが、まことにその通りに見える。

飛騨泣き着　6:10
　下方の緑の斜面が美しい。A沢のコル着　6:50　慎重に長谷川ピークを過ぎて大キレットに差し掛かる　7:40　雲ひとつなく青空が広がっているが日当たりはなく静寂で気味が悪い、飛騨側の谷間の樹林帯の中に槍平小屋の赤い屋根がはっきりと見える、後を振り向き見上げれば、紺碧の空に北穂高岳の茶褐色の岩壁、その先端に小屋の赤い屋根が朝日を浴びて、素晴らしい眺めだ。徐々に浮石交じりの緩やかな登りが急坂になり鉢の底から這い出しているようなところ、南岳小屋の近くにある、獅子鼻への最後の急登、鎖あり梯子あり、一番きつくて苦しい。

獅子鼻着9:15
　今日は遠方まで良く見える。浅間山・八ケ岳・富士山・南アルプスの鳳凰三山・甲斐駒・北岳・白峰三山・荒川三山、近くの松本市街等、素晴らしい眺め、今までたびたび来てみたが、今日が最高の天気、こちらにも台風一過の影響があるのかも知れない。アルプスへ来たくてもできない人達が、多くいると思えば僕は幸せ者、つい両手を合わせて感謝する気持ちになる。
9:25　雪解け水の飲料水を買求め補給して、緩やかな斜面を登ってゆく。

南岳着9:50
南岳から稜線を下りきったところに氷河公園への標識が立ててある,そこから氷河公園が手に取るようによく見える、天狗池が残雪に覆われ、水面に映る逆さ槍を見ることができるのは、やはり盂蘭盆を過ぎてからであろう、中岳の中腹の雪渓から流れ出る雪解け水で体を拭き休憩する。
11:25　大きな岩が折り重なっている岩稜をゆっくり登ってゆく。

中岳頂上着　12:10
　槍ケ岳の穂がよく見える。
槍ケ岳山荘着　13:30手続きを済ませて、ザックを部屋に置き、折角ここまで来て時間もたっぷりあるので登山者でごった返す槍の穂へ登る、あまりにも人が多いので途中立ち往生する。頂上での360度の眺望は最高に素晴らしい。
縦走も無事終わり、お礼と感謝の意を込めて、祠に両手を合わせて般若心経を唱える。　同山荘泊

7月27日　(土)　晴れ4:35発
目標を達成して、昨夜は心地よく熟睡して目覚め爽やか気分が良い。下山する飛騨乗越は砂まじりの岩礫に浮石が多く滑りやすい。ジグザグの悪路を慎重に下りる。
標高2.200mまで下りた所に勢いよく水が湧き出ておる。　50代位の男性がその付近を清掃しておられた。　挨拶して湧水に触れると冷たい。その方がここら辺では名水で飲めますと言われた。
　その方の去る後姿をみれば、腰に手斧をぶら提げ足取りも軽く、土地に精通しておられる方、槍平小屋の主人かとも思えた。湧き清水はまろやかで実に美味しい名水で持参のペットボトルに満たした。
顔を洗い、体を拭き、さっぱりした気分で、朝食をとった。

白出沢出合着　9:50
新穂高温泉バスターミナル着　11:20
ここには村営無料温泉施設が近くにあり、バス乗車まで時間は充分あるのでゆっくり湯につかり、無精ひげも剃り、衣類も全て着替え心身とも気持ちよい、冷えたビールをいっきに飲み咽喉越し爽やか、達成感で最高の気分。
夜、帰福する。

無事、縦走が達成できたのは好天に恵まれたこと、両親から健康な体を授かったこと、更には福山山岳会の先輩諸氏から山に関する知識と技術の教授を受けた、お陰と有難く感謝しています。今後、福山山岳会の発展と会員の皆様の安全登山を心から祈念いたします。



長次郎谷から剱岳へ登って
2005年8月14日～16日



原田 千枝子

8月の例会登山、本を読んでみると、長次郎谷は古典的なバリエーションルートになっていました。前の年に剱沢でアイゼンをつけた場所が、長次郎谷出合い辺りでした。あの雪渓を登ってみたいと思う気持ちでリーダーに「私でも登れますか?」と相談しました。

「行けますよ」と言って下さったので申し込みました。

朝、立山駅に着き、車の中で朝食をとりましたが、食べきれなくて残り、車に置いたら暑い時だから腐ってしまうと思い、共同装備のザイルとテントのフライと一緒にザックに入れて背負ってみました。今までの山行で、今回が一番、重たいと感じました。靴も12本爪アイゼンにあわせて冬用の重たいものです。立山ケーブル乗り場で待つ間にも、車に置きに行こうかとずいぶん迷いましたが結局、重いザックは持って登り雷鳥沢の登りで、迷惑をかける事になってしまいました。私はゆっくり歩けば大丈夫と思っていましたが、福原会長が見かねて、少し荷物を山本リーダーに持ってもらうようにと言われました。

キューリ、ゆで卵、レモンの輪切りは、みんなで分けて食べ、そしてザイルも渡しました。福原会長に「食料は自分の食べる分だけ持ってくればいい」と言われました。いつも同じ事の繰り返しです。

剱御前着、小屋の中で休憩し、冷えきった体には温かい飲み物がご馳走でした。

剱沢のテント場までは下りが続きます。登っていた時の苦しさは無く、別人のように歩いて降りたようです。憧れの剱沢のテント場は色とりどりのテントがあり、ここに居られる自分が夢みたいでした。

翌朝は、風雨が激しく「中止だろうな」と思っていましたが、朝食後、雨具を着て、予定通り出発しました。剱沢雪渓に下りてから、雨具を脱ぎアイゼンをつけました。長次郎谷出合いから標高千メートル登ります。途中、熊岩の広いテラスがあり、ゆっくり休憩しました。剱岳にむかって右が八ッ峰でザイルで何人も登っておられました。左を見れば源次郎尾根で懸垂下降で下りる人達がありました。この場所に立った人にしか見られない光景です。登ってこれて良かったと、嬉しさでいっぱいでした。

左俣を長次郎のコルへと登ります。傾斜も強くなり深いクレパスが現れてきます。リーダーの山本さん、サブリーダーの福原さんがザイルを出して下さり、2組に別れて登り長次郎のコルに着きました。長次郎雪渓を振り返って見た時には、よく登ってきたな、と感動しました。八つ峰と源次郎尾根が迫っています。喜んだのは、束の間、これからの私はみんなの足を、ひっぱり迷惑をかけてしまいました。

ひと息いれた後は剱岳への登りです。途中、雨が降りだして雨具をつけました。視界が悪く、剱岳頂上からの展望は無く、すぐに下り始めました。カニの横ばいは慎重に下りました。テント場に着いた時は薄暗く、テントの中へ入ってからは、朝まで一歩も外へ出る事はなく、激しい風と共に雨も降っていました。翌朝、テントを片付けて室堂へと下りました。

リーダーの山本さん、いろいろと気を使われて大変だったと思います。自分の体力の無さをつくづくと感じると同時に、心に残る山行になりました。

剱沢のテント場に帰る暗い中を、ヘッドランプで足元を照らして、声をかけながら歩いてくださった福原さん。一緒に参加した山仲間達、ありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の反省

●無駄な荷物は持って行かない。

●ワンタッチアイゼンにあわせて

冬靴を履いたのを、履きやすい登山靴にあわせたアイゼンを選ぶべき。これは後から清家さんに教えていただきました。

剱岳・点の記(新田次郎)を読んで

もう一度、機会があれば、長次郎谷から剱岳に登ってみたいと思いました。

初めての剱バリエーション
源次郎尾根



川脇 喜美代

8月15日(火)天候　快晴

2:30　起床
3:45　剱沢キャンプ場出発
4:45　源次郎取り付き到着
5:00　登頂開始
7:20　Ⅰ峰頂上
8:45　Ⅱ峰懸垂開始
10:00　剱岳頂上
13:00　剱沢キャンプ場到着

取り付き～頂上　所要時間　5時間

メンバー　清家・槙・原田・川脇

何時でも何処でもすぐ眠れる特技の私でも、どうしたことかこの日は眠りが浅く、夜中に何度も目を覚まし、まんじりともしないまま2時30分「起きるよ!」の声に急ぎ身支度をしヘッドランプ頭に一行取り付き目指し出発(ヘッドランプは、安全登山の為には、歩き仕様の明るい物必須)途中雪渓に出くわしアイゼンを装着、明けの明星に励まされながら取り付きに到着。前日の懸垂で40人待ち!の情報に早起き・出発したおかげで、先行パーティーは2パーティーとまずまずの出足!急登と聞かされ怖気づいていた私に追い討ちをかけるように「ここからは藪漕ぎ」の声にまたまたえっ?…ストック・アイゼンをザックにいざ開始!確かに急登だが藪とはいえ丈夫なハイマツに助けられながら、木登り・岩登りと連続登攀。途中かわいいタテヤマリンドウに「おはよう!」ウサギギクに「頑張るからね!」と、心で話しかけながら、しんどいけれど黙々と歩いて登るよりは遥かに楽しく、浮石を落とさないように注意しながらⅠ峰目指し進んで行く事、2時間20分。安心できるリーダー2人に挟まれ、不安に感じる事も無く無事到着。しかし、「後から声がする!」「パーティーが来る!」と、リーダーに発破かけられ休む間もなく元気出してⅡ峰を目指すこと1時間20分。岩登り・クライムダウンと懸垂場に到着。懸垂下降もエイヤッ!とちょっとヒヤッとしながら無事下降。振り返って眺めたⅡ峰のすばらしさ!右手に八ツ峰の眺めがすばらしく、ロッククライミングのCフェイス・Dフェイス…となんと!本に載ってる通りの姿が!!もう後は剱岳本峰を目指すのみ!今までは、一般ルート側からの剱の姿しか見てなかった私ですが、今回源次郎側から見た剱の姿・八ツ峰の姿……登頂したときのあの感動は今思っても不思議なのですが、何ともいえない気持ちでいっぱいでした。登攀中不安に感じることも無く登れたことが良い思い出に繋がった一番のことと思います。信頼のおける指導者の下、蔵王のクライミング講習に始まり、色々と岩の練習を指導して頂いたお陰で今回の登山が実現できたと思います。皆さんもどうぞ、どしどしと蔵王のクライミング講習に参加して、夢を実現してください。今回、鈍亀の私を叱咤激励しながら、引っ張って下さった清家さん、槙さん本当にありがとうございました。また、そんな私を暖かく見守って励ましてくださった原田さん、広島の高原さん本当にありがとうございました。感謝です。



北八ヶ岳縦走記
2006年9月21日～24日



妹尾　英明

梅雨明けに、南八ヶ岳山行を計画していたが実施寸前、長野県南東地方に集中豪雨!
中央自動車道、駒ヶ根～諏訪間が通行止めとなったので、来年の実施に延期とする。
山仲間から北八ヶ岳の景観、特に秋が素晴らしいとかねてから聞いており、行ってみたいと思っていたので、代案として福原氏のお勧めで、会に北八ヶ岳山行の計画書を提出し参加者を募った。
当初は25名の希望者があったが体調不良、事故、家庭の都合等で辞退者が増え、16名となった。
一人当たりの負担金が大幅に増すが、参加者の皆さんの意気込みもあり実施することにした。
経験豊かな福原氏、サブリーダーを快く受けて頂いた皆さんも参加されることになり心強く有難い!

9月21日(木)曇り
福山オート観光　19:25発

9月22日(金)曇り
諏訪SA　　02:40着
福原氏の助言で、SAにテントを2張りして、仮眠する。足をのばしてぐっすり熟睡できたので、目覚めもさわやかで気分が良い。　テント泊を数多く経験された福原氏には頭が下がる!
06:00発　白樺湖畔を経由してビーナスラインのスズラン峠を経て女ノ神茶屋 06:55着　気温14℃
登山準備をして　07:15発
天候は徐々に回復して晴れ間も広がる。蓼科山は日本百名山の一つ、標高2.530mで、山岳ガイドでは頂上までの所要時間は2時間30分とあるが、我々はゆっくりペースで、3時間25分を費やして10:40　たどり着く。
他の登山者は往路では見かけない。皆さん岩魂と急登の予想以上の歩き難い道をよくぞ頑張られました!
これも福原氏の助言でテントでの仮眠効果と、大野氏から登山道勾配と歩行時間配分の兼ね合を計った資料を事前に提出頂いた賜物と参加者一同、感謝々!
気温も15℃前後と、すがすがしく、さわやか、無風状態で快適!　山頂で登山者一人、二人と出会う。

将軍平から眺める白骨林の美しさ、こちらでは、縞枯と称されておる。大河原峠を経て～双子山(2.224m)頂上　14:30着　ここからの眺めは抜群!
汗かいて、苦心して、辿った稜線が美しく、眺める悦び、心身共に癒されます!

下りにさしかかり、落葉松(からまつ)林(ばやし)がようやく色づきはじめている程度、紅葉は、20日間程度早いと思われる。
雄池、雌池の双子池がある、2,030m地点までは岩魂が苔に覆われ滑りやすく歩き難い道。
ロープ渡しのタイミングのずれにより、一名が足を滑らせ、転倒してお尻部分を強打した様子で気にかかる。

今夜の宿泊地、双子池ヒュッテに15:20着。
雄池、雌池の透き通った水の美しさ、鏡の如し、宿のご主人が塵を取り除き、手入れしておられるとのこと!
新築の2階、個室部屋に分散して宿泊する。2名が同時に使えるシャワー室もあり、汗を流してさわやか!
思いもよらぬ待遇が有難い、夕食後、湖畔の静寂に包まれ、安らかに就寝する。

9月23日(土)晴れ　気温　7℃
昨夕の食事時に宿のご主人が、今日の行程予定の三つ岳は危険な箇所があり、誰でも行けるところではないから取り止めて、北横岳ヒュッテから七つ池を見て、坪庭を経て雨池峠～縞枯山へ行きなさいと進言して頂く。朝食を済ませ、準備体操後　06:05　大岳を目指して出発!

雄池、雌池間の鬱蒼と苔むした樹林帯に入り赤いテープの目印を頼りに進む。このコースは人の踏み跡が少なく、登るにつれ大きな岩が立ちはだかり、苔もあり滑り易い。
降雨であれば通れる道ではないが今日は幸い天気がよく、昨日負傷された方もあり、ゆっくり時間をかけて行く。
CL、SL、皆さんの的確な足踏み場の指示、ロープでの確保、見ていて素晴しいチームプレイ、特にSL、福原さんの負傷者に対しての心配りと思いやりに心打たれよい参考になりました。

大岳頂上(2.382m)09:00着
晴れ渡り素晴しい眺望!　浅間山の噴煙、遙かに北アルプスの峰、昨日登ってきた蓼科山～将軍平～双子山の稜線、これから目指す北横岳の北南のピーク、北横岳ヒュッテの赤い屋根、苦しみ喘ぎながら登ってきた甲斐がありました!　達成感に浸る最高のひととき、心が癒されます!
今日、登る峰の中では最高峰の北横岳北峰(2.480m)は目の前!　天気も良いし、ゆっくり登りましょう。
行く手左の谷間に七つ池と思われる池沼が見えてくる。
最後の鎖を慎重に登りきれば北峰の頂上!
10:15着　好天に恵まれ眺めが素晴らしい。
昨日から辿(たど)ってきた稜線が眼前に、その遥か彼方に北アルプスの峰々、南に位置する八ヶ岳連峰!
来年には必ず、会の皆さんと登りたい、わくわくする。
右手には南アルプス!　大勢の大学生で頂上は大賑わい、広島から来て蓼科山～大岳を経て登って来たと話したら皆さんびっくり、別れ際に集合写真を撮って頂いた。

南峰(2.473m)は緩やかで僅かな時間で着き、さらに下り北横岳ヒュッテに至る。
折角ここまで来たので、七つ池を見なければとザックを置き2分程で着く。
しかし神秘的な風情がなく、降雨の溜まり場、大きな池にすぎない。

ロープウェー頂上駅をめざして降りて行くが、この辺りは軽装の登山者が多く、家族連れと行き交う。
坪庭は岩石の自然の造形美、木道を敷き詰めた遊歩道を設え、秋の紅葉狩には観光客で賑わうと思う。　昨日の転倒で怪我をされた方はロープウェーを利用して下山し、今夜の宿泊、麦草ヒュッテへ車で向かう。
よくここまで頑張って来られた、さぞ辛かったと思われる。
福原さん、サブリーダーの方々の思いやり、皆さんの励ましを実感した。
これから続く、縞枯山～茶臼山～麦草ヒュッテまでの行程に備えて昼食と休憩、
12:15発

木道を歩き、縞枯山荘を左に見ながら通り過ぎ、雨池峠12:35着
ここから縞枯山(2.403m)をめざして、ゆっくり登って行く。　振り向けば雨池山の見事な白骨林の景観、縞枯山頂上　13:05着　頂上には先着の14～15名程度の中高年男女の登山者、聞けば三原市から来たとの事、記念写真を撮っていただく。三原の登山者、雨池峠へ降りてゆく、気を付けて頑張ってください!

茶臼山(2.384m)へ登る。14:15着
頂上は樹林帯の中にあり見通しが悪いが、少し西へ行くと展望の素晴らしい地点があるので行くことにした。
北、西、南、が見渡せ、縞枯山の白骨林の連なる美しい景観、眼下に広がる色付いた樹林帯、その合間にメルヘン街道、南八ヶ岳の急峻な峰々が眼前に迫っている。

この度の山行のクライマックス!　皆さんの笑顔、満開!　今夜の宿泊、麦草峠にあるヒュッテも見え隠れしている。　最後の踏ん張り、頑張りましょう!　これから先は麦草峠(2,120m)へ下山するのみ、大石峠～中小場を経て～赤い屋根の建物と駐車場に止めてある自動車が眼下に見えてくる。
最後の木道を通り、左に茶水池をみて麦草峠!
メルヘン街道を渡れば今夜の宿泊地、麦草ヒュッテ15:40着

　三階の相部屋は貸し切り!　16名では余裕も十分あり、ゆっくり寛げる。浴場もあり、食事も良く、酒を酌み交わし話も弾み夜は静かに更けてゆく。

サブリーダーの福原さんの提案により明日、諏訪大社参拝と中央アルプスの麓、養命酒駒ヶ根工場の見学をして帰福することにした。

9月24日(日)快晴　気温　7℃
　目覚めてみれば、素晴らしい天気!　麦草園地を散策する。木道には朝露が白く、気温は5℃、遥かに浅間山噴煙がみえる。
茶臼山、縞枯山の白骨林の連なりはどの方向から見ても美しい!ヒュッテ裏には薬草になるトリカブトの群生、すがすがしい朝である。　07:00発

　曲りくねったメルヘン街道を下って行く。木立の間に姿を現す、南アルプスと中央アルプスの峰々の眺望が素晴らしい!
諏訪大社　07:30着
さすが歴史ある神社、山懐に鎮座する、荘厳で風格ある建物!　寄って良かった!
　帰り際、みやげもの店に信州名物のリンゴ!　福原さんの解説では収穫前、リンゴを除々にまわして陽に当てれば、糖分が多くなり、甘味が増すとのこと。そのように手間を掛け、栽培しているわりには、店では半額大安売り!
多くの方が、買った様子、食べてみれば、甘味があって軟らかく美味しい!　08:30発　快晴の中部山岳地帯の中央自動車道を快走する。右前方向に中央アルプス、左肩越に南アルプスの稜線、素晴らしい眺め、目を凝らして見入る。

養命酒駒ケ根工場　09:30着
　中央アルプス麓の自然環境に囲まれた近代的工場!
渡り廊下から中央アルプスの木曽駒が岳、宝剣岳、空木岳、そして南アルプスの甲斐駒ケ岳、千丈、悪沢、などの峰々が見え、素晴らしい眺め!
工場敷地内には自然の渓谷、透き通った水の清らかさ、木立に囲まれた遊歩道、点在する縄文、弥生、飛鳥、平安、時代の住居復元模型を見て廻る。

17:35　福山帰着

北八つに
　挑む力を出し合える
　　仲間多きに晴れて爽やか


白駒池

鷲ヶ峰(高岳北尾根)登山報告書
2004年5月21日～23日


福原 不二雄

今まで何百回となく山行をやっているがこの山行ほど参加者が感動した山行はなかった。
岩尾根をよじ登り、稜線に出たときのあの喜びよう、まさに指導者冥利に尽きる山行でした。
全身全霊をつぎ込み、全力を出し切って成し遂げたという思いが強かったからでしょう。
阿蘇の大平原を見下ろす素晴らしいロケーション、高度感と緊張感のある岩登り、爽快な懸垂下降、訓練の成果を発揮できた山行でした。
　「鷲ヶ峰哀歌」そのものの世界、心に残る満足すべき山行でした。

1) 日時
　平成16年5月21日(金)～23日(日)
2) メンバー
　CL　福原不二雄
　SL　山本逸男(兼　装備)
　SL　石井裕子(兼　会計)
　　佐藤茂利雄(記録)
　　原田千枝子(記録)
　　溝部幸恵(食料)
　　川脇喜美代(食料)
　　小林征三(装備)
　　森島幸則(装備)
3) 行程
　5月21日(金)
福山駅北口20:00―22:00JR宮島駅22:13
――大野IC22:22
　5月22日(土)
0:15壇ノ浦0:45―― 1:25古賀SA(仮眠4:45起床、食事)5:25――6:30北熊本PA6:45――7:50仙酔峡
8:20　仙酔峡出発　ミヤマキリシマはほとんど花なし。硫黄の匂い強し
9:10～9:22　空谷を遡行し谷底で登はん装備を装着。行止りで引き返し斜面を左上に登る(踏み後あり)
10:15　第一キレット
稜線に到着。休憩後ザイルを固定し登る。
10:40　ガレの急坂を登り、広い尾根に、眼前にジャンダルム、その後方に巨大な岩壁があらわる。
12:15～14:00　ジャンダルム
山本、福原以外はクライミングシューズに履き替える。
ひとりづつザイルで引き上げる。上部の浮石、ガラ場の石が落ちるので要注意。小林がビレー、山本、福原がこれから先のルートを捜す。
東壁は藪こぎその先は不明、西壁側に踏み跡あり。
トラバースし草付の岩壁を登る。
ペンキの印があり安堵す。
14:35　鷲ヶ峰
絶景なり。広大な外輪山。九重山、傾山もかすんで見える。異様なとがった根子岳もすぐ足元にある。
水づく緑の田んぼが眼下に広がる。美しきかな瑞穂の国はまさにこの風景なり。
大感激で記念写真をとりまくる。
14:50～16:45　第二キレット。
懸垂下降で下る。はるか下まで岩場が続く、赤ガレた不気味な深い谷間。
懸垂支点は何十本も古いザイルがたばねてあったが、横に立派なボルトの支点がある。
岩壁　②　トップロープをセットし登る。
岩壁　③　左壁に踏み跡があるが不安定なガレ場、落ちれば数百メートルの宇宙遊泳。だから正面から登る。
痩せ尾根　ザイルを固定しブルージック行く。
18:30　一般登山道にでる。
万歳!!!!　もう岩場は無い。
よくぞ登ったもんだ。
日暮れも近いので直ちに下山する。
山頂付近一面のミヤマキリシマは枯れて茶色になっている。(火山ガスのためらしい)
18:50　仙酔尾根分岐
　月面の様な荒涼たる風景が広がっている。ごろごろとした岩が溶岩で固められている。滑ら

ないので歩きやすい反面デコボコなので躓きやすい。
19:30ヘッドランプを使用。
20:00〜20:25　駐車場
　温泉に行く予定であつたが、この感激、喜びを流すのは惜しいと言うので風呂に行かず、食事にする。
21:00　焼肉パーティ
　美味しい焼肉とビールで乾杯。
女性陣は食後、明日のためにおむすびを作ってくれました。
22:30　就寝
　翌日は根子岳に登り、阿蘇ファームランドで入浴、食事を摂り、熊本インターより高速道路に入り約6時間かけて福山に帰りました。

　講評

1、「やれば出来るは、魔法の合言葉」
　目標を決めよく練習をしたので、技術も上達しました。
　自分の力を十分に発揮できたので感激も大きかったようにおもいます。
2、お互いによく協力し気持ちよい山行が出来ました。
　テント設営、料理、会計、記録も正確に録れていました
3、天候に恵まれ幸運でしたが、技術を磨き迅速な行動が望まれる
　危険なところに長くとどまらないように。
　岩場も登山靴で登れるよう練習をする。
4、平常心で行動できていれば、気も行き届き事故は無い。
　念のためツェルトも持参していたが、まさかヘッドランプがいるとは意外であつた。
　万全の用意が出来ていればを慌てないで行動できる。　予備の電池も忘れずに

鷲ヶ峰哀歌

作詞　作曲　傍示暁了

1、山すそかすむ大阿蘇の
　　黄煙湧きて雲誘う
　　赤き岩肌霧に濡れ
　　むせぶか今日も鷲ヶ峰
2、清き流れの仙酔の
　　水の面に名残とどめ
　　ザイルを肩に出で立ちし
　　雄々しき姿今いずこ
3、死なば山でとかねてより
　　秘めし想いは変わらねど
　　あわれ北壁紅に染め
　　霧の谷間に消え行きぬ
4、煙は舞いて空に消え
　　御霊は逝(せ)いて地に眠る
　　呼べど答えず赤ガリに
　　こだまも悲し鷲ヶ峰

鷲ヶ峰哀歌は、昭和28年この山で明善高校山岳部員が転落死したのを悼んで同校教諭の傍示さんが作った曲です。
YAHOOの場合「鷲ヶ峰哀歌」で検索すればカラオケで聞くことも出来ます。



二ツ岳〜赤石山縦走の記



越智　修三

　この度、山行4000回達成と知り感慨無量です。私が入会させて頂いたのは昭和35年、今から50年近く前の事で当時の会長は初代の「大村氏」でした。最近は諸々の事で山行にご無沙汰していますが、心に残っている山行は40数年前の二ツ岳〜赤石山の縦走である。

　昭和35年福山に来る前に、先輩から言われたことがある。「地方に行って続けて山登りをするのであれば、先ず良い山岳会に入る事が大切だ。」と助言された。
　初出勤の日、会社の人に「会社に山登りをしている人がいますか?」その日の昼休憩時間に、早速教えられた職場を訪ね、福山山岳会の情報を知ることが出来た。
福山では山岳会は一つしかなく、良い山岳会を調べる必要が無くなった。
早速その日の夕方大村会長のお店に、会社の先輩で福山山岳会員の和田さんに同行して頂き、入会のお願いに出向いた。
その当時は、入会の希望があっても、直ぐに入会が認められないのが普通でしたが、大村会長と和田さんが紹介者になって、入会することが出来た。
　その当時は娯楽も少なく、折からの登山ブームも手伝って、何処の山も人で溢れていた。
近場の大山、石鎚は良く出掛けたが何時も人が多かった。
何処か静かな山はないかと思っていた時、四国石鎚山系の二ツ岳〜赤石山の話を聞き、ガイドブック等で調べてみたが二ツ岳、赤石山単独での記事は有ったが、縦走ルートの記事を見つけることは出来なかった。
一部に縦走路は廃道に近く、かなり荒れているという程度しか書いてなかった。
地図では尾根上に点線が記されていたが、実際にはかなり厳しい道だなと想像できた。
　調べるにつれて、さぞかし静かな山だろうなあ——との思いが膨らみ出掛ける事とした。
　入社の次の年の5月の連休に、会社の先輩で山岳会員の和田さんと2名で出掛けた。
夜中の尾道〜今治鉄道連絡船に乗り、今治駅から一番列車で伊豫土居に向かった。
列車が新居浜を過ぎ土居に近づく頃、鋸状の稜線が日の出前の黒い山のシルエットとなって、中空に浮き彫りになり、あの稜線を歩くのかと想像し心弾ませた記憶が今も頭に残っている。
　早朝土居駅に降り、地図片手に中川の集落を目指して出発。当時中川は数軒程生活をしていたが、今では廃屋すら見ることが出来ない。中川から登山道に入ったが、思ったよりしっかりした山道だった。
夕方が近づき何処で野営をするか、物色しながら歩いていると、鉱山の飯場と思われる廃屋を見つけ一夜の宿とした。
　早朝出発して30分も歩いた所に営林署の無人小屋があった。昨夜の一泊が残念でならなかった。山道らしい状態の道は峨蔵越まで別子山村への下り道は良いが、二ツ岳への稜線に取り付くと廃道が始まった。
それでも二ツ岳の頂上まではなんとかなった。
しかし二ツ岳から東赤石へ向けての縦走が始まったら、想像以上に荒れた道で列車から見た鋸状の岩稜が始まり、垂直の岩の上に出たり下れないような急斜面が出てきたり、その都度バックして正規の縦走路を探す作業を行いながら、前進しなければならなかった。
　初めのうちは又間違った、又と腹を立てていたがその内正しいルートを見つける面白さが出てきて、この作業も楽しくなってきたから不思議である。
後で気づいたのであるが、道を間違えないよう道のわずかな窪み具合、木の根、露出した石の踏まれ具合、獣道ではないか等、常に緊張と確認の連続であり、これがこのルートの魅力となって

いるような気がしている。
ザイルを必要とする程の岩稜ではないが、何箇所か岩をへつらなければならない場所も有る。エビラ山迄進むと岩稜は無くなり普通の荒れた山道となる。体力には余裕が有った2人であったが、東赤石山の頂上に立ったときには、太陽が正に西に沈む寸前であった。
岩室が有ることは知っていたが位置が分からず、取りあえず東赤石頂上近くのオーバーハング状の岩の下で、ツェルトを被って寝ぐらとした。
次の日西赤石に向けて出発、途中岩室への表示を見つけ位置を確認のために、縦走路から分かれ下ってみた。物住頭のトラバース（気持ちよいバンド歩き）を過ぎると、西赤石以下銅山越、東平（トウナル）鹿森ダムと緊張から開放されて、見晴らしの良い稜線下りになる。
東平（トウナル）より鹿森ダム迄は、水量豊かな沢を眼下にしながらの下りとなる。
東平周辺に有った別子銅山の社宅の人達の生活道でも有ったと思われ、急斜面はコンクリートで舗装され、歩きやすいとは言えないが、眼下に鹿森ダムが見えて素晴らしい眺めの下り道であった。

昭和36年～7年位の東平は、周囲の山に社宅が立ち並びそこで生活している人も見受けられた。銅の生産は既に中止されていたが、至る所にトロッコの軌道が残り生活の匂いがしていたが、行く度に様相が変わり、生活が行われていた社宅はゴーストタウンとなり、廃屋となり今では綺麗に公園化されて、広い駐車場が出来資料館が建てられ、時代の流れを感じさせられている。
あの何とも言えない緊張感と静かな山に魅せられて2回目に同じコースを同じパートナーで2年後の春に出掛けました。
前回の山行で様子も分かっているので気楽な気持ちで出掛けました。
朝から天気が悪く土居駅からタクシーを使用した為、小屋には2時過ぎには着くことが出来ました。
小屋には愛媛大のワンゲルの学生が6～7名入っていた。（女性2名）
夕食の支度をするには少々早いし、外は雨だし退屈しのぎに同行の和田さんと将棋を指していた。（紙で作られた盤と駒）3時頃に、入り口から初老の男性が入ってこられた。
「コンニチワ」と挨拶を交わしたが、その人を良く見ることなく将棋をしていた。
一段落して先ほどの人に目を向けた時、これはほおって置けないと感じた。
雨具は着ているが、ガタガタ震えて下を向いて座り込んでいる。
顔を見ると唇は紫色になり、話しかけても返事が無い。これはいけない。ほおって置けば大変なことになると感じ、愛大の学生に声を掛け全員で対応に当たった。
私が一番年上だった為命令口調で指示を出した。裸にして全身乾布摩擦を行い、女性にはお湯を沸かして貰い、渇いた服に着替えさせ水筒を湯たんぽにして寝袋の中で横になって貰った。
一段落ついた所で火傷しない程度の暖かいミルクを飲んで貰った。2～3時間後にシュラフの中から「ようやく暖かさが感じられる様になりました」と聞き全員ホッとした記憶が今も鮮明に残っている。
処置の良否は定かではないが、無事自力で下山出来た事は何よりと思っています。
愛大のパーティは気持ち良く下着、寝袋を提供してくれ全員で、濡れた物を乾かし次の日には下山に同行してくれた。
素晴らしい若者達であった。
私たち2名は次の日、早立ちの為名刺をお渡しして別れましたが、後日会社に御礼に来られ恐縮しました。数年賀状も頂いたが息子さんからの手紙で亡くなられたことを知った。

次に思い出される山行は、山田（宗）、三好、立花さん歴代会長とご一緒させていただいた11月初旬の山行でした。
二ツ岳～エビラ山の岩稜で時間がかかり、エビラの頂上に着いた時には赤石の小屋に着くのは、かなり遅くなるぞと覚悟しなければならない時間でした。
岩場は過ぎているのでライトを頼りにゆっくり行けば大丈夫と思っていた。

しかし雪が降り始め、メンバーの1人から先に行って迎えに来てくれないかと言う発言があり、私が一人先行して自分の荷物を東赤石山の山頂に置き迎えに引き返した。
山田さんは体調が優れなかった為、空身で歩いて10時過ぎに小屋に着くことが出来た。
小屋は無人でしたが調理場のガスを使用することができた為、手早く食事の用意ができて助かった。
気持ちの寸志を封筒に入れ、管理人室のポストに投函して出発した。外は一面銀世界。
何時も気持ち良く歩く。バンド歩きも二十センチ位の積雪で緊張しながら慎重に通過した。

次に思い出される山行は、小土井、天野、市議の森島さんとご一緒した時のこと。
台風で営林署の小屋が倒壊して使用できないと言う情報があり、テントを持参した。
小屋跡にテントを張ったが、小屋の前に流れている沢の水が涸れている。良く見ると石ころの奥のほうに水がわずかに「チョロチョロ」と流れていた。この水を取り出す方法を考え、ふと思いついたのが枯れた「いたどり」の茎。これを石ころの間に差し込み茎の先から水がチョロチョロと出てきた時は童心に返って「やったー」と言う思いがした。
この水をコッヘルに受けておけば直ぐ満杯となり、炊事に使用するのに十分な水であった。
普通家庭で見過ごす無駄も馬鹿にならない事を痛感した。この時も縦走の岩場で時間がかかり明るい内に小屋に入れないことが予想出来た。
前回同様私が単独先行してと考えたがメンバーからパーティが二つに分かれるのは良くないという意見が出、それは当然だと考え体調不良の方のザックを私のザックの上に載せてボチボチ進むことにした。
岩場は過ぎていたが藪こぎは続いていた。その中で自分のザックの上に荷物を置いて片手で支えながら歩いた時には流石に歩きにくく「へこたれた」。以後自分の荷物が少ない時でも極力背負い子を持参するようにしている。
この時は前回より早く小屋に入ることが出来た。（8時頃）次の日銅山越、東平、鹿森ダムバス停へと全員元気に下山した。

最後に縦走したのは10年前に中川、奥平さんと出掛けた時の事。縦走路は以前に比較してとても歩きやすくなっていた。同時に同行の二人も元気で明るい内に小屋に付く事が出来た。食事後私は早々に寝袋に入ったが同行の2人は管理人室にお邪魔して他の登山者と酒を酌み交わしながら歓談し、中川さん自慢のボディビルを披露したとか等々盛り上がったことを次の朝聞かされた。
下山の途中、西赤石山への日帰りの単独登山者と一緒になりその方に東平から新居浜駅迄車に便乗させて頂いた。お陰で陽のある内に列車に乗ることが出来た。全員が快調に歩いたと言うこともあるが何より東平から車で新居浜迄短縮したのが大きい。便利になった反面東平からの下りの良さが味わえなくなった。その他に鈴木、小土井、市議の松岡さんと銅山峰ヒュッテに一泊して次の日東赤石山を越え権現越から上野河又の方へ下った事が有るがこの時の下りも凄く荒れた廃道に近い道だった。
赤石山系は静かな山では有るが廃道に近い道も多い為気をつけなければならない。余りに私が二ツ岳～赤石山にこだわる為妻が一度行って見たいと言い出した。体力的に通して縦走は無理なので2回に分けて出掛けた。
1回目は中川に車を置いて営林署小屋跡でテント泊、二ツ岳～赤石山の縦走路を一部歩いて往復、下山2回目は東平に車を駐車して東赤石小屋に一泊の往復を行った。この時銅山越から東平への下りで失敗をしてしまった。この原稿に書かなければ初めてのコースを歩く妻は気づいてないと思うがそれは銅山越から若干遠回りをしてカラ松林の林間を下りヒュッテの前を通り過ぎて東平へ向かうのが普通だが、この時は銅山越から直ぐ下る近道を選んだ。
ヒュッテから東平への道に合流するのだが一本手前の合流点で、正規の合流点と勘違いをし間違った方へ右折してしまった。正規のルートは穏やかな下り道の筈。それが道はしっかりしているが、

等高線上に道は続きほとんど下っていない。腐りかけた丸木橋を用心しながら二本渡った所で道がおかしい事に気づいた。本来ならそこから引き返すべきだったが、地図上では違った道は理解できた。
一度も通ったことは無いがこの道は少々遠回りするが、東平に下ると言う事は知っていた為そのまま進むこととした。
後から思うと気づいた時に直ぐ引き返していれば、随分早く東平へ下ることが出来たと思われる。お陰で最後に道が悪くなり、ドカ下りとなりライトを使わなければならないほど時間がかかってしまった。東平に着いた時にはやれやれと胸を撫で下ろす思いだった。

二ツ岳に登っての帰りに何時も今度来る時は別子山村の方から登る計画をしようと考えるが、いざ山行となると不思議と二ツから赤石縦走コースになってしまう。

このコースは決して危険なコースではないと思うが困難なコースの部類に入るのではないかと思われる。鋸状のミニ岩場を含んだ間違い易い緊張した縦走、気持ちの良いバンド歩き、遠望の素晴らしい西赤石からの下り道銅山越からのカラ松林の下り、水量豊かな沢を見下ろしながら下る東平からの下り、何処を省略しても成り立たないような気がする。

最近東平迄車が入るようになった関係で水量豊かな沢の流れ、鹿森ダムを望む素晴らしい遠望を省略する事が多くなったが、時間が許せば一度下ってみては如何ですか。

前半厳しく後半のんびり。
気持ち良く無事やり遂げたと言う充実感が込み上げてくるのがこのコースの持つ魅力のような気がしてならない。

6回目の干支を迎え体力の衰えが自覚できるようになった最近、体力を要求されるこのコースに又行くことが出来るかどうか定かではないが、出来れば又一度行きたい山である。

浦島太郎の白峰三山縦走



小林　浩二

平成17年6月の会報で「白峰三山縦走」の山行予告を目にした時、私の脳裏に永らく忘れていた青春の日のかすかな記憶が走馬燈のように駆け巡った。
今を去ること43年前、山の仲間5人と同じコースを縦走したのである。当時、南アルプス林道は未だ開通しておらず、北岳は秘境中の秘境と言われていた。　夜行列車で早朝甲府に着き、バスの始発には時間があったのでタクシーで芦安村に入り、ここから谷間の山道を広河原目指して歩いたが、この山行の中でもこの日が一番きつかったように記憶している。

この頃の装備は現在の物より嵩張り重かった。主食はご飯・パン、それに当時発売されたばかりのチキンラーメンだった。アルファ化米やレトルト食品等は無かったので、米を持参して飯盒で焚いたが、高所で気圧が下がると沸点も下がるので水加減が難しかった。燃料は今のように小型軽量でないがガソリンやガスのコンロを使用していた。

リュックサックは帆布で作られたキスリング型と言われる横に広いもので、左右のバランス良く荷詰めしなければ背負ったとき片荷になり安定しなかった。

テントは帆布製の家型、支柱は鉄パイプで、雨の時はビニールシートを覆っていた。

ザイルはマニラ麻が主流だったが、雨に濡れると堅くなりキンクし易くなるので、アマニ油を染み込ませて使っていた。ナイロンザイルは数年前から市販され、メーカーは「マニラ麻より軽くしなやかで、数倍の強度がある」と宣伝していたが、高価で、薄給の私には高嶺の花だった。また、昭和30年某山岳会のパーティが前穂高岳東壁でクライミング中、岩角でナイロンザイルが切断し、墜落死する事故が起こった。同山岳会はナイロンザイルは岩角に弱いという報告書を発表したが、ザイルメーカーは某大学教授の指導により、マニラ麻とナイロンザイルの強度実験を行って、岩角でのナイロンザイルの強さを証明し、「ザイル操作のミスだ、事故報告書は虚偽だ」と反論した。大学教授の威光は絶大で、山岳誌もこの論文を掲載した。しかし、この実験には偽装が施されていた。岩角を少し削ってナイロンザイルが切れないようにされていたのである。この論争は20年近くに及び、ザイルメーカーが非を認めて謝罪したのは昭和40年代の終わり頃だった。事故の1～2年後、井上靖がこの事故をモデルに『氷壁』を新聞に連載したので、世間の注目するところとなった。井上靖に続いて脚光を浴びたのが新田次郎である。彼はそれまで歴史小説を書いていたが、山岳小説に転じ『縦走路』『冬山の掟』『風雪の北鎌尾根』『孤高の人』『八甲田山死の彷徨』等数多くの作品を発表して人気作家となった。

第二次世界大戦と敗戦後の復興で低迷していた日本山岳会も昭和30年代に入ると世界第7位の高峰マナスルの初登頂に成功し、記録映画として上映された。これに続いて日本人によるマッターホルン北壁とアイガー北壁登攀の快挙により、30年代半ばから40年代中頃に至る第一次登山ブームとなった。しかし、近年の第二次登山ブームと異なり、中高年になって山登りを始める人は無く、たまにお目に掛かる中高年者はこの道のベテランの方々だけであり、若者の世界であった。

筆が随分横道に逸れてしまったが、広河原への道中は視界は全く開けず、行けども行けども大して景色が変わらないので同じ所を歩いているような錯覚にとらわれ，暑さにも閉口した。当時は登山に限らず運動中に水を飲むとバテルと言われ、喉が渇いたときは口の中を湿らす程度にするよう、先輩から指導されていた。このため二人が遅れだしたので、若いTと私が先行して幕営の準備をすることになった。当時の広河原は静寂そのもので、10張り程のテントしかなく、私の記憶では山小屋等は無かったように思う。

2日目からの縦走は天候にも恵まれ、快適そのものであった。大樺沢から北岳のバットレスを仰ぎ見た時、その迫力に圧倒され疲れも吹き飛んでしまった。ここでアイゼンを付けて雪渓を登ったが、北岳から農鳥岳までの縦走中他のパーティとすれ違った記憶が無い。それほど登山者が少なかったのであろう。

福山山岳会の「白峰三山縦走」の山行予告を読んだ時、未だ会員ではなく、入会希望者であったが「10年程の登山経験があり北岳にも登ったことがある」と、リーダーに話して参加の許可を頂いた。今回の参加者は19名と聞き、失礼ながら、中高年者がこんなに大勢でエスケープルートの無い長距離の縦走路で落伍者が出たらどうするのだろうかと危惧したが、これは私の思い過ごしであった。リーダー・サブリーダーのもと、体調の悪い人を互いに助け合って全員が無事下山したことに感動した。

7月16日早朝、バスは南アルプス市芦安に到着、ここでジャンボタクシー2台に乗り換えて南アルプス林道に入り広河原に向かったが、車は数珠繋ぎの状態で続いていた。時折眼下に見える谷間の道を40数年前喘ぎながら一日掛かりで登ったのか、あの時の山仲間は元気でいるのだろうかと感慨に耽っていると、40分程で広河原に到着した。

嘗て秘境と言われたその地は都会並みの雑踏であった。しかも、山を我物顔で闊歩した若者の姿は消えて、最新の色とりどりのウエァにザックを担ぎ、ストックで武装（?）した中高年の登山者でごった返していたのである。テレビや登山誌等から得た知識としては頭の中にあったが、この現状を目の当たりにした時、余りのギャップに呆然としてしまった。将に竜宮城から帰った浦島太郎の心境であった。

北岳への登山道も長蛇の列で、ただひたすら前の人に続いて登るだけだった。雪渓の雪は随分少なかったが、樹林帯に登山道が造られており、この急登を登り切ると小太郎尾根に出て、緩やかなハイマツ帯を登ると、この日の宿である北岳

肩ノ小屋に着いた。

この度の山行で私が一番閉口したのはこの小屋泊まりであった。芯の残るご飯・生ぬるい味噌汁・脂の多い豚の生姜焼き、仕方なく半分残して持参したラーメンで空腹を満たした。寝床として与えられたスペースは身動きさえ隣の人に気兼ねするほど狭く、睡眠導入剤を飲み、耳栓をしてシュラフに潜り込んだが、安眠とは程遠い状況だった。

縦走中一番驚いたのは、70歳前後とおぼしき女性と、間ノ岳ですれ違った時である。瞬間、グループから遅れているのかと思ったが、彼女の前後にはかなり先まで縦走者は見えず、疲れている様子も窺えず、明らかに単独行者であった。あんなに高齢（失礼）の女性が長距離で、しかも混雑する白峰三山を逆走するなど、全く私の想定外のことであった。

農鳥岳までは皆さんに遅れずに付いて行けたが、急峻な大門沢の下りで、昔スキーで傷めた左膝が痛みだし最終グループで大門沢小屋に到着したことは今後の課題となった。

大門沢小屋の待遇も前日と大差無かったが、500円で4分間のコインシャワーには驚かされたが、これまでの疲れが吹き飛ぶほど心地よかった。

18日4時20分起床、出発前テーピングをして貰った御陰で痛みも無く、快調に下山でき感謝している。10時前奈良田温泉に到着し、汗を流してバスに乗り込み帰途についた。

この年の主な山行は、この縦走に続いて、8月の剣岳（長次郎雪渓コース）・10月の大山（夏道コース）、11月の大山（積雪期槍尾根コース）、12月の大山（積雪期夏道コース）と積雪期の烏帽子山（庄原市）・年末からの奥穂高岳等に挑戦して、山の現状を垣間見たが、少々硬化した私の頭では、多くの問題を抱えている今の山の状況を理解し、これを受け入れるためには今暫くの日時を要しそうである。

登山者や観光客を受け入れるための大規模な林道やロープウェイ・山小屋・登山道・階段・木道の構築、鎖や鉄梯子の設置等も自然を傷つける要因となっているのではないだろうか。更に大きな問題は、登山人口の増加による山の破壊である。中高年者の登山用具としてストックが普及し、それによる山道の掘り返しと植物へのダメージ。心ない一部登山者の登山道脇の樹木・草地への立ち入り。急斜面にジグザグにつけられた道で、上の道へショートカットするため草付きの斜面を直登。段差の高すぎる階段ではそれを避けて外側の植物が生えているところを歩く等々、我々は自然を楽しみながら、一方で自然を破壊しているのである。

その顕著な表れが大山である。40年前の大山は縦走路も槍尾根もスリルはあったが、そんなに危険なところではなかったのである。先日久しぶりに夏道コースを登った私はその変貌ぶりに驚愕してしまった。登山道は階段と木道で防御され、弥山には板張りの遊歩道が一周しており、山頂の土も踏めない状態である。私の目には異様な光景としか映らなかった。これでは山登りではなく、階段登りではないかと暗澹たる気持ちになってしまった。大山をこんな姿にしたのは誰あろう我々なのだ、押し寄せる登山者に踏み荒らされて、頂上を覆っていた植物は消失したのである。下りは行者コースを降りたが、ここも殆どが階段と木道で固められていた。元谷に降りた私は更に仰天してしまった。北壁の象徴だった大屏風岩・小屏風岩は崩れ落ち、大堰堤も埋まる程岩石が堆積していた。勿論これは自然現象であろうが、たった半世紀足らずの間に大山は豹変し、断末魔の悲鳴をあげているように思われた。全国の山の中でもこれほど早く姿を変えている山は無いのでないかと、その行く末が案じられてならなかった。

追記、この拙稿については昔日の私の知識不足、その後の記憶喪失や記憶違いにより記述に誤りがあるかもしれないが、認知症の一歩手前にいる愚者の駄文と、ご笑読頂ければ望外の喜びである。

憧れの穂高連峰は白いガスに包まれて

2005年7月21日〜26日



湯越　道江

数年前、聳え立つ岩稜に囲まれた涸沢カールから見上げたザイテングラードに続く快晴の奥穂高に出会った時、包み込まれるような抱擁感となだらかなカールの開放感を全身に感じ心が震えたこと今でも鮮明に覚えていて、その時の渇望にも似た“いつかあの穂高に…”の思いが片時も心から離れなかった。

その憧れであった穂高縦走に8月21日から25日まで、女性五人で参加した。

移動日の上高地での宿泊の夜、ガイドからのアドバイスでザックの容量を減らすことの重要性を説かれ、必要最小限にするため2キロは減らしたと思う。

今回私達は上高地から涸沢を経て北穂、涸沢岳奥穂から吊尾根を通り、前穂と回り重太郎新道を通って岳沢を下る4泊5日のルートを選んだ。

さていよいよ初日、今にも降りだしそうな天気にもめげず、早朝に出発。お天気とは裏腹に心は浮き立って期待感で一杯!

徳沢、横尾を経て難なく涸沢小屋到着時には辺りにガスが流れ、小雨もパラパラ、一抹の不安を感じつつ、それでもサラシナショウマやアザミ・シモツケ・オトギリ・アキノキリンソウに心を弾ませながら今夜の宿涸沢小屋に続く整備された階段をゆっくりと登っていった。

晴れていたなら臨場感溢れるカール全体を目にすることが出来ただろうにと恨めしく思いながら…

翌2日目風は無く雨が降ったりやんだり、友の1人がギブアップ寸前になり彼女の荷物を私も分担して持つことに…　何はともあれ早朝に涸沢小屋出発。北穂高を目指して雲海の中、登山道をひたすら登り続ける私達17名。

出発前ガイドから「17名は全員家族と思い協力し合って登頂を果たし無事下山しましょう」との温かいお言葉を頂いていた。

皆「ウン、ウン」と納得。

しかし、晴れていれば槍ヶ岳の展望が素晴らしいであろうと思われる登山道でも、辺りは白いガス一色　“良いのよ　雨が降らないだけましだわ”と自分に言い聞かせながら一歩一歩足を進める。

ふと、足元に目をやると岩陰にかすかに露を含んだピンクのツガザクラが健気に咲いているのを目にするとホッと心が和み、「さあ　もう一息」という気になるから不思議。

単調な登りを続けて北穂高到着。頂上は思いのほか結構広い。

休憩時間に北穂高小屋のコーヒーを頂く。

本格的なコーヒーで、とても美味しくて感動ものだったが　熱いし急がなくてはいけないし、のんびり屋の私は大変!　ここのテラスも視界ゼロ。

「良いのよ、いいのよ」

やけになっている私でした。

この時集合場所で事件が発生していようとは考えてもいなくて。

それは一組のご夫婦、ガイドにここから下山するよう説得されていたらしく慌ただしく下山していった。

狐につままれたような話だが、要は団体行動に反する態度を取るので責任が持てないと言うことらしかった。

それ程過酷ということかと思いつつ、涸沢岳登頂、いよいよ穂高岳山荘めざして注意深く進むが、雨混じりという事もあり2度ほど滑る度に後ろの方

が遠慮がちにささえて下さり申し訳なさで一杯!
何とかあの涸沢から見上げて憧れ続けた赤い屋根の穂高岳山荘に到着「バンザーイ!」
しかし、テラスから見上げる奥穂高に続く垂直の登りとハシゴ、明日の行程の厳しさを思い知る。

日も傾く頃テラスからの雲海に沈む夕日の美しさは筆舌に尽くしがたい。
紫のグラデーションは刻々とその色を変えていく。
ただただ立ち尽くして寒さも忘れて見とれていた私でした。
半年たった今でもあの夕日がスライドショーの様に頭の中を鮮やかに駆け巡る。

いよいよ最終日クライマックスの日がやって来た。
闘志だけは満々、体はヨレヨレ。
早朝ゆえ体がこわばって垂直のハシゴに取り付くのが困難だったこと。相変わらずの曇天。
奥穂高に到着しても絶景が見られるわけでもなく「ここが頂上なんだ!」と思うだけ。
少し休憩の後、前穂高目指して細心の注意を払いながら進むと、手を伸ばせば届きそうな岩の上に雷鳥の親子連れらしい2羽が羽を休めていた。
メンバーの張りつめていた緊張感が一瞬解ける瞬間、夏毛をまとい赤い瞼の雷鳥君有難う。
いよいよ吊尾根と呼ばれる稜線にさしかかる。
ガイドの「慎重に、気を緩めるな!」の叱咤激励に細心の注意を払うが、足元一面のガスで視界が利かず恐怖感がない。

今考えるとこの稜線はナイフリッジと言うわけではないが、左手はスッパリと切れた断崖を見ながらの岩場、足場はしっかりしているがもし快晴だったらと思うと冷や汗が…吊り尾根をやり過ごすとガイドの顔にも笑顔が見られ、私達も「ホッ!」
前穂の下の紀美子平から岳沢ヒュッテで林檎をガブリ、一息入れてから鎖ハシゴの連続の重太郎新道をひたすら下る。

お天気に恵まれさえすれば、西穂高から続く美しい尾根がパラパラ漫画のように展開しただろうに…
岳沢を下りながらふと後ろを振り返ると、紫のトリカブトの群れ咲くむこうにミルク色の霧に包まれた穂高が静かに佇んでいて、「又、いらっしゃいね」と囁かれた気がした。
もう一度、快晴の穂高に会いに行こう!
人の心は何時も振動していたい。
心が揺れるほどの感動が欲しいし心を響かせたい。
例えるなら、人の心は太鼓であって常に鳴り続けていたい。
その為には太鼓を鳴らすエネルギー、つまり刺激が必要であり、故に人は刺激を欲し続ける。
私も心の太鼓を鳴らし続けるため、これからどう自分にエネルギーを蓄えるか試行錯誤の日々を続けるのが課題だと思わせてくれた穂高への旅でした。


えがお

白峰三山縦走登山
2005年7月15日〜18日


久保　敏

7月15日（金）
明日から7月18日（月）まで南アルプス白峰三山縦走だ!!
こんな大きい山のリーダーをするのは初めてなので緊張と不安でいっぱいだ。
福山駅北口20時0分出発　人員19名
バスの中でリーダーとして自己紹介をし、事故のないよう安全登山をお願いした。そしてメンバー全員にも自己紹介をしてもらった。最後に福原会長から地形の説明、血中酸素濃度測定装置の話があった。

7月16日（土）曇り一時雨
朝5時0分芦安市営駐車場着
ジャンボタクシー2台に乗換え出発
6時10分大樺沢出合いバス着
登山届けを出し、トイレをすまし準備体操をし、歩き方の説明をして出発。
一班　9名
CL　久保　敏　　SL　山本 逸男
二班　10名
CL　福原 不二雄　　SL　橋本 博明

一班が先行した。
今日の行程は広河原から大樺沢コースを経て北岳肩ノ小屋までの高度差約1500mの急登だ。
途中、大樺沢二俣で後方に鳳凰三山が見え左前方には北岳バットレスが望めアルペンムードいっぱいだ。いよいよこれから急登にさしかかる。ゆっくり歩きをし、休憩をしながら登っていった。前日車中で眠れない人もいて、ばてたり足がつってきた人が出てきた。途中二班と合流して広場で血中酸素濃度測定器でばてた人の測定をした。
SLの山本さんがその人のザックを背負子で持ってくれた。スイカを持参したのでみなさんに食べてもらった。よく冷えて、甘かったので美味しかった。
途中、お花畑を見ながら、ばてた人がいたので白根御池の分岐で早い昼食をとった。二班は先に行った。小太郎尾根に上がると、富士山、甲斐駒ヶ岳、仙丈ケ岳のすばらしい山容が姿を現した。
肩ノ小屋に至る最後の急登で雨が降りだしたので雨具をきて急いで歩いた。
北肩ノ小屋14時着　約7時間の行程だ。山小屋は大変混んでいたので藤井さんが代表で受付をした。　部屋に入り、夕食までの時間、ザックの片付け服の着替え、雑談をしたり和気あいあいの時間をすごした。
夕食はご馳走で美味しかった。

7月17日（日）曇り、風強し
今日は、山行のメインの白峰三山縦走。かなり長時間歩くので事故のないように話し、大門沢下降点から大門沢小屋まで急な下りで悪路なので特に気をつけるよう話した。

北岳肩ノ小屋　4時30分出発
北岳山頂（日本第2位の高峰）
5時20分着、山頂からの360度のパノラマはすばらしい。最高の気分だ。北岳山荘で朝食をとる。ここのトイレはバイオ式でとてもきれいだった。昨日あまり眠っていなかったので少し頭が痛い。中白根から返り見る北岳の雄姿はすばらしい。また、富士山も昨日より大きく見えた。
間ノ岳　9時35分着（日本第4位）平坦で広々とした山頂だ。農鳥小屋で昼食をとる。ここのコーヒーはとてもおいしかった。ここから見る農鳥岳の

尾根はすごく急登に見えた。
一班が先行する。今が一番疲れのピーク時なのでゆっくり歩きをした。
農鳥岳山頂　13時30分着　山頂には大町桂月の歌碑が置かれている。荒川三山、塩見岳や南アルプスの山々がパノラマで眺められた。農鳥岳から大門沢下降点の途中で福原会長から私と藤井氏2人で、宿の手続きをするよう指示され先行した。
ここからは急な下りで木の根や石などすべりやすい悪路が続き大変だった。2時間30分で大門沢小屋に着いた。16時50分着。宿の手続きをしてみなさんが下りてくるのを待った。悪路と急な下りが続くので、事故がないか大変不安な気持ちになった。17時50分最後の組の人が到着され、顔を見て安心した。13時間の長い行程を皆さんよく頑張り、とてもうれしかった。

7月18日（月）晴れ
今日は最後の日だ。とても朝から天気がよい。
6時10分発　私を含め6人が先行して山小屋を出発。　沢沿いや樹林帯を抜け、吊り橋を渡り、農鳥岳の登山口の奈良田発電所8時40着
舗装をした道を10分ぐらい歩いた橋の向こうの駐車場にバスが待機していた。
後組がまだなので相談したうえ、江種さんに待ってもらい、私を含め5人が先に奈良田温泉に行った。
　後からみんなが来て汗を流しさっぱりしてビール、飲料水を飲みゆっくりした。11時46分奈良田温泉を出発。途中、コンビニ、サービスエリアに寄りながら帰路に着いた。車中で皆に今回の山行の感想を述べてもらった。福原会長から今回の山行の注意点や山の話をされて勉強になった。今回の山行はとても厳しい行程でしたが大きな事故もなくみなさんよくがんばられました。リーダーをひきうけて不安でいっぱいでしたが皆様方の御協力を感謝し少し自信がつきました。

感想
初日、大樺沢二股でばてた人、足がつった人が出てきて適切な処置を福原会長が指示をされた。
山本さんには背負子でザックを2人分かついでもらいありがとうございました。
また一班（L久保　SL山本）9名　二班（L福原　SL橋本）10名に分けたのは良かった。
二班は事前の神島訓練山行に参加されたメンバーで健脚組、一班は未知のメンバーでどれくらい歩けるか分からないので不安、常に一班が先行して歩いた。特にゆっくり歩きをし休憩をとりながら歩いた。
二班は大門沢下降点から大門沢小屋まで福原会長にまかせ到着を待った。　橋本さんが背負子に2人分のザックをのせて帰ってきた。ご苦労さんでした。特に福原会長にはバテた人、足のテーピングのやり方や人の配慮をテキパキとされ非常に助かりました。また会計の藤井さん、写真の江種さん、SLの山本さん、橋本さん、記録の石井さんご協力ありがとうございました。リーダーとして至らぬ点も多かったのですが福原会長はじめみなさま方の協力を得て大きな事故もなく無事終えたことを感謝しています。

反省点
今回のリーダーとして至らぬ点が多かったし、テキパキと行動が出来なかったことは痛切に感じました。福原会長が人員の配慮やトラブルに対していかに速やかに適切な対応されたことは非常に勉強になりました。
また、出発前に体力づくり、イメージトレーニングなどをするように指導しましたが、神島訓練山行に参加された方はよく歩かれましたが不参加の方にトラブルがありました。こんな大きな山は体力づくり、イメージトレーニングが大切な事を感じました。
山の経験を重ね、がんばりたいと思います。

六甲全山縦走を終えて



石井　裕子

　日常のトレーニングも、目標とする山行がないとすぐに怠けてしまいます。
毎日、ずっと地道にトレーニングを継続している人には感心し、尊敬します。
私はいつも言い訳を作ってやめてしまいます。なんといっても3日も経つとその目標を立てたことさえ忘れていることから、思い立ったら吉日という言葉は私の為にあるのかと思う位です。
山行が近づくと急にせっせと蔵王山参りに勢をだしますが、それが効かないこともあります。

　今年の夏がそうでした。
夏も終わりになる頃、そんなに高くない山に登ることになりました。しんどくて、なんとかたどり着きましたが日頃のトレーニングの必要性を改めて肝に銘じました。私は目標がないとなかなかトレーニングをしないので、長期間にわたりトレーニングをしなければ行かれないような大きな山を探していたところ、11月の六甲全山縦走の企画が目に付きました。
なんと総行程が56kmもあるそうです。これなら「明日から出かけます。」とは簡単にはいきません。必ず前もって準備をする必要がありそうです。
怠け者の私には打って付けだと思い、早速以前から参加されている人に声を掛けました。その人のお陰で資料を頂くことが出来たし、インターネットから体験談や色々な情報も仕入れました。資料を見ると、須磨公園を出発して、旗振山・鉄拐山・栂尾山・横尾山・東山・高取山・菊水山・鍋蓋山・須磨山・水無山・大平山・岩原山を経て、やっとゴールの宝塚に着くように設定がされていました。
その行程を見てなんだか自信がなくなりました。

　六甲に参加すると言ってみたものの、56km長距離の行程がある山に登ったり歩いた経験がありません。
それからは、今までに経験したことのないその長い距離を完全に縦走出来るように目標を掲げて蔵王山参りを始めました。
蔵王山を行き来していると、以前大会に参加したと聞いたことのあるN氏に会いました。「六甲全山縦走に参加する予定だが不安なので、どこか長いコースに御一緒して下さいませんか。」とお願いしたところ快く引き受けてくださり、比婆山を訓練の場所として選ばれ、六甲に参加する人のために全山縦走を計画して下さいました。
六原を出発して牛曳山、毛無山、烏帽子山、吾妻山、竜王山まで本当に全山です。
この行程には驚き、まあ私はついていけなくなって何処かで、はしょるだろうし、行ける人だけを連れて行かれるんだろうと甘く考えていましたが、手抜きがありませんでした。雨の中、皆そろって全山縦走を経験しました。この後から本格的にどうしたら達成できるか考えるようになりました。

　当日は朝3時に起き5時25分、いざ出発です。
2000人が参加する大会なので人が列になり、もう少し速く歩きたいと逸る心を抑え階段をゆっくり登ります。
このゆっくりが体を温めるのに丁度よいのかもしれません。
その間に体も慣れてきて、調子が出てきました。
出発の頃は暗かった山道も次第に明るくなり、須磨アルプスでは馬の背の向こうで手を振ってくれている仲間が見えました。その姿は日の出の光で輝いて見え、私も大きく手を振り返しました。

「お互いに頑張ろうね。」そう励まされているようで、気合を入れなおして菊水山に臨みました。
菊水山から天王吊り橋に向かい、鍋蓋山に登り返す。鍋蓋山の次は摩耶山だ。摩耶山には有名な天狗道があり急な登りがあります。
ここが難所と登りを一歩ずつ進めます。ついしんどいな、とぼやきたくなるが時計を見て急に元気になりました。
意外にも須磨山のチェック開始時間前に入れるかも知れなのだ。あと30分もあるが山頂までもう少しのような気がします。
予想外に速いペースなので気合が入りました。
12時前に到着する可能性があるなら挑戦してみたくなりました。
なんと11時58分着。自分で驚きました。
まさか2分とはいえチェック時間開始前に入ると思っていなかったからです。

印を押してもらうまで先に到着した人達の列に並んで待ち、有名なホットレモンを頂きました。
これが噂のホットレモンかと、なんと二杯半飲みました。
その上、ペットボトルに入れてもらっている人の真似をして私もなみなみと入れてもらったが、これが失敗で、少し残った水の上にホットレモンを入れていただいたので水がなくなったのです。14分休憩してから、出発をしましたがアゴニーの坂を下ったあたりで急にむかむかしてへたってしまいました。
美味しいといっておかわりをし、がぶがぶホットレモンを飲んで、飲むのは水の上に継ぎ足したホットレモンだけと、欲ばりが祟ったのでしょう。
少し腰をおろし皆が通り過ぎるのを見ながらミカンを食べ回復を待ちました。これからは長い舗装道路が東の分岐まで続きます。東の分岐から山道に入りました。
意外に悪路です。
1時間過ぎた頃ハイキングの3人に会い、「ゴールまでもう少しかしら。」と尋ねたら、「まあ、まだまだ2時間はあるよ、これでも食べ。」と餡子入りのお餅を頂きました。本当に美味しく、見ず知らずの私にも優しい人の、心に沁みる甘さをかみ締めました。

ここまで何人の心ある人々に私は出会ったのかな。
参加すると決めて、一緒に神戸に来ることになったり、参加申し込みをしてくださった友、靴や歩き方のアドバイスをしてくださった友人がいる。プレ全山縦走をしてくださったN氏御夫婦。それに何と言っても神戸の多数のボランティアの方々。56kmの道のあちらこちらに立って案内をしていただいたり、ホットレモンや甘酒のサービス、と感謝の気持ちでいっぱいでした。山道から舗装道路に出てしばらくして宝塚の町並みが見えてきました。

時計を見ると意外にも、最後のゴールのチェック開始時間に間に合うかもしれない時刻だった。それなら速く行こうとスピードを上げた。頑張れるだけ頑張ろうと決めた。ここからは随分人を抜いて追い越した。塩尾寺が見え、宝塚のゴールの階段をあがる。カードを出して時刻を記入、16時44分到着だ。チェック開始時間をわずか14分オーバーの予想しない時間で到着するとは思いがけなかった。そして、ひとつのことをやり終えた満足感で胸がいっぱいになった。

しかし、何と言ってもこの大会を支えていただいたボランティアの方々に感謝します。ありがとうございました。


外堀のある城壁

NHKハイビジョン番組
国立公園　二泊三日トレッキングの旅
「瀬戸内海国立公園編」に出演して


福原 不二雄

この番組は国立公園の美しさを伝える番組として平成16年8月に九重・大雪山・中部山岳・十和田八幡平など4箇所の国立公園が放映、紹介されました。視聴者からも好評で以後5回も再放送されました。今回その続編として新たに瀬戸内海・陸中海岸・吉野熊野・雲仙天草の各国立公園が追加制作されたものです。
将来的には全国立公園、28箇所の映像をシリーズ物として制作される見込みのようです。

平成18年3月24日、広島県山岳連盟より番組制作への協力要請がありました。
日数もなく、条件も厳しいのでお断りするつもりでしたがディレクターの美声（?）につられ、美しい瀬戸内海の多島美とふるさとの山々を全国の皆様に紹介できるのならと実力も顧みずお引き受けした次第です。
先方の希望は、「自然派の視聴者を対象にした番組なので、名所旧跡の観光案内はしない、通常の観光道路は通行しないで、地元の人しか知らないような自然の残る道を歩き紹介してほしい。撮影は5月の連休前に完了したい。」
何をメインテーマとするか、当初は「多島美」と「夕日の美しさ」でした。
因島公園、サンセットビーチ、鷲ヶ頭山どれもすばらしい夕日の展望台ですが、3箇所は多すぎる、夕日の美しいところは日本各地に数多くあり、ここ瀬戸内海の特色にならない。実際、現地を歩いた感想は「多島美の展望」の素晴らしさは言うまでも無いが、島から島へ海を歩いて渡る快感、地元の人とのふれあい、その土地の風土、歴史を体感する楽しさ、地図を読みながら目的地に到達する喜びは、まさにトレッキングの原点、醍醐味であり、里山を歩く楽しさの再発見でした。
テーマは決まりました。
「圧倒的な素晴らしい瀬戸の風景・多島美の景観」
「歩きの旅だから味わえる地元の人とのふれあう里山トレッキングの楽しさ」
これを全国の皆様に伝えたい。

今回のルートは1日目、向島から始まり高見山・因島公園まで。
2日目、白滝山から生口島・サンセットビーチまで。
3日目、多々羅大橋を渡り立石展望台・入日の滝・安神山・鷲ヶ頭山までの、3日間で約70キロを歩く行程です。

ルート調査については地元に精通した会員の久保兄弟、妹尾英明氏、越智修三氏、記録は石井裕子さんと、地図作成は大野一夫氏に何度も手直しをしてもらい約20時間あまりをかけて完成しました。
皆さん本当にありがとうございました。

4月1日から2日の下見調査。ディレクターの中村さんはうら若い女性、重い資料の入った荷物を背負い歩かれました。
特に2日目は土砂降りの雷雨という悪天候にも拘らずやりぬきました。大した根性です。
男女同等、実力本位のきびしい業界を知り、必ず彼女の労に報いるとの気持ちを強くしました。

4月24日の撮影開始まで8回現地に入り入念に調査をしました。
彼女も私の指示した靴、ザック、雨具、衣類も揃えて万全の体制とのこと。

いよいよ撮影開始。最初は向島の「兼吉の丘」です。
地元の会員の推薦だけにわくわくする魅力あるところでした。出足快調、しかし撮影は大変でした。
NHKの番組には台本があります。全てはそれによりなされます。
口下手、早口の私です。おまけに目の前にはカメラのレンズ、なかなか悪戦苦闘。
この時季、今年一番の黄砂に見舞われました。
絶景の高見山は真っ白で何も見えません。
夕日、夜景を撮影する予定の因島公園も同様で全くダメ。
翌日は雨との予報もだされていました。
でも天は我々を見捨てませんでした。
天気も持ちなおし、黄砂も収まり、素晴らしい瀬戸内海の多島美をとることが出来ました。
彼女も私の話し下手を理解してくれ「台本は見なくて良い、自分の感じたことをそのまま表現してくれれば良い」といってくれたお陰でずいぶん気が楽になりました。
撮影中にはいろいろなことがありました。

白滝山の360度の展望の素晴らしさ、
居ながらにして360度の遠近両方の展望が楽しめるところはまずあるまい。
剣岳、槍ヶ岳もはるか遠方まで眺められるが近景に変化が無い。
白滝山はこの山の高さが絶妙である。
この高さで遠くは70キロを隔てる四国の山々、中国山地の峯峰まで見ることが出来る。
近くの足下に展開する景色が素晴らしい。民家、果樹園、ビニールハウス、造船所、港湾、高速道路を走る車、人が動く様が手に取るように分かる。
鉄工所の音、船の汽笛、高速道路を走る車の音、いろいろな生活音も届く。
箱庭のようなかわいい小さな島々、その島の砂浜で遊んでみたい誘惑に駆られる。青い海にはいろいろな舟が行きかう、漁船、大型貨物船、旅客船、大きな筏を引っ張るタグボート、次から次へと変化する様は見ていて飽きることが無い。
更にこの山頂には五百羅漢と呼ばれる民衆が彫った石仏群がある。
素人の様式にとらわれないさまざまな表情が面白い。
なかには歯をむき出して笑っているものや悲しそうに首を傾けているもの、あなたにそっくりな石仏もきっとありますよ。
この山頂は心を安らかにしてくれる不思議な空間に満ち溢れています。

多々羅大橋の機能美はまことに世界一の美しさでした。
この橋は「やじろべー」のように微妙なバランスより成り立っています。
白鳥が羽を広げた姿にも例えられます。
私には人間に例えるなら、鍛えられて少しの無駄もたるみも無い肉体美の美しさを感じます。
海岸から、横から、下から、山の上から、四方八方、何処から見ても美しい。
橋脚の塔頂226mからの展望とはどのような風景でしょうか。楽しみです。



更に歩きの旅だから体験できる出来事、出会いもありました。
険しい峠道が昔は通勤路であったこと。
天城越えのような峠の忘れられたトンネル。
多々羅大橋の鳴き龍現象。
特に瀬戸田のミカン畑の農夫とは忘れえぬ出会いとなりました。
この人には感激しました。
彼女とも激論を交わしました。
「ミカンの樹木に黄色い実が無いので良い映像にならない。実も散らばっていないので何の木か分からない」
「この時季、ミカンが残っているのは人手が足りないためだ。このように愛情を持ち育てている畑に実が無く、散乱していないのは当然である。盆栽のように枝振りを整え、満遍なく太陽が当たるように針金で枝を引っ張り、切口は銀紙で養生する。さらに果実は3重の袋がけ、これほどの愛情を注いだミカンがほかにあるか。
こうして作られたミカンが美味しくないわけが無い」
私も興奮し早口でしゃべりました。
おじさんがくれたミカン、其の名も「かがやき」、あまくて、水分たっぷり、おもわず「うめいー」と叫びました。
スタッフも同様の感想でした。

サンセット・ビーチの落日のこと。
先にビーチに入った彼女が海岸の砂浜のあまりの汚さに驚き、私が見たら幻滅して感想も何もないと考え、手前で私を待機させスタッフ全員がごみ拾いをし、きれいにしてから私が登場しました。
やっとたどり着いた感激、みんなの心遣いとまさに沈まんとする夕日を見たとき、私が永年恋焦がれ何百回と暗唱し夢にまで見た、45年前、高校教科書に載っていた徳富蘆花の名詩「相模灘の落日」の風景そのものが展開されていた。
何たる天の配剤か、この幸運を感謝するとともに、熱い思いがこみ上げ思わず其の詩の一節を口ずさんだ。

「斯(か)かる凪(なぎ)の夕に、落日を見るの身は、恰(あたか)も大聖の臨終に侍するの感あり。
荘厳の極、平和の至、凡夫も霊光に包まれて、肉融け、霊独り端然として、永遠(いたるにてー)の濱(ひん)に　たたずむを覚(おぼ)ふ。物あり。悠然として心に浸む。喜(よろこび)と云はは過ぎ、哀(かなしみ)と云はむは未だ及ばず」

最後の締めは鷲ヶ頭山。
中村さんはこの作品に明確な意図とビジョンをもち、カメラアングルを指示、映像をモニターテレビで確認、必要な映像はしつこく要求していました。
だから、私も岩峰を登ったり下りたり、先行したり後戻りしたり、彼女の納得のいく素晴らしい映像を得るためよく動きました。
中村さんにはいつも「徹底してとことんやろう、いかなる無理難題も必ずやりぬく、最高の映像を撮ってください」と言っていました。
私も後悔しないよう全力を出し切りました。
逞しいスタッフとチームワークに加え、天気にも恵まれ、素晴らしい多島美の展望で最後の映像を締めくくることが出来ました。
普段、無口な私にしてはよくしゃべりました。
山火事のこと。登山道がコンクリートの理由、山の呼吸法、最後は里山の魅力について。
4月24日から29日まで6日間、600分あまり撮影しても実際に映像に載るのは22分。
どのようなものになるのか見当もつきません。
しかし、美しい風景が私の口下手を補ってくれることでしょう。
分れ際に彼女が言った。
「あなたがいなければこのような作品は出来なかった」

平成19年4月17日　NHK BS2で放送されました。



坂道

4000回記念行事
C.W.ニコル氏講演会に御協賛いただいた方（順不同）

共　　催／(財)福山市体育振興事業団

後　　援／福山市教育委員会　(財)福山市体育協会　広島県山岳連盟　中国新聞備後本社
NHK福山支局　中国放送　広島テレビ　広島ホームテレビ　テレビ新広島

協賛企業／天野実業㈱　岩崎整形外科　大田記念病院　カットハウス・ナカシマ　カラオケ・コスモ
カラオケルーム・百合香　グリーンラインを愛する会　㈱ケンユー　ごみ5R推進本舗
城北燃料㈲　立花康弘商店　ビジネス情報　福山葦陽ライオンズクラブ　福山電気㈱
㈲平成美装　みのり鍼灸接骨院　宮崎胃腸科放射線科内科医院　モン・レーブ　㈲安原商店
福山オートサービス㈱

会員事業所／赤帽富士宅送　木村歯科医院　佐藤鉄工㈱　本田ポンプ製作所　山和㈱
ワタタニサービス　ミヨシ設計

会員・家族／粟村繁允　池上和美　石井裕子　市来洋子　井上昌江
妹尾英明　岩原節子　岩室　彬　岩室節子　岩室政俊
上原寿美子　江種幸男　大野一夫　奥平時冶　小野美佐子
河崎忠昭　川西成美　川本幸江　川脇喜美代　北村道子
木村三郎　木村テル子　木村富枝　久保　敏　久保　充
栗原裕子　桑田睦江　小土井薫計　小葉竹　壽　小林加代子
小林浩二　小林征三　斎藤楠輔　坂本昭雄　坂本悦子
佐藤勝美　佐藤茂利雄　佐藤律夫　鈴木康仁　鈴木万知子
世良　元　瀬良悦男　高橋進次　高松仁道　田口和男
田中安雄　谷坂治行　中山明子　中山満治　楢原恵子
野田愛子　萩原有朋　橋本尚子　橋本博明　原田千枝子
原田由紀恵　平松　携　平本　優　福原不二雄　藤井和之
藤井道雄　藤谷一成　藤谷操枝　松井　登　松岡洋子
溝部幸恵　三藤敬子　南　妙子　三好利弘　森山益収
森山睦子　門田敏昭　山足幸子　山内充人　山田の案山子
山本逸男　山本マチ子　湯越道江　由田征史　渡辺節子

一般個人／楫野久美子　松井誠司　村上由紀子　山下洋子

商品提供／㈱ケンユー　㈱宏栄産業　㈱好日山荘　㈱虎屋本舗
天野実業㈱　明神館脳神経外科　アシーズブリッジ
江種美代子　佐藤茂利雄　高橋康一　野島玲子
野田愛子　福原不二雄

第六章　年表・記録



棚田の春

福山山岳会会名の変遷

福山体育会登山部　　1919(大8)年2月23日(発祥登山)
福山体育会山岳部　　(不詳　但し1920年代頃)
福 山 山 岳 会　　1957(昭32)年4月20日

福山山岳会歴代部長及び最近の役員

初 代 部 長　　中木 正雄　　1920(大 9)年 6月～1932(昭 7)年 5月
山岳部長事務管理　藤井 与一右衛門　　1932(昭 7)年 6月～1943(昭18)年 3月
二 代 部 長　　市川 恒治郎　　1943(昭18)年 4月～1944(昭19)年 5月
三 代 部 長　　佐分利 顕蔵　　1944(昭19)年 6月～1945(昭20)年 8月
1945(昭20)年9月より1950(昭25)年11月まで旧部員が交互に幹事役となる。
四 代 部 長　　浜 新三郎　　1950(昭25)年12月～1953(昭28)年 3月
五 代 部 長　　中村 喜助　　1953(昭28)年 4月～1955(昭30)年 3月
六 代 部 長　　竹井 修一郎　　1955(昭30)年 4月～1957(昭32)年 3月
七 代 部 長　　大村 徳一　　1957(昭32)年 3月～1957(昭32)年 4月
福山山岳会と改称
初 代 会 長　　大村 徳一　　1957(昭32)年 4月～1963(昭38)年 3月
二 代 会 長　　山田 宗吉　　1963(昭38)年 4月～1971(昭46)年 3月
三 代 会 長　　三好 壽雄　　1971(昭46)年 4月～1975(昭50)年 3月
四 代 会 長　　立花 鶴雄　　1975(昭50)年 4月～1979(昭54)年 3月
五 代 会 長　　鈴木 康仁　　1979(昭54)年 4月～1985(昭60)年 3月
六 代 会 長　　高橋 久夫　　1985(昭60)年 4月～1991(平 3)年 3月
七 代 会 長　　小土井 薫計　　1991(平 3)年 4月～1997(平 9)年 3月
八 代 会 長　　萩原 有朋　　1997(平 9)年 4月～2001(平13)年 3月

1997(平9)年4月役員改選
副　会　長　　天野 暢夫　福原 不二雄
常 任 理 事　　越智 君子　金山 正　河崎 忠昭　木村 富枝　熊野 正
　　黒飛 晴光　坂本 豊　藤井 繁　三藤 敏照
事　務　局　　天野 暢夫

1999(平11)年4月役員改選　　(以下50音順)
副　会　長　　河崎 忠昭　福原 不二雄
常 任 理 事　　天野 暢夫　上原 寿美子　越智 君子　金山 正　木村 富枝
　　熊野 正　黒飛 晴光　坂本 豊　世良 元　藤井 繁
事　務　局　　天野 暢夫
2000(平12)年役員補充　常任理事　江種 幸男

九 代 会 長　　坂本　豊　　2001(平13)年4月～2005(平17)年3月
2001(平13)年4月役員改選
副　会　長　　上原 寿美子　福原 不二雄
常 任 理 事　　江種 幸男　河崎 忠昭　世良 元　藤井 キヨ子　村上 侃　村上 博満
事　務　局　　福原 不二雄

2002(平14)年4月役員改選
副　会　長　　上原 寿美子　河崎 忠昭
常 任 理 事　　赤松 勇二　江種 幸男　斎藤 楠輔　世良 元
　　藤田 昔三　星田 純　村上 侃　村上 博満
事　務　局　　江種 幸男

2003(平15)年4月役員改選
副　会　長　　河崎 忠昭
常 任 理 事　　赤松 勇二　江種 幸男　小林 征三　斎藤 楠輔　世良 元
　　藤田 昔三　星田 純　三藤 敬子　南 妙子
事　務　局　　江種 幸男

十 代 会 長　　福原 不二雄　　2005(平17)年4月～

2005(平17)年4月役員改選
副　会　長　　赤松 勇二
常 任 理 事　　江種 幸男　小林 征三　世良 元　平松 携　藤田 昔三　三藤 敬子　綿谷 弘志
事　務　局　　江種 幸男
2006(平18)年4月役員補充
常 任 理 事　　石井 裕子　黒飛 晴光　原田 千枝子

2007(平19)年4月役員改選
副　会　長　　小林 征三　山内 充人
常 任 理 事　　上原 寿美子　江種 幸男　大田 祐介　川西 成美　黒飛 晴光　世良 元
　　原田 千枝子　平松 携　藤谷 操枝　村上 眞理　綿谷 弘志
事　務　局　　江種 幸男

部報・はいまつ(会誌)発行状況

下記各号は、福山山岳会事務局に保存されている。

名　称	発行年月日	備　考	名　称	発行年月日	備　考
福山体育会山岳部 部報第1号	1952.5.18 (昭27)	800回記念 特輯号	福山山岳会 はいまつ第8号	1976.3.14 (昭51)	2000回登山 記念号
福山山岳会 臨時会報	1957.11.20 (昭32)	アルプス号	福山山岳会 はいまつ 第9号	1980.4.01 (昭55)	草創60周年 記念号
福山山岳会 はいまつ 第1号	1959.2.20 (昭34)		福山山岳会 はいまつ 第10号	1988.07.30 (昭63)	草創70周年 記念号
福山山岳会 はいまつ 第2号	1960.3.15 (昭35)		福山山岳会 はいまつ 第11号	1991.12.20 (平3)	
福山山岳会 はいまつ 第3号	1961.2.26 (昭36)		福山山岳会 はいまつ 別冊	1993.5.23 (平5)	3000回登山 記念号
福山山岳会 はいまつ 第4号	1962.2.23 (昭37)		福山山岳会 煌きの氷壁	1994.1 (平6)	大山遭難事故 追悼集
福山山岳会 はいまつ 第5号	1963.3.31 (昭38)	大山特集号	福山山岳会 コースガイド80	1999.7.31 (平11)	草創80周年 記念号
福山山岳会 はいまつ 第6号	1966.4.24 (昭41)	1500回登山 記念号	福山山岳会 はいまつ 第12号	2007.12.25 (平19)	例会山行4000回 達成記念号
福山山岳会 はいまつ 第7号	1974.11.10 (昭49)				

福山山岳会　会員受賞一覧

文部大臣表彰

1933(昭 8)年　民衆体育功労賞　藤井与一右衛門
1977(昭52)年　社会体育優良団体賞　福山山岳会

広島県知事表彰

1977(昭52)年　体力つくり優良団体賞　福山山岳会

中国体育文化賞　(中国新聞社)

1959(昭34)年　藤井与一右衛門

登山功労賞　(日本山岳協会)

1972(昭47)年　山田宗吉

緑化功労賞　((社)広島県みどり推進機構)

2007(平19)年10月21日

広島県体育功労賞　(広島県体育協会)

年度	氏名	年度	氏名
1963(昭38)年	市川恒治郎	1986(昭61)年	鈴木康仁
1965(昭40)年	大村徳一	1990(平 2)年	小土井薫計
1968(昭43)年	山田宗吉	2006(平18)年	福原不二雄

社会体育振興功労賞　(福山市体育協会)

1989(平 1)年　福山山岳会

福山市体育功労賞　(福山市体育協会)

年度	氏名	年度	氏名
1971(昭46)年	佐々木喜代三	1990(平 2)年	越智君子
1972(昭47)年	竹井修一郎	1991(平 3)年	藤井繁
1973(昭48)年	堀章夫	1993(平 5)年	天野暢夫
1974(昭49)年	山田義人	1994(平 6)年	福原不二雄
1975(昭50)年	三好壽雄	1995(平 7)年	河崎忠昭
1976(昭51)年	河原田俊雄	1996(平 8)年	平田浩
1978(昭53)年	藤井雅人	1997(平 9)年	黒飛晴光
1980(昭55)年	立花鶴雄	1998(平10)年	坂本豊
1983(昭58)年	高橋久夫	1999(平11)年	山内充人
1985(昭60)年	鈴木康仁	2000(平12)年	池田敏美
1986(昭61)年	加藤哲英	2001(平13)年	金山正
1987(昭62)年	萩原有朋	2002(平14)年	木村富枝
1988(昭63)年	福山山岳会	2003(平15)年	佐藤律夫
1988(昭63)年	小土井薫計	2004(平16)年	世良元
1989(平 1)年	土井健司	2005(平17)年	三藤敬子

村上カヨ記念基金による善行表彰　(福山市)

1972(昭47)年	藤井与一右衛門	山田宗吉
1975(昭50)年	立花鶴雄	
1993(平 5)年	萩原有朋	
1995(平 7)年	藤井雅人	

(財)日本体育協会・(社)日本山岳協会　公認指導者

上級指導者　小土井薫計　山内充人　黒飛晴光
福原不二雄　萩原有朋

指導者　越智修三　佐藤宇源　越智君子

日本山岳協会審判員

中央審判員　鈴木康仁　小土井薫計　藤井洋行　福原不二雄

広島県山岳連盟役員

副会長　福原不二雄
参与　鈴木康仁　小土井薫計　高橋久夫
萩原有朋　坂本豊
スタッフ　山本逸男　村上眞理　三藤敬子

福山市体育協会役員

理事　福原不二雄
体育指導員　川西成美

自然保護観察指導員・(社)日本自然保護協会

佐藤宇源　小土井薫計　越智君子
福原不二雄　赤松勇二　石井裕子
山本逸男　溝部幸恵　村上博満
門田敏昭　森山睦子　江種幸男
原田千枝子　佐藤茂利雄　相原和幸
久保充　三好利宏　久保敏
三藤敬子　中川省吾　岩室政俊

平成5(1993)年 例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
2985	1月 1日～	新年初登山　蔵王山	三谷　富貴子	36
	1月 1日～ 1月 2日	石鎚山	小土井　薫計	5
2988	1月 3日～	象頭山	佐藤　宇源	23
	1月10日～	白滝山	金山　正	15
2989	1月17日～	洞山	萩原　有朋	17
2990	1月24日～	竜泉寺山	藤井　正義	18
	1月30日～ 1月31日	大山	福原　不二雄	4
	2月 7日～	熊ケ峰	河崎　忠昭	21
2993	2月11日～	臼木山	萩原　有朋	16
2994	2月14日～	第74回草創記念　緑陽公園	平田　浩	40
2995	2月21日～	鴨方竜王山	榎本　正信	8
	2月28日～	鷲尾城跡　摩訶衍寺山	熊野　正	12
2997	3月 7日～	大谷山	平松　携	2
2998	3月 7日～	烏ヶ山	佐藤　明子	10
	3月14日～	大山	佐伯　喜信	7
	3月21日～	極楽寺山	金山　正	33
3001	3月28日～	宮島弥山	高山　時子	12
	4月 4日～	甲山　観音山	萩原　有朋	23
3003	4月11日～	田島一周　内浦山	橘高　熙	9
3004	4月18日～	平成5年度総会　経ヶ丸山	越智　君子	48
3005	4月24日～ 4月25日	三瓶山　山開き	三藤　敏照	17
	4月30日～ 5月 5日	槍ヶ岳　穂高岳	藤井　繁	6
	5月 3日～ 5月 4日	後山	萩原　有朋	12
3007	5月 9日～	三原竜王山	金山　正	10
	5月16日～	呉天応烏帽子岩(A班)	藤井　キヨ子	3
	5月16日～	絵下山(B班)	萩原　有朋	13
	5月23日～	臼木山(3000回達成記念登山)	小土井　薫計	113
	5月29日～ 5月30日	伊吹山　三輪山	福原　不二雄	9
3012	6月 6日～	柏餅ハイキング　熊野町	越智　君子	37
3013	6月13日～	鉢ヶ峰　鳴滝山	金山　正	14
3014	6月20日～	鷹ノ巣山	佐藤　宇源	19
3015	6月27日～	中国自然歩道(三原)	藤井　正義	28
3016	7月 4日～	阿伏兎山森林自然公園ハイキング	三谷　富貴子	23
3017	7月11日～	瑠璃山	熊野　正	29
3018	7月18日～	山野峡	榎本　正信	39
3019	7月22日～ 7月25日	針ノ木岳	萩原　有朋	11
3021	7月25日～ 7月29日	双六岳　三俣蓮華岳　野口五郎岳	橘高　熙	1
	8月 8日～	神島	萩原　有朋	20
	8月11日～ 8月16日	穂高岳	藤井　繁	6
3024	8月15日～	頭崎山	平田　浩	3
	8月22日～	高見川(沢登り)	佐藤　明子	7
	8月22日～	善防山　笠松山	萩原　有朋	30
3027	8月28日～ 8月29日	高見山	高山　時子	17
	9月 5日～	雪彦山	天野　暢夫	32

回数	月・日	山名	リーダー	人数
	9月12日～	大山	佐伯　喜信	10
3029	9月14日～ 9月15日	岩樋山　道後山	黒飛　晴光	21
	9月19日～	大谷山	三藤　敏照	34
3031	9月23日～ 9月24日	船上山　三仏寺	萩原　有朋	14
3032	9月26日～	灰が峰	平松　携	5
	10月 3日～	藤ヶ丸山	小土井　薫計	14
	10月11日～	第4回比婆山国際スカイラン	萩原　有朋	25
	10月17日～	馬乗山	河崎　忠昭	30
3037	10月24日～	倉敷ハイキング	橘高　熙	17
	10月31日～	備中松山城	坂本　豊	21
	11月14日～	観音山(生口島)	越智　君子	18
	11月21日～	男鹿山　女鹿山	福原　不二雄	5
	11月27日～11月28日	第29回県登山体育大会　冠山	萩原　有朋	15
3043	11月28日～	カントリーウォーク　石槌山　弘法山	藤井　正人	23
3042	12月 5日～	黒滝山　白滝山	金山　正	33
3043	12月12日～	星居山	天野　暢夫	11
	12月19日～	清掃登山　蔵王山	小土井　薫計	44
	12月23日～	須磨アルプス	萩原　有朋	29

平成6(1994)年 例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3046	1月 1日～	新年初登山　蔵王山	三谷　富貴子	30
3047	1月 3日～	恵方詣登山　吉備津神社	藤井　雅人	6
3048	1月 9日～	岩国山　城跡	金山　正	36
3049	1月16日～	篁山	三藤　敏照	24
	1月23日～	白滝山	河崎　忠昭	20
	1月30日～	筆影山	小土井　薫計	27
3052	2月 6日～	鳴滝山	平田　浩	21
3053	2月13日～	阿部山　竹林寺　遥照山	榎本　正信	17
	2月20日～	第75回草創記念　堂々公園	河崎　忠昭	52
	2月26日～ 2月27日	大山冬山技術講習会	福原　不二雄	16
3056	2月27日～	奥山　青影山	熊野　正	39
3057	3月 4日～ 3月 5日	比婆山　スキーツアー	黒飛　晴光	2
3058	3月12日～	第7回瀬戸内倉敷ツーデーマーチ(30K)	天野　暢夫	3
	3月12日～ 3月13日	第7回瀬戸内倉敷ツーデーマーチ(15K)	三谷　富貴子	20
3059	3月13日～	神島一周	福原　不二雄	23
3060	3月20日～	六甲山	萩原　有朋	31
3061	3月27日～	大将軍山　銭壺山	高山　時子	20
	4月 3日～	雲辺寺山	天野　暢夫	45
	4月10日～	岩室観音　菅町しだれ桜	坂本　豊	27
3064	4月17日～	平成6年度総会登山　緑陽公園	萩原　有朋	53
3065	4月24日～	鳴滝山	平松　携	7
3066	4月29日～ 5月 1日	大山	福原　不二雄	10
3067	4月30日～ 5月 1日	星山　櫃ヶ山	萩原　有朋	8
3068	5月 8日～	岡山県立森林公園	佐藤　律夫	10

回数	月・日	山名	リーダー	人数
	5月22日～	大谷山	橘高　熙	16
3070	5月22日～	蔵王岩山	藤井　キヨ子	5
3071	5月29日～	大山（追悼登山）	小土井　薫計	136
	6月　5日～	柏餅ハイキング　沼南アルプス	越智　君子	38
3073	6月12日～	竜泉寺ダム　御調八幡縦走	金山　正	6
	6月19日～	応神山	榎本　正信	16
3075	6月26日～	鷲尾城跡　摩訶衍寺山	上原　寿美子	38
3076	7月　3日～	竜泉寺山	妹尾　操	23
	7月10日～	竜王山	熊野　正	14
3078	7月17日～	仙酔島一周	山内　充人	9
3079	7月23日～ 7月24日	比婆山	藤井　洋行	7
3080	7月24日～	彦山	天野　暢夫	16
3081	7月27日～ 7月30日	八ヶ岳	萩原　有朋	12
3082	7月31日～	経小屋山	木村　富枝	10
3083	8月　7日～	蔵王岩山	藤井　キヨ子	11
3084	8月20日～ 8月21日	高見山	三藤　敏照	8
3085	8月21日～	大万木山	黒飛　晴光	11
3086	8月27日～ 8月28日	山野峡（B班）	萩原　有朋	16
	8月28日～	山野峡（A班）	石井　芳男	10
3087	9月11日～	高見山	高山　時子	13
3088	9月18日～	八丈岩山	橘高　熙	17
3089	9月25日～	吾妻山	萩原　有朋	29
3090	10月　2日～	亀ヶ岳	三好　利宏	16
3091	10月　9日～	篁山	平田　浩	12
3092	10月16日～	白鳥山	金山　正	32
	10月23日～	五色台	萩原　有朋	15
	10月30日～	比婆山	河崎　忠昭	26
3097	11月13日～	観音山	越智　君子	8
3098	11月20日～	鉢ヶ峰　鳴滝山	熊野　正	21
3099	11月27日～	蛇円山	門田　敏昭	21
3099	12月　4日～	熊ヶ峰	榎本　正信	26
3100	12月11日～	大谷山	平松　携	10
3101	12月18日～	清掃登山　蔵王山	上原　寿美子	57
	12月23日～	大文字山	萩原　有朋	39
	12月25日～	白旗山	萩原　有朋	14

平成7（1995）年 例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
	1月　1日～	新年初登山　蔵王山	小土井　薫計	50
3107	1月　8日～	蔵王岩山	藤井　キヨ子	7
	1月　8日～	高御位山	妹尾　操	17
3108	1月15日～	牛田山	三藤　敏照	22
3109	1月29日～	福山市内登山	田中　安雄	8
3111	2月　5日～	大峰山　鳴滝山	高山　時子	34
	2月19日～	第76回草創記念　緑陽公園	小土井　薫計	57

回数	月・日	山名	リーダー	人数
	2月25日～ 2月26日	道後山	山内　充人	4
3115	2月26日～	栂の丸山	石井　芳男	15
	3月　5日～	熊ヶ峰	坂本　豊	34
	3月12日～	鉾取山	門田　敏昭	5
	3月19日～	七宝山	萩原　有朋	27
3119	3月21日～	琴石山　三ヶ岳	金山　正	29
3120	3月26日～	宮島弥山	三好　行平	9
3122	4月　2日～	頭崎山	平田　浩	7
3123	4月　9日～	古鷹山　術科学校	木村　富枝	30
	4月16日～	平成7年度総会登山　遥照山	小土井　薫計	51
	4月23日～	白馬山	佐藤　宇源	5
	5月　3日～	臼木山	萩原　有朋	21
3128	5月　5日～	那岐山	佐藤　律夫	7
3129	5月　7日～	中国自然歩道	平松　携	15
	5月21日～	比婆山	河崎　忠昭	28
3132	5月27日～ 5月28日	常隆寺山　先山	藤井　洋行	2
3133	5月28日～	曽場ヶ城山	天野　暢夫	20
	6月　4日～	柏餅ハイキング　グリーンライン	越智　君子	27
3133	6月11日～	応神山　立石山	三好　利宏	29
3135	6月25日～	真鍋島	上原　寿美子	29
	7月　2日～	清掃登山　篁山	萩原　有朋	22
	7月　7日～ 7月11日	屋久島縦走	天野　暢夫	7
3137	7月　9日～	大坊古墳　寒水寺	上原　寿美子	22
3138	7月16日～	秋葉山	橘高　熙	20
3139	7月19日～ 7月23日	上高地	三藤　敏照	7
3140	7月23日～	黒滝山　白滝山	熊野　正	11
3142	7月29日～ 7月30日	石鎚山	藤井　キヨ子	9
3142	7月30日～	帝釈峡	佐藤　宇源	11
3143	8月　5日～ 8月　8日	富士山	金山　正	15
3144	8月　6日～	三倉岳	藤井　繁	1
	8月　6日～	三段峡	萩原　有朋	18
3146	8月13日～	篁山	平田　浩	8
3147	8月20日～	星居山　（マラニック）	山内　充人	3
	8月26日～ 8月27日	高見山	三藤　敏照	18
	9月　2日～ 9月　3日	比良山縦走　（Aコース）	福原　不二雄	23
	9月　2日～ 9月　3日	比良山縦走　（Bコース）	萩原　有朋	17
3150	9月　3日～	羽高湖	橘高　熙	9
	9月　9日～ 9月10日	山野峡	小土井　薫計	81
	9月17日～	大峰山	木村　富枝	43
	10月　9日～	月見会　蔵王山	萩原　有朋	15
3156	10月10日～	大弥山	桒田　立男	11
3157	10月14日～10月15日	星居山	黒飛　晴光	9
	10月15日～	岳山	三好　利宏	27
	10月22日～	第6回比婆山国際スカイラン	萩原　有朋	27
3160	10月29日～	福盛寺　柏観音	高山　時子	27
3158	11月　3日～	中蒜山	三好　行平	10

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3159	11月　5日～	木之上城山	越智　君子	17
	11月11日～11月12日	第31回広島県登山フェスティバル　東郷山	小土井　薫計	10
	11月19日～	馬乗山	河崎　忠昭	29
	11月23日～	八田原ダムウォーク	天野　暢夫	23
3163	11月26日～	休山	世良　元	22
3164	12月　2日～12月　3日	アイゼン祭り　蔵王岩山	藤井　繁	30
3165	12月10日～	鳶ノ巣山	佐藤　律夫	21
3166	12月17日～	清掃登山　蔵王山	上原　寿美子	58
	12月23日～	笠形山	萩原　有朋	27
3168	12月24日～	膳棚山	佐藤　宇源	11

平成8(1996)年　例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3169	1月　1日～	新年初登山　蔵王山	小土井　薫計	57
3170	1月　3日～	恵方詣登山　象頭山	藤井　雅人	21
3171	1月　7日～	瀑山	平田　浩	16
3172	1月14日～	龍王山	橘高　熙	7
3173	1月15日～	中国自然歩道	平松　携	15
	1月21日～	吾妻山	山内　充人	27
	1月28日～	京の上山	河崎　忠昭	27
	2月　4日～	灰ヶ峰	世良　元	17
	2月10日～　2月12日	大山冬山講習会	福原　不二雄	6
3177	2月11日～	朝日山	三好　利宏	21
3179	2月18日～	比婆龍王山	藤井　繁	12
3180	2月25日～	第77回草創記念　堂々公園	小土井　薫計	57
	3月　3日～	龍王山	萩原　有朋	40
	3月　9日～　3月10日	瀬戸内倉敷ツーデーマーチ	小土井　薫計	4
	3月10日～	熊山	門田　敏昭	17
3186	3月20日～	浄土寺山　千光寺山	熊野　正	41
3187	3月24日～	大山	藤井　繁	7
	3月24日～	三濃山	萩原　有朋	16
3189	3月30日～　3月31日	高野山	金山　正	31
	4月　1日～　4月　4日	熊野古道（滝尻～湯の峯）	田中　安雄	15
	4月　7日～	白木山	三藤　敏照	10
3190	4月14日～	平成8年度総会登山　蛇円山	小土井　薫計	58
3191	4月21日～	岩室観音	坂本　豊	36
3192	4月28日～　4月29日	第32回広島県登山フェスティバル三倉岳	天野　暢夫	12
	5月　3日～	阿部山　竹林寺山	萩原　有朋	13
3194	5月　4日～　5月　5日	赤石山系縦走	坂本　豊	12
3195	5月　6日～	蛇円山　（春の花観察会）	小土井　薫計	27
3197	5月12日～	東郷山	三好　行平	11
3198	5月20日～	琴引山	桒田　立男	32
	5月26日～	東赤石山	木村　富枝	46
3199	6月　2日～	鳴滝山	高山　時子	23
3200	6月　9日～	鉢ヶ峰　大平山　米田山	金山　正	12

回数	月・日	山名	リーダー	人数
	6月16日～	柏餅ハイキング　沼南アルプス	河崎　忠昭	33
	6月18日～　6月21日	九重山　大船山	小土井　薫計	6
3203	6月23日～	県岳連清掃登山　筆影山	上原　寿美子	34
3204	6月30日～	比婆山	藤井　繁	17
3205	6月30日～	曽場ヶ城山	佐藤　律夫	11
	7月　7日～	萱野山	小土井　薫計	24
3207	7月14日～	大谷山	平松　携	43
3208	7月21日～	帝釈峡	世良　元	23
3209	7月26日～　7月29日	熊野古道（大雲・小雲取り越え）	田中　安雄	9
3210	7月27日～　7月28日	愛宕山　保津川下り	金山　正	19
3211	7月27日～　7月28日	石鎚山	藤井　繁	6
3212	8月　1日～　8月　3日	立山縦走	坂本　豊	10
3213	8月　4日～	大山	萩原　有朋	20
3214	8月11日～	三段峡	桒田　立男	16
	8月18日～　8月21日	尾瀬　至仏山　燧ヶ岳	小土井　薫計	8
	8月24日～　8月25日	高見山	三藤　敏照	19
3217	9月　1日～	野呂山　弘法大師堂	平田　浩	20
	9月　2日～　9月　5日	北アルプス縦走（常念岳・蝶ヶ岳）	天野　暢夫	8
3220	9月15日～	泉山	三好　行平	21
	9月22日～	羽高湖	河崎　忠昭	38
3222	9月29日～	沼隈半島一周	藤井　洋行	23
3223	10月　6日～	神峰山	三好　利宏	23
3224	10月13日～	鳴滝山	熊野　正	28
	10月24日～	月見会　蔵王山	河崎　忠昭	22
3226	10月26日～10月27日	比婆山	藤井　繁	9
	10月27日～	岩樋山　道後山	坂本　豊	25
	11月　3日～	石鎚山	榎本　正信	17
	11月10日～	竜王山	坂本　豊	48
3230	11月17日～	米見山	佐藤　宇源	14
	11月23日～	伊良谷山	越智　君子	28
	11月23日～11月24日	星居山	山内　充人	16
	11月24日～	白滝山	高山　時子	32
3233	12月　1日～	アイゼン祭り　蔵王岩山	藤井　繁	31
3234	12月　8日～	大山	藤井　繁	6
	12月　8日～	黒滝山　白滝山	佐藤　律夫	19
	12月15日～	清掃登山　蔵王山	河崎　忠昭	54
3237	12月22日～	遥照山	上原　寿美子	46

平成9(1997)年　例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
	1月　1日～	新年初登山　蔵王山	小土井　薫計	52
	1月　3日～	恵方詣りハイク	藤井　雅人	28
	1月　5日～	宮島弥山	萩原　有朋	36
3241	1月12日～	八尾山	世良　元	23
	1月17日～　1月19日	大山	福原　不二雄	2

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3243	1月19日～	大峰山	平松　携	23
3244	1月19日～	府中市健脚大会	橘高　熙	10
	1月26日～	吾妻山スキーツアー	黒飛　晴光	28
3246	2月　2日～	七国見山	河崎　忠昭	36
3248	2月　9日～	鉢ヶ峰	木村　富枝	50
3249	2月11日～	中国自然歩道（加茂ルート）	三藤　敏照	17
3250	2月16日～	鉾取山	門田　敏昭	9
3251	2月23日～	第78回草創記念（後山展望台）	萩原　有朋	73
	3月　1日～　3月　2日	比婆山連山	黒飛　晴光	5
3253	3月　2日～	鴨方竜王山	萩原　有朋	26
	3月　8日～	瀬戸内ツーデーマーチ	天野　暢夫	25
3255	3月　9日～	熊ヶ峰	坂本　豊	23
3256	3月16日～	鳴滝山　鉢ヶ峰　大平山	平田　浩	21
3257	3月20日～	烏ヶ山	藤井　繁	10
3258	3月20日～	武田山	三藤　敏照	17
3259	3月23日～	六甲山	萩原　有朋	37
3260	3月30日～	鞍馬山	金山　正	55
3261	3月30日～	臥牛山	三好　行平	11
3262	4月　1日～　4月　4日	熊野古道	田中　安雄	8
	4月　5日～　4月　6日	万葉の山旅　芋峠　青根ヶ峰	福原　不二雄	33
3265	4月13日～	平成9年度総会登山　みろくの里	小土井　薫計	57
3266	4月20日～	竜王山	高山　時子	18
	4月26日～　4月27日	三瓶山	三藤　敏照	13
3268	4月27日～	白滝山	熊野　正	39
	5月　4日～	観音山	上原　寿美子	31
3270	5月11日～	冠山	桒田　立男	16
3271	5月11日～	筆影山	榎本　正信	23
3273	5月18日～	野呂山	平松　携	15
3274	5月25日～	神峰山	佐藤　律夫	14
3274	5月30日～　6月　1日	九重山	藤井　繁	9
3276	6月　1日～	高倉山	佐藤　宇源	21
3277	6月　8日～	柏餅ハイキング　グリーンラインキャンプ場	越智　君子	44
3278	6月17日～	灰ヶ峰	門田　敏昭	13
3279	6月22日～	和気冨士　神ノ上山	木村　富枝	38
	6月29日～	吾妻山	河崎　忠昭	26
3281	7月　6日～	篁山	平田　浩	19
3282	7月20日～	蓮華山	金山　正	31
	8月　3日～	鯉が窪湿原	藤井　キヨ子	35
3285	8月　5日～　8月　8日	熊野古道	田中　安雄	10
3286	8月　5日～　8月　9日	槍ヶ岳	橘高　熙	3
3287	8月10日～　8月13日	白馬岳	久保　充	6
3291	8月12日～　8月17日	穂高屏風岩	藤井　繁	2
3289	8月17日～	鳴滝山	金山　正	25
3290	8月22日～　8月24日	木曽御岳	坂本　豊	10
3291	8月23日～　8月24日	高見山	三藤　敏照	17
3292	8月31日～	夕立受山	萩原　有朋	52

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3293	9月12日～　9月14日	大台ヶ原　大杉谷	萩原　有朋	26
3295	9月14日～	神島一周	藤井　洋行	23
	9月15日～	山野峡　コース作り	萩原　有朋	14
3296	9月21日～	奥山　青影山	熊野　正	31
	9月23日～	山野峡　コース作り	萩原　有朋	17
	9月28日～	那岐山	小土井　薫計	22
	9月28日～	赤坂ふれ愛ランド	金山　正	45
3299	10月　4日～	烏ヶ山	橘高　熙	13
	10月　4日～	山野峡（Aコース作り）	福原　不二雄	7
	10月10日～	山野峡（各コース作り）	萩原　有朋	22
	10月12日～	山野峡（Bコース作り）	天野　暢夫	27
3303	10月19日～	大山	坂本　豊	29
3304	11月19日～	熊山	三好　行平	31
	11月25日～	比婆山	藤井　繁	16
3306	11月26日～	平家山	木村　富枝	20
3307	11月　1日～11月　3日	二ツ岳　東赤石山	越智　修三	3
	11月　2日～	応神山　虚空茂山	萩原　有朋	26
	11月　9日～	高妻山	三好　利宏	25
	11月16日～	御領大石山	越智　君子	25
	11月22日～11月23日	第33回広島県登山フェスティバル山野峡	萩原　有朋	69
	11月30日～	熊ヶ峰	榎本　正信	46
3313	12月　7日～	アイゼン祭り 蔵王岩山	藤井　繁	17
3316	12月14日～	極楽寺山	佐藤　宇源	25
	12月21日～	清掃登山　蔵王山	河崎　忠昭	79
	12月23日～	摩耶山	萩原　有朋	48
	12月28日～	大山（三鈷峰）	福原　不二雄	6
3320	12月31日～　1月　1日	剣山　次郎岌	山内　充人	4

平成10（1998）年　例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
	1月　1日～	新年初登山　蔵王山	萩原　有朋	73
3321	1月　3日～	蛇円山	藤井　雅人	28
	1月　4日～	恵方詣登山　紫雲出山	萩原　有朋	4
	1月15日～	道後山	福原　不二雄	13
3326	1月18日～	第25回府中市健脚大会	橘高　熙	7
3327	2月　1日～	鉢ヶ峰	木村　富枝	39
3331	2月15日～	亀ヶ岳	江種　幸男	35
	2月22日～	第79回草創記念　後山展望台	萩原　有朋	70
	2月28日～　3月　1日	氷ノ山	福原　不二雄	5
3334	3月　1日～	黒滝山　白滝山	清水　順子	27
3333	3月　1日～	野呂山	門田　敏昭	16
3333	3月　7日～　3月　8日	氷ノ山	黒飛　晴光	6
3336	3月　8日～	中国自然歩道	平松　携	43
	3月21日～	菊水山	萩原　有朋	31
3339	3月22日～	剣山	佐藤　宇源	18

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3340	3月28日～ 3月29日	高野山	金山　正	20
3342	3月31日～ 4月 3日	天城山縦走	田中　安雄	20
3343	4月 5日～	伊良谷山	三好　行平	14
3344	4月 6日～ 4月 9日	阿蘇山　釈迦院　矢山岳	橘高　熙	5
3345	4月12日～	平成10年度総会登山　虚空蔵山	萩原　有朋	76
3346	4月19日～	鉾取山	久保　充	18
	4月19日～	新高山城跡　女王滝	天野　暢夫	32
3348	4月25日～ 4月26日	恐羅漢山　十方山	三藤　敏照	9
3349	4月25日～ 4月26日	武奈ヶ岳	小土井　薫計	6
	4月26日～	男鹿山・女鹿山	福原　不二雄	34
	5月 3日～	石鎚山	萩原　有朋	54
	5月 1日～ 5月 5日	白山	山内　充人	4
3354	5月 5日～	尾道三山　浄土寺山その他	熊野　正	47
3355	5月10日～	鉢ヶ峰　鳴滝山	平松　携	24
3357	5月17日～	中国自然歩道（竜泉寺ダム～御調八幡）	三好　利宏	24
3356	5月23日～	船通山	橘高　熙	4
	5月24日～	比婆山	河崎　忠昭	27
3359	5月31日～	鳶ガ巣山	越智　君子	36
3361	6月 7日～	比婆山連峰縦走	江種　幸男	27
3362	6月 7日～	柏餅作り山行　グリーンラインキャンプ場	越智　君子	32
3363	6月14日～	龍王山	三藤　敏照	21
3364	6月28日～	和気富士　神ノ上山	佐藤　律夫	28
3365	7月 4日～	花見山	橘高　熙	12
3366	7月 5日～	柏観音	萩原　有朋	25
3367	7月 5日～	山野峡	福原　不二雄	14
	7月12日～	京ノ上山	河崎　忠昭	25
	7月26日～	経ヶ丸山	萩原　有朋	13
3371	7月27日～ 7月31日	甲斐駒ヶ岳　仙丈ヶ岳	橘高　熙	3
	7月28日～ 8月 1日	早池峰山　秋田駒ヶ岳	小土井　薫計	8
3373	7月29日～ 8月 2日	裏銀座縦走	坂本　豊	5
3374	8月 2日～	朝日山	門田　敏昭	8
3374	8月 9日～	三段峡	萩原　有朋	26
	8月12日～ 8月16日	奥穂高岳	福原　不二雄	5
	8月20日～ 8月23日	韓国岳その他	橘高　熙	3
	8月23日～	最勝が峰	金山　正	23
3377	8月29日～ 8月30日	高見山	三藤　敏照	19
3378	8月30日～	赤目四十八滝	世良　元	33
3379	9月 6日～	大峰山	三好　利宏	26
3380	9月13日～	三平山	三好　行平	11
	9月15日～	高増山	萩原　有朋	17
3382	9月20日～	道後山	河崎　忠昭	19
3383	9月23日～	木ノ上城山	越智　君子	16
	9月25日～ 9月27日	蛇円山	藤井　洋行	6
3385	9月26日～ 9月27日	親善交流合同登山　蛇円山	江種　幸男	17
	10月 3日～	月見会　蔵王山	萩原　有朋	28
	10月10日～	大山	福原　不二雄	6

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3387	10月10日～	銅山峰	木村　富枝	27
3388	10月11日～	鳴滝山	高山　時子	22
	10月18日～	鷲尾山城跡　摩訶衍山	熊野　正	10
	10月24日～	第34回県登山フェスティバル　恐羅漢山	萩原　有朋	4
3390	10月24日～10月25日	赤石山系　浦山川	谷坂　治行	5
3391	10月25日～	比婆山	河崎　忠昭	31
3394	11月 1日～	平家山縦走	木村　富枝	25
3395	11月 8日～	蛇円山	江種　幸男	30
3396	11月15日～	猫山	佐藤　律夫	23
3398	11月29日～	野呂山	平田　浩	31
	12月13日～	夏霧山	萩原　有朋	25
	12月20日～	清掃登山　蔵王山	坂本　豊	84
3403	12月23日～	石鎚山	平松　携	28
	12月29日～ 1月 2日	甲斐駒ヶ岳　仙丈岳	山内　充人	7

平成11（1999）年　例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
	1月 1日～	蔵王山	萩原　有朋	67
3406	1月 3日～	恵方登山　備中高松稲荷	藤井　雅人	30
	1月 4日～	石鎚山	福原　不二雄	9
	1月10日～	白石島	坂本　豊	23
	1月15日～	鶏足山	萩原　有朋	5
	1月15日～ 1月17日	氷ノ山	福原　不二雄	5
3412	1月17日～	第26回府中市健脚大会	橘高　熙	13
	1月17日～	京ノ上山	河崎　忠昭	27
3414	1月31日～	男鹿山 女鹿山	門田　敏昭	16
3415	2月 7日～	吾妻山	山内　充人	28
3417	2月11日～	瀬戸田観音　中止	久保　充	0
	2月14日～	鉢ヶ峰	金山　正	54
3420	2月21日～	鷲峰山	三好　利宏	43
	2月28日～	第80回草創記念　葛城山　熊ヶ峰	福原　不二雄	110
	3月14日～	池坂山 蔵王山	天野　暢夫	33
	3月21日～	稲積山	萩原　有朋	20
3422	3月22日～	比婆山	佐藤　宇源	24
3423	3月28日～	白木山	金山　正	40
3424	3月28日～	宮島登山道整備	福原　不二雄	6
3424	4月 4日～	古鷹山	世良　元	39
	4月11日～	岩室観音 しだれ桜	坂本　豊	40
	4月18日～	三岳　793	萩原　有朋	44
3427	4月25日～	平成11年度総会登山　竜王山・緑陽公園	天野　暢夫	90
	5月 1日～ 5月 4日	白馬岳スキー登山	黒飛　晴光	4
	5月 1日～ 5月 5日	槍ヶ岳	福原　不二雄	6
3431	5月 2日～	御在所岳	坂本　豊	25
3432	5月 9日～	操山	佐藤　光恵	20
3433	5月13日～ 5月16日	坂本龍馬脱藩の道	田中　安雄	6

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3434	5月16日～	白滝山（因島）	熊野　正	31
3435	5月23日～	第10回比婆山国際スカイラン	江種　幸男	27
	5月28日～ 5月30日	九重山　黒岳	福原　不二雄	8
3437	5月30日～	白木山　押手山	三藤　敏照	15
3438	6月 6日～	宗箇山	福原　不二雄	6
3439	6月 6日～	福山グリーンライン	越智　君子	46
3440	6月13日～	白滝山　黒滝山	清水　順子	35
3441	6月20日～	灰ヶ峰	佐藤　律夫	5
3442	6月27日～	篁山	平田　浩	13
3443	7月 4日～	筆影山　葉田竜王山	石井　芳男	29
3445	7月11日～	下帝釈峡	福原　不二雄	14
3452	7月13日～ 7月15日	四国皇子渓谷（沢登り）	黒飛　晴光	6
3446	7月20日～	六甲山トエンティクロス	萩原　有朋	42
3447	7月24日～ 7月25日	奥三段峡（沢登り）	谷坂　治行	9
3448	7月25日～	蛇円山	河崎　忠昭	33
3449	7月26日～ 7月30日	剣岳・立山	橘高　熙	3
	7月28日～ 7月31日	北岳	小土井　薫計	13
3450	7月30日～ 8月 1日	木曾駒ケ岳　宝剣岳	坂本　豊	20
3451	8月 8日～	大万木山	福原　不二雄	30
3453	8月22日～	大峰山	世良　元	21
3454	8月23日～ 8月28日	南アルプス	橘高　熙	4
3455	8月28日～ 8月29日	恐羅漢山	坂本　豊	15
3456	8月29日～	馬乗山	河崎　忠昭	38
3457	9月 5日～	連華寺山	金山　正	45
3458	9月10日～ 9月12日	富士山	藤井　洋行	5
	9月11日～ 9月12日	男鹿山　女鹿山	福原　不二雄	30
3461	9月19日～	竜王山　千光寺	久保　充	44
3462	9月23日～	大谷山	溝部　幸恵	17
3463	9月25日～	下帝釈峡	福原　不二雄	16
3464	9月26日～	亀ヶ岳	三好　利宏	24
3464	10月 3日～	石鎚山　池坂山	江種　幸男	20
3465	10月10日～	白滝山（因島）	河崎　忠昭	28
3466	10月17日～	大山	坂本　豊	37
3467	10月24日～	武田山　火山	村上　侃	24
3468	10月31日～	比婆山	河崎　忠昭	39
3470	11月 3日～	正木山	門田　敏昭	7
3471	11月 7日～	青影山　奥山	熊野　正	19
3472	11月13日～11月14日	氷ノ山	黒飛　晴光	10
3473	11月14日～	上帝釈峡	佐藤　律夫	27
3474	11月21日～	平家山	木村　富枝	13
3475	11月28日～	鷲ヶ頭山	越智　君子	30
3477	12月12日～	石鎚山	平松　携	26
3478	12月19日～	清掃登山　蔵王山	坂本　豊	84

平成12（2000）年 例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3479	1月 1日～	新年初登山　蔵王山	萩原　有朋	67
3480	1月 3日～	恵方詣登山　妙見社	藤井　雅人	35
3481	1月 9日～	栂丸山　御嶽山	藤井　洋行	13
3482	1月 9日～	池坂山　蔵王山	河崎　忠昭	21
3483	1月15日～	金剛山	萩原　有朋	26
3484	1月16日～	平家谷	森山　睦子	21
3485	1月16日～	第27回府中健脚大会	橘高　照	5
3486	1月30日～	豪渓	小土井　薫計	13
3487	2月11日～ 2月12日	氷ノ山　高丸山	福原　不二雄	3
3488	2月11日～	鬼城山	由田　英子	28
3489	2月13日～	臥牛山	三好　利宏	35
3490	2月20日～	吾妻山	木村　テル子	26
3491	2月27日～	草創記念　葛城山　熊ヶ峰	河崎　忠昭	99
3492	3月 5日～	熊山	門田　敏昭	18
3493	3月18日～ 3月19日	藤原岳　伊吹山	萩原　有朋	26
3494	3月19日～	弥山	山田　弘	9
3495	3月26日～	極楽寺山	久保　充	25
3496	4月 2日～	高御位山	佐藤　光恵	18
3497	4月 9日～	連華寺山　高城山	金山　正	43
3498	4月15日～ 4月16日	万葉の山旅　高見山　音羽山	福原　不二雄	44
3499	4月23日～	平成12年度総会登山　遥照山	萩原　有朋	69
3500	4月30日～	鴨方竜王山	石井　芳男	20
3501	5月 3日～	笹ヶ峰	萩原　有朋	27
3502	5月 7日～	六甲全山縦走	江種　幸男	5
3503	5月11日～ 5月14日	熊野古道	田中　安雄	8
3504	5月13日～	鳴滝山　鉢ヶ峰	熊野　正	16
3505	5月14日～	新高山城跡	河崎　忠昭	29
3506	5月20日～ 21日	第11回比婆山国際スカイラン	坂本　豊	5
3506	5月21日～	第11回比婆山国際スカイラン　応援山行	河崎　忠昭	27
3507	5月28日～	金山（後山）	越智　君子	19
3508	6月 4日～	六甲全山縦走	江種　幸男	7
3509	6月11日～	柏餅山行　福山グリーンライン	越智　君子	32
3510	6月24日～	白滝山　黒滝山	金山　正	18
3511	7月 2日～	大峰山	世良　元	17
3512	7月 9日～	熊山	石井　芳男	23
3513	7月16日～	阿伏兎山	上原　寿美子	27
3514	7月19日～ 7月22日	北八ヶ岳	坂本　豊	26
3515	7月25日～ 7月29日	白山	小土井　薫計	7
3516	7月30日～	六甲山上逢山峡	萩原　有朋	27
3526	8月 6日～	白滝山（因島）	河崎　忠昭	11
3522	8月17日～	野呂山	門田　敏昭	23
3519	8月18日～ 8月20日	西穂高岳　奥穂高岳	福原　不二雄	5
3520	8月19日～	鳴滝山　大峰山	萩原　有朋	9
3521	8月20日～	頭崎山	佐藤　律夫	17

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3522	8月26日～	高見山	山内　充人	17
3523	8月27日～	曽場ヶ城山	三好　利宏	12
3524	9月　2日～　9月　3日	親善交流合同登山　びんご運動公園	福原　不二雄	37
3525	9月10日～	六甲連山　東おたふく山	溝部　幸恵	17
3527	9月22日～　9月24日	諭鶴羽山	藤井　洋行	4
3528	9月23日～	竹林寺山	萩原　有朋	6
3529	9月30日～	高見山	久保　充	14
3530	10月　1日～	塔ノ峰山	越智　君子	23
3531	10月　8日～	真鍋島	河崎　忠昭	15
3532	10月15日～	櫃ヶ山	村上　侃	28
3533	10月22日～	篁山	金山　正	22
3534	10月29日～	比婆山	江種　幸男	27
3535	11月　3日～	山桃の丘	萩原　有朋	16
3536	11月　5日～	宮島弥山	谷坂　治行	16
3537	11月12日～	御床山	福原　不二雄	5
3538	11月12日～	白滝山　黒滝山	清水　順子	20
3539	11月19日～	竜泉寺ダム	木村　富枝	34
3540	11月23日～11月25日	開聞岳　霧島連山	坂本　豊	24
3541	11月26日～	筆影山	熊野　正	13
3542	12月　2日～	大峰山　鳴滝山	平松　携	27
3543	12月　3日～	アイゼン祭り　蔵王山	藤井　繁	32
3544	12月17日～	清掃登山　蔵王山	坂本　豊	55
3545	12月29日～12月31日	爺ヶ岳　鹿島槍ヶ岳	山内　充人	5
3546	12月30日～　1月　1日	富士山	福原　不二雄	6

平成13（2001）年　例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3547	1月　1日～	新年初登山　蔵王山	萩原　有朋	37
3548	1月　3日～	恵方詣登山　（安国寺その他）	河崎　忠昭	28
3549	1月14日～	経小屋山	久保　充	22
3550	1月21日～	池阪山　蔵王山	世良　元	31
3551	1月28日～	道後山	福原　不二雄	19
3552	2月　4日～	神島	萩原　有朋	37
3553	2月　9日～　2月11日	大山	福原　不二雄	10
3554	2月11日～	蛇円山	由田　英子	30
3555	2月18日～	毛無山	黒飛　晴光	11
3556	2月18日～	白滝山　黒滝山	山田　弘	26
3557	2月25日～	第82回草創記念登山　要害山	河崎　忠昭	86
3558	3月　2日～　3月　4日	氷ノ山	黒飛　晴光	4
3559	3月11日～	観音山	久保　充	22
3560	3月18日～	笠形山	萩原　有朋	25
3561	3月20日～	鉾取山	門田　敏昭	16
3562	3月25日～	白峰寺	佐藤　光恵	25
3563	4月　1日～	絵下山	小土井　薫計	31
3564	4月　7日～	高御位山	金山　正	25

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3565	4月　8日～	大麻山	村上　侃	25
3566	4月15日～	鬼ノ城山	石井　芳男	23
3567	4月22日～	平成13年度総会登山　虚空蔵山	萩原　有朋	88
3568	5月　3日～　5月　4日	剣山　三嶺	萩原　有朋	27
3569	5月　6日～	亀ヶ岳	江種　幸男	25
3570	5月12日～	仙酔島一周	福原　不二雄	5
3571	5月13日～	和気冨士　神ノ上山	木村　富枝	19
3572	5月16日～　5月19日	熊野古道	斎藤　楠輔	6
3573	5月20日～	第12回比婆山国際スカイラン	河崎　忠昭	25
3574	5月26日～	鎌倉寺山	藤井　キヨ子	7
3575	6月　3日～	柏餅山行	越智　君子	27
3576	6月　9日～	白滝山　黒滝山	平松　携	13
3577	6月10日～	緑陽公園	石井　芳男	11
3578	6月17日～	馬乗山	河崎　忠昭	42
3579	7月　1日～	蔵王岩山	藤井　繁	13
3580	7月　7日～	鯉が窪湿原	藤井　キヨ子	11
3581	7月15日～	立石山	元広　稔	22
3582	7月18日～　7月21日	西穂高岳　乗鞍岳	萩原　有朋	22
3583	7月21日～　7月22日	第37回県登山フェスティバル　恐羅漢山	星田　純	10
3584	7月20日～　7月22日	石鎚山系	谷坂　治行	13
3585	7月22日～　7月28日	南アルプス（光・聖・赤石・悪沢岳）	村上　博満	3
3586	7月29日～	石鎚山	三好　利宏	11
3587	8月　4日～　8月　5日	伊吹山	佐藤　律夫	6
3588	8月　5日～　8月10日	雲ノ平	小土井　薫計	10
3589	8月12日～	下帝釈峡	福原　不二雄	9
3590	8月19日～	六甲山	藤田　昔三	20
3591	9月　2日～	野呂山	久保　充	18
3592	9月　8日～	奥三段峡	谷坂　治行	9
3593	9月　9日～	比叡山	村上　侃	42
3594	9月16日～	鴨方竜王山	元広　稔	21
3595	9月22日～	甲川沢登り	奥平　時治	4
3596	9月30日～	遥照山	上原　寿美子	26
3597	10月　7日～	男鹿山　女鹿山	佐藤　茂利雄	15
3598	10月　8日～	御嶽山	由田　英子	15
3599	10月14日～	王子ヶ岳	金山　正	28
3600	10月28日～	比婆山	河崎　忠昭	26
3601	11月　2日～11月　3日	氷ノ山　扇ノ山	萩原　有朋	20
3602	11月　4日～	神峰山	綿谷　弘志	12
3603	11月11日～	遥照山	山田　弘	14
3604	11月18日～	愛宕山	村上　侃	28
3605	11月23日～	蛇円山	江種　幸男	17
3606	11月25日～	尾道七仏めぐり	徳山　敦美	43
3607	12月　2日～	アイゼン祭り　蔵王岩山	藤井　繁	27
3608	12月　9日～	城山	河崎　忠昭	28
3609	12月16日～	清掃登山　蔵王山	三藤　敬子	72
3610	12月23日～	六甲山	原田　千枝子	36

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3611	12月24日～	秋葉山	小土井　薫計	19
3612	12月29日～ 1月 1日	奥穂高岳	山内　充人	5

平成14（2002）年 例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3613	1月 1日～	新年初登山　蔵王山	坂本　豊	45
3614	1月 3日～	恵方詣登山　池阪山	坂本　豊	18
3615	1月 3日～	宮島　弥山	松岡　洋子	35
3616	1月 6日～	鳴滝山　米田山	南　妙子	29
3617	1月13日～	河平連山	石井　裕子	37
3618	1月13日～	中蒜山	木村　三郎	16
3619	1月20日～	猫山	福原　不二雄	26
3620	1月27日～	灰ヶ峰	世良　元	15
3621	2月 3日～	中国自然歩道（山野 加茂ルート）	三藤　敬子	22
3622	2月 8日～ 2月10日	大山	清家　誠	10
3623	2月 9日～	鉢ヶ峰	金山　正	27
3624	2月17日～	吾妻山	坂本　豊	38
3625	2月24日～	第83回草創記念　緑陽公園	坂本　豊	81
3626	3月 3日～	中山連山	桑田　睦江	30
3627	3月10日～	熊山	門田　敏昭	21
3628	3月17日～	鉾取山	久保　充	29
3629	3月23日～	小豆島・星ヶ城山	綿谷　弘志	23
3630	3月24日～	青影山	佐藤　律夫	11
3631	3月31日～	神島一周	福原　不二雄	30
3632	4月 6日～	銭壺山	藤井　キヨ子	10
3633	4月 7日～	平成14年度総会登山　弥勒の里	坂本　豊	69
3634	4月13日～	積善山	石井　芳男	11
3635	4月14日～	竜泉寺ダム	金山　正	26
3636	4月17日～	熊野古道	斎藤　楠輔	7
3637	4月28日～	駅家の里歩き	河崎　忠昭	23
3638	5月 3日～	休山	世良　元	11
3639	5月 3日～	芦生の森	萩原　有朋	27
3640	5月11日～	鎌倉寺山	藤井　キヨ子	6
3641	5月18日～	中国自然歩道（上岩成）	佐藤　茂利雄	8
3642	5月19日～	第13回比婆山国際スカイラン	木村　富枝	30
3643	5月26日～	東赤石山	木村　三郎	21
3644	6月 1日～	鳴滝山	平松　携	11
3645	6月 2日～	柏餅作り山行	上原　寿美子	48
3646	6月 9日～	比婆山縦走	江種　幸男	34
3647	6月15日～	熊ヶ峰	川本　美弥子	24
3648	6月23日～	深堂山	元広　稔	24
3649	7月 7日～	蔵王岩山観音	藤井　繁	17
3650	7月 7日～	竜王山	渡辺　節子	20
3651	7月14日～	筆影山	久保　充	17
3652	7月19日～	加賀白山	小林　征三	5

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3653	7月19日～	鳳凰三山	南　妙子	29
3654	7月27日～	西種子川（沢登り）	奥平　時治	7
3655	8月 4日～	牛田山	石井　芳男	11
3656	8月11日～	若杉原生林	坂本　豊	21
3657	8月18日～	天応烏帽子山	門田　敏昭	16
3658	8月20日～	針ノ木岳	村上　博満	5
3659	8月25日～	大山（三鈷峰）	福原　不二雄	17
3660	9月 1日～	書写山	三好　利宏	14
3661	9月 8日～	道後山	赤松　勇二	17
3662	9月14日～	第38回登山フェスティバル	坂本　豊	33
3663	9月16日～	蓮華寺山	前田　悦子	20
3664	9月20日～	北穂高岳	槙　恵	6
3665	9月22日～	三瓶山	小林　文子	27
3666	9月29日～	神島	岩原　節子	28
3667	10月 6日～	岡山森林公園	斎藤　楠輔	28
3668	10月12日～	蔵王山（憩いの森）	萩原　有朋	26
3669	10月13日～	沙美海岸	藤井　和之	6
3670	10月26日～	池阪山	横手　洋子	16
3671	10月27日～	比婆山連峰	河崎　忠昭	26
3672	11月 2日～	鯖街道（根来峠）	綿谷　弘志	4
3673	11月 3日～	鳴滝山	久保　充	22
3674	11月 9日～	三倉岳	江種　幸男	27
3675	11月16日～	黒滝山	藤井　和之	12
3676	11月17日～	平家谷	石井　裕子	24
3677	11月23日～	爪ヶ城	木村　三郎	18
3678	11月24日～	宮島　弥山	松岡　洋子	26
3679	12月 1日～	アイゼン祭り　蔵王岩山	藤井　繁	18
3680	12月 8日～	熊山	綿谷　弘志	15
3681	12月15日～	清掃登山　蔵王山	三藤　敬子	78
3682	12月22日～	六甲山	原田　千枝子	19
3683	12月23日～	高鉢山	小土井　薫計	23

平成15（2003）年 例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3684	1月 1日～	新年初登山　蔵王山	坂本　豊	39
3685	1月 3日～	恵方詣登山　大弥山	河崎　忠昭	14
3686	1月 5日～	宮島　弥山	桑田　睦江	21
3687	1月19日～	七国見山	藤田　昔三	21
3688	1月26日～	東山	赤松　勇二	23
3689	2月 1日～	大山	槙　恵	11
3690	2月 2日～	蔵王山	横手　洋子	31
3691	2月 9日～	沼南アルプス	三藤　敬子	31
3692	2月11日～	比婆山	清家　誠	22
3693	2月16日～	鳴滝山	南　妙子	12
3694	2月22日～	竹林寺山	川本　美弥子	5

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3695	2月23日～	第84回草創記念　緑陽公園	坂本　豊	61
3696	3月　2日～	和気富士	星田　純	30
3697	3月　9日～	仙酔島　大弥山	小林　文子	33
3698	3月　9日～	摩耶山	原田　千枝子	19
3699	3月16日～	帝釈峡	渡辺　節子	10
3700	3月21日～	高鉢山	久保　充	15
3701	3月23日～	野貝原山	小土井　薫計	33
3702	3月30日～	天滝	萩原　有朋	36
3703	4月　2日～	熊野古道	斎藤　楠輔	7
3704	4月　5日～	積善山	渡辺　節子	8
3705	4月　6日～	平成15年度総会登山　弥勒の里	坂本　豊	62
3706	4月13日～	岩室観音	河崎　忠昭	11
3707	4月20日～	銀山街道	綿谷　弘志	24
3708	4月27日～	帝釈峡	三藤　敬子	7
3709	5月　2日～	剣山　三嶺　天狗塚	清家　誠	7
3710	5月　2日～	祖母山　傾山	小林　征三	7
3711	5月　3日～	由布岳　英彦山	萩原　有朋	36
3712	5月　3日～	桜山　竜王山　筆影山	佐藤　茂利雄	11
3713	5月　4日～	吾妻山　烏帽子山	妹尾　英明	11
3714	5月18日～	第14回比婆山国際スカイラン	河崎　忠昭	27
3715	5月23日～	久住山	南　妙子	7
3716	5月31日～	二谷（沢登り）	清家　誠	12
3717	5月31日～	広島県登山体育大会　吉和	坂本　豊	9
3718	6月　8日～	柏餅作り山行	三藤　敬子	51
3719	6月14日～	三倉岳　瓦小屋山	佐藤　律夫	15
3720	6月15日～	毘沙門山　古高山　新高山	元広　稔	17
3721	6月22日～	福山城址	小林　文子	20
3722	6月29日～	鷲尾山城跡　摩訶衍山	前田　悦子	26
3723	7月　6日～	蔵王岩山	藤井　繁	9
3724	7月　6日～	大万木山	妹尾　英明	29
3725	7月13日～	ふれあいランド　勉強会	赤松　勇二	49
3726	7月20日～	福田頭	江種　幸男	24
3727	7月29日～	岩黒山　筒上山　手箱山	槙　恵	11
3728	8月　3日～	六甲山	藤田　昔三	12
3729	8月10日～	石鎚山	平松　携	14
3730	8月17日～	萱野山　蔵王山	佐藤　茂利雄	10
3731	8月24日～	東海自然歩道（箕面）	金山　正	27
3732	8月31日～	武奈ヶ岳	藤井　和之	21
3733	9月　7日～	鷲峰山	三好　利宏	11
3734	9月14日～	高見山	久保　充	15
3735	9月15日～	蒜山三座縦走	星田　純	21
3736	9月21日～	三瓶山	松岡　洋子	26
3737	10月　5日～	岡山森林公園	斎藤　楠輔	27
3738	10月12日～	英彦山　宝満山	萩原　有朋	17
3739	10月13日～	玉峰山	妹尾　英明	27
3740	10月19日～	櫃ヶ山	村上　侃	27

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3741	10月19日～	桜山　象山　米田山	元広　稔	7
3742	10月25日～	巨樹の里　三嶺	綿谷　弘志	41
3743	10月26日～	大山	木村　三郎	12
3744	11月　2日～	比婆山連峰	河崎　忠昭	26
3745	11月　9日～	八田原ダム	世良　元	5
3746	11月15日～	岩岳山	徳山　敦美	16
3747	11月16日～	蛇円山	江種　幸男	17
3748	11月23日～	黒髪山	佐藤　茂利雄	11
3749	11月30日～	御嶽山　四尋山	藤井　和之	27
3750	12月　7日～	アイゼン祭り　蔵王岩山	藤井　繁	28
3751	12月13日～	王子ガ岳　新割山	金山　正	27
3752	12月14日～	熊山	門田　敏昭	12
3753	12月21日～	清掃登山　蔵王山	赤松　勇二	55
3754	12月23日～	六甲山　ゴロゴロ岳	原田　千枝子	26

平成16（2004）年　例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3755	1月　1日～	新年初登山　蔵王山	坂本　豊	42
3756	1月　3日～	恵方詣登山　蔵王山	横手　洋子	35
3757	1月　4日～	初詣登山　宮島弥山	江種　幸男	34
3758	1月10日～	高御位山	桑田　睦江	20
3759	1月18日～	十文字山	赤松　勇二	73
3760	1月25日～	鴨方龍王山	岩原　節子	40
3761	2月　1日～	瀬戸アルプス	南　妙子	36
3762	2月　6日～	冬山技術講習会　大山	槙　恵	16
3763	2月　8日～	亀ヶ岳	江種　幸男	40
3764	2月14日～	初心者雪山　比婆山	赤松　勇二	22
3765	2月21日～	経小屋山	石井　裕子	13
3766	2月22日～	第85回草創記念　緑陽公園	坂本　豊	68
3767	2月28日～	鷲尾山城址　摩訶衍山	徳山　敦美	32
3768	3月　7日～	男鹿山　女鹿山	門田　敏昭	19
3769	3月13日～	六甲山　西お多福山	原田　千枝子	12
3770	3月20日～	白木山	久保　充	17
3771	3月27日～	和気富士　神ノ上山	佐藤　茂利雄	19
3772	3月28日～	平家山鉄塔道	妹尾　英明	17
3773	4月　3日～	高野山町石道	斎藤　楠輔	16
3774	4月　4日～	宮島岩船山	小林　征三	14
3775	4月11日～	平成16年度総会登山　竜王山（福山市）	坂本　豊	55
3776	4月18日～	成羽天神山	三藤　敬子	26
3777	4月24日～	大山蒜山サイクリング	木村　三郎	9
3778	4月25日～	羽高湖	江種　幸男	30
3779	5月　2日～	東赤石山　西赤石山	妹尾　英明	27
3780	5月13日～	天城越え	綿谷　弘志	18
3781	5月22日～	背振山　三郡山	萩原　有朋	19
3782	5月23日～	第15回比婆山国際スカイラン　Dコース	江種　幸男	25

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3783	5月30日～	白滝山　黒滝山	南　妙子	15
3784	6月12日～	天応烏帽子岩山	小林　征三	21
3785	6月13日～	柏餅作り山行	三藤　敬子	60
3786	6月19日～	行者山　傘山	石井　裕子	15
3787	6月20日～	竹林寺篁山	小林　文子	22
3788	6月27日～	男鹿山　女鹿山	佐藤　茂利雄	5
3789	7月　4日～	蔵王岩山	藤井　繁	14
3790	7月11日～	頼兼山	元広　稔	28
3791	7月17日～	石鎚山（福山市）	平松　携	12
3792	7月24日～	広高谷（沢登り）	奥平　時治	5
3793	7月25日～	小野アルプス	金山　正	20
3794	8月　7日～	大万木山　琴引山	妹尾　英明	13
3795	8月22日～	仙酔島　大弥山	綿谷　弘志	21
3796	8月28日～	面河渓（沢歩き）	谷坂　治行	11
3797	9月　5日～	鬼ノ城山	江種　幸男	15
3798	9月12日～	竹林寺　遥照山	佐藤　茂利雄	27
3799	9月18日～	比婆山	赤松　勇二	14
3800	9月19日～	浄土寺山　西国寺山	元広　稔	12
3801	9月26日～	大山	星田　純	21
3802	10月　3日～	呉婆々宇山	渡辺　節子	13
3803	10月11日～	竜王山（三原市）	徳山　敦美	24
3804	10月17日～	青影山　奥山	佐藤　律夫	12
3805	10月24日～	灰ヶ峰	世良　元	19
3806	10月31日～	観音山	久保　充	14
3807	11月　6日～	曾場ヶ城山	前田　悦子	15
3808	11月　7日～	剣山　一ノ森	佐藤　律夫	19
3809	11月14日～	高増山	小林　征三	15
3810	11月21日～	鳶ヶ巣山	星田　純	17
3811	11月28日～	鴨方龍王山	藤井　和之	21
3812	12月　5日～	アイゼン祭り　蔵王岩山	藤井　繁	19
3813	12月12日～	熊山	門田　敏昭	12
3814	12月19日～	清掃登山　蔵王山	川西　成美	45
3815	12月23日～	六甲最高峰	原田　千枝子	26

平成17（2005）年　例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3816	1月　1日～	新年初登山　蔵王山	坂本　豊	28
3817	1月　3日～	恵方詣登山　妙見山	川西　成美	41
3818	1月　8日～	登山道整備　彦山	萩原　有朋	12
3819	1月　9日～	宮島弥山	桑田　睦江	28
3820	1月16日～	十文字山	赤松　勇二	43
3821	1月23日～	大谷山	平松　携	16
3822	1月30日～	七国見山	藤田　昔三	8
3823	2月　5日～	岳連冬山講習　大山	槙　恵	5
3824	2月　6日～	摩訶衍山	徳山　敦美	32

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3825	2月11日～	蔵王山	横手　洋子	27
3826	2月12日～	初心者雪山講座　比婆山	池尻　修康	31
3827	2月20日～	瀬戸アルプス	南　妙子	29
3828	2月27日～	第86回草創記念　緑陽公園	坂本　豊	77
3829	3月　5日～	比婆山冬山研修	星田　純	5
3830	3月　5日～	中国自然歩道（加茂）	相原　和幸	5
3831	3月　6日～	中国自然歩道（御調八幡）	三好　利宏	12
3832	3月11日～	蒜山三山縦走	原田　千枝子	9
3833	3月12日～	高御位山	川本　美弥子	11
3834	3月21日～	鉾取山	久保　充	17
3835	3月27日～	我拝師山	渡辺　節子	17
3836	4月　3日～	象頭山 大麻山	藤田　昔三	3
3837	4月10日～	平成17年度総会登山　弥勒の里	坂本　豊	80
3838	4月17日～	菅町しだれ桜	江種　幸男	29
3839	4月24日～	王子ガ岳	赤松　勇二	23
3840	4月29日～	休山	世良　元	25
3841	4月30日～	槍ヶ岳	小林　征三	7
3842	4月29日～	立山・黒部スキー	黒飛　晴光	3
3843	5月　3日～	大崩山	星田　純	11
3844	5月　8日～	鳴滝山	平松　携	15
3845	5月14日～	基山 若杉山	萩原　有朋	18
3846	5月15日～	猿政山	三藤　敬子	27
3847	5月22日～	第16回比婆山国際スカイラン　Dコース	綿谷　弘志	17
3848	5月28日～	弥山	福原　不二雄	5
3849	6月　5日～	尾道三山	久保　敏	39
3850	6月12日～	柏餅作り山行	三藤　敬子	32
3851	6月18日～	船通山	石井　裕子	31
3852	6月19日～	岳山	三好　利宏	22
3853	6月26日～	彦山	池尻　修康	32
3854	7月　2日～	神島一周	福原　不二雄	28
3855	7月10日～	岳山	佐藤　茂利雄	41
3856	7月15日～	白峰三山縦走	久保　敏	12
3857	7月23日～	裏匹見峡	黒飛　晴光	28
3858	7月23日～	極楽寺山	佐藤　律夫	43
3859	7月31日～	ふれ愛ランドの森	小林　征三	16
3860	8月　7日～	六甲山	藤田　昔三	8
3861	8月12日～	剣岳　立山連峰	山本　逸男	5
3862	8月21日～	氷ノ山	藤井　和之	32
3863	8月26日～	滑床渓谷（沢歩き）	小林　征三	27
3864	8月28日～	真鍋島　（城山）	上原　寿美子	31
3865	9月　4日～	匹見二ノ谷	奥平　時治	10
3866	9月　4日～	日浦山	佐藤　茂利雄	8
3867	9月17日～	萩往還・東鳳翩山　右田ヶ岳	綿谷　弘志	18
3868	9月18日～	彦山	赤松　勇二	17
3869	9月23日～	野呂山	久保　敏	15
3870	9月25日～	大江山	萩原　有朋	25

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3871	10月 2日～	鉢ヶ峰	金山　正	11
3872	10月 9日～	高見山	妹尾　英明	17
3873	10月16日～	阿伏兎観音	池尻　修康	17
3874	10月21日～	剣山 三嶺	江種　幸男	3
3875	10月30日～	ふれ愛ランドの森	小林　征三	80
3876	11月 3日～	市民ウォーキング	小林　征三	29
3877	11月 5日～	甲ヶ山　船上山	福原　不二雄	23
3878	11月12日～	比婆山	綿谷　弘志	25
3879	11月13日～	高妻山	藤井　和之	7
3880	11月20日～	絵下山	世良　元	3
3881	11月23日～	笹ヶ峰縦走	木村　三郎	11
3882	11月27日～	天狗城山	溝部　幸恵	15
3883	12月11日～	熊山	門田　敏昭	18
3884	12月11日～	白木山　押手山	久保　敏	27
3885	12月18日～	清掃登山　蔵王山	藤田　昔三	17
3886	12月23日～	六甲山	原田　千枝子	5
3887	12月29日～	八ヶ岳	山内　充人	9

平成18(2006)年 例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3888	1月 1日～	新年初登山　蔵王山	赤松　勇二	31
3889	1月 3日～	恵方詣登山　大麻山	江種　幸男	32
3890	1月 8日～	宮島弥山	桑田　睦江	32
3891	1月15日～	行者山　傘山	橋本　博明	26
3892	1月21日～	葛城山登山道整備	本田　靖二	14
3893	1月22日～	県民の森スキー	大田　祐介	20
3894	1月28日～	臼木山	岩室　政俊	32
3895	1月29日～	東山	村上　眞理	11
3896	2月 3日～	大山冬山研修	槙　惠	9
3897	2月11日～	瀬戸アルプス	南　妙子	38
3898	2月12日～	筆影山　葉田龍王山	佐藤　律夫	16
3899	2月19日～	白滝山　黒滝山	平松　携	18
3900	2月19日～	市民ウォーキング	赤松　勇二	45
3901	2月25日～	平家山鉄塔道縦走	妹尾　英明	32
3902	2月26日～	第87回草創記念　緑陽公園	福原　不二雄	39
3903	3月 4日～	大峰山　竜王山	山本　逸男	10
3904	3月 5日～	櫃ヶ山	木村　三郎	7
3905	3月 5日～	屋島　五剣山	瀬良　悦男	38
3906	3月11日～	大山	小林　征三	10
3907	3月12日～	天狗山	橋本　博明	4
3908	3月19日～	極楽寺山	久保　敏	22
3909	3月19日～	六甲山	原田　千枝子	10
3910	3月23日～	山桃の里登山道整備	萩原　有朋	17
3911	3月26日～	鷹ノ巣山　カンノキ山	渡辺　節子	27
3912	4月 8日～	宗箇山	渡辺　節子	14

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3913	4月 9日～	平成18年度総会登山　弥勒の里	福原　不二雄	77
3914	4月15日～	柳生街道	綿谷　弘志	21
3915	4月15日～	大山(登山技術研修)	小林　征三	11
3916	4月23日～	大万木山	小林　征三	34
3917	4月30日～	道後山と桜	江種　幸男	27
3918	5月 2日～	祖母山　傾山　大崩山	福原　不二雄	10
3919	5月13日～	平尾台　福智山	萩原　有朋	13
3920	5月20日～	山野峡登山道整備	村上　眞理	4
3921	5月21日～	ふれ愛ランドの森	平松　携	16
3922	5月21日～	第17回比婆山スカイラン応援ツアー	江種　幸男	7
3923	5月27日～	神峰山	石井　裕子	17
3924	5月28日～	陶ヶ岳　火の山　亀山	橋本　博明	25
3925	6月 3日～	宮島一周	福原　不二雄	10
3926	6月 4日～	東広島天文台　福成寺	三好　利宏	13
3927	6月 4日～	稲叢山	木村　三郎	7
3928	6月11日～	柏餅作り山行　ふれ愛ランド	原田　千枝子	46
3929	6月17日～	神島一周	妹尾　英明	28
3930	6月18日～	彦山　登山道整備	本田　靖二	13
3931	7月 2日～	中国自然歩道	佐藤　茂利雄	5
3932	7月 8日～	市民ウォーキングリハーサル	小林　征三	37
3933	7月16日～	登山道整備	萩原　有朋	10
3934	7月29日～	坂瀬谷　(沢歩き)	谷坂　治行	14
3935	8月11日～	後立山縦走	山本　逸男	5
3936	8月20日～	福田頭	川西　成美	45
3937	8月27日～	仙酔島一周	福原　不二雄	16
3938	9月 2日～	比叡山	藤井　和之	17
3939	9月10日～	剣山　貝殻山　八丈岩山	佐藤　茂利雄	3
3940	9月17日～	登山道整備	萩原　有朋	6
3941	9月21日～	北八ヶ岳縦走	妹尾　英明	16
3942	9月24日～	夏霧山	本田　靖二	16
3943	10月 8日～	野呂山	久保　敏	13
3944	10月14日～	登山道整備ウォーキングA	萩原　有朋	17
3945	10月15日～	合同登山　蛇円山	三藤　敬子	21
3946	10月21日～	大山　甲ヶ山	小林　征三	8
3947	10月22日～	彦山	池尻　修康	31
3948	10月28日～	下帝釈	藤谷　操枝	17
3949	10月29日～	高見山　白滝山	久保　充	16
3950	11月 3日～	石立山	木村　三郎	7
3951	11月 5日～	福山市民ウォーキング大会	小林　征三	69
3952	11月11日～	出雲神話街道　朝日山	綿谷　弘志	15
3953	11月18日～	御領大石山	藤井　和之	18
3954	11月23日～	馬鞍山　上土居山	瀬良　悦男	18
3955	11月25日～	万葉の山旅　春日山　三笠山　龍田越え	福原　不二雄	41
3956	12月 3日～	アイゼン祭り　蔵王岩山	小林　征三	20
3957	12月10日～	白木山　押手山	久保　敏	12
3958	12月16日～	大平山	門田　敏昭	11

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3959	12月17日～	清掃登山　蔵王山	世良　元	67
3960	12月22日～12月24日	石鎚山　瓶ヶ森	原田　千枝子	6
3961	12月28日～12月31日	徳本峠	黒飛　晴光	4

平成19（2007）年 例会山行一覧表

回数	月・日	山名	リーダー	人数
3962	1月　1日～	新年初登山　蔵王山	赤松　勇二	33
3963	1月　7日～	宮島弥山	江種　幸男	24
3964	1月13日～	雪上訓練　大山元谷	山内　充人	9
3965	1月20日～	河平連山	石井　裕子	27
3966	1月21日～	吾妻山・ドルフィンバレイ	大田　祐介	11
3967	1月26日～	冬山技術研修　大山	槙　恵	5
3968	1月28日～	葛城山・熊ヶ峰	岩室　政俊	41
3969	2月　3日～	要害山・山王山・黄葉山	三藤　敬子	19
3970	2月　4日～	市民ウォーキング　比婆山	福原　不二雄	36
3971	2月10日～	高山城跡・新高山城跡	小林　浩二	18
3972	2月11日～	瀬戸アルプス	妹尾　英明	31
3973	2月25日～	草創記念　緑陽公園	福原　不二雄	95
3974	3月　3日～	権現山	溝部　幸恵	14
3975	3月　4日～	白峰山・五色台	瀬良　悦男	21
3976	3月11日～	六甲　荒地山	原田　千枝子	22
3977	3月18日～	行者山	渡辺　節子	17
3978	3月21日～	登山道整備　高増山	萩原　有朋	21
3979	3月31日～	天狗城山・絵下山	世良　元	23
3980	4月　1日～	窓ヶ山～向山	久保　敏	16
3981	4月　7日～	六甲山（西お多福山～有馬三山）	原田　千枝子	10
3982	4月　7日～	佐伯天神山～神ノ上山	山足　幸子	4
3983	4月　8日～	高御位山	南　妙子	21
3984	4月14日～	登山道整備　竜泉寺山	福原　不二雄	12
3985	4月15日～	総会登山　弥勒の里	福原　不二雄	67
3986	4月21日～	白石島　立石山	石井　裕子	22
3987	4月28日～	堂ヶ森～石鎚山～平家平	小林　浩二	14
3988	5月　2日～	立山	山内　充人	11
3989	5月12日～	安芸小富士・下高山	湯越　道江	13
3990	5月13日～	十方山	川西　成美	27
3991	5月13日～	三徳山・二保山・皆ヶ山	高橋　康一	10
3992	5月18日～	黒岳　久住山	福原　不二雄	13
3993	5月19日～	黒髪山・虚空蔵山	萩原　有朋	14
3994	5月26日～	石見銀山遺跡	木村　三郎	8
3995	6月　2日～	べんがらの町　吹屋	高橋　康一	7
3996	6月　3日～	白滝山～大師山	橋本　博明	25
3997	6月　9日～	登山道整備　熊ヶ峰	萩原　有朋	9
3998	6月10日～	柏餅山行　ふれ愛ランド	石井　裕子	47
3999	6月16日～	牛曳山～比婆山	江種　幸男	13
4000	6月17日～	八世以山・中倉山	佐藤　茂利雄	8

回数	月・日	山名	リーダー	人数
4001	6月17日～	初心者沢登り　龍頭峡	小林　征三	26
4002	6月30日～	登山道整備　後山	萩原　有朋	14
4003	7月15日～	蔵王山一周	妹尾　英明	35
4004	7月28日～	沢登り　浦石峡	奥平　時治	4
4005	8月　5日～	四国の道　箸蔵寺	石岡　勝吉	17
4006	8月12日～	岳山	池尻　修康	5
4007	8月18日～	富士山　記念登山	平松　携	20
4008	8月25日～	熊ヶ峰　記念登山	小林　征三	79
4009	9月　1日～	仙酔島一周	橋本　博明	9
4010	9月　2日～	須磨アルプス	岩室　政俊	7
4011	9月　9日～	芦田川リバーサイドウォーク	佐藤　茂利雄	7
4012	9月15日～	龍頭峡・馬乗観音	高橋　康一	12
4013	9月16日～	観音山	久保　敏	10
4014	9月23日～	新高山城跡	佐藤　律夫	10
4015	9月30日～	鬼の舌震い・玉峰山	高橋　康一	36
4016	10月　5日～	奥穂高岳・涸沢の紅葉を見る	福原　不二雄	13
4017	10月　6日～	三千院～比叡山	藤井　和之	13
4018	10月　7日～	登山道整備　阿伏兎山	萩原　有朋	8
4019	10月14日～	第5回　福山市民ウォーキング大会	福原　不二雄	55
4020	10月20日～	第6回ひろしま「山の日」県民の集い	村上　眞理	53
4021	10月27日～	大野城跡　宝満山～砥石山	小林　浩二	10
4022	10月28日～	天応烏帽子岩山～天狗城山	久保　敏	13
4023	10月28日～	塔ノ丸～丸笹山	木村　三郎	7

※1993年（平成5年）5月23日に発行された「はいまつ」3000回達成記念誌に掲載された以後の記録です。
※登山回数未記入部分は事務局に保管されている記録を忠実に記したものです。

表紙題字　川西 貞子
表紙イラスト　岩室 彬
本文中イラスト　岩室 彬・櫛田 清・湯越 道江
本文中絵画　木村 テル子
本文中版画　越智 君子

写真提供
石井 裕子・岩原 節子・岩室 節子・江種 幸男・大野 一夫・河崎 忠昭・黒飛 晴光・斎藤 楠輔
佐藤 茂利雄・鈴木 康仁・妹尾 英明・瀬良 悦男・高垣 隆光・中島 典美・平松 携・綿谷 弘志

（五十音順）

編集後記

第4000回登山記念号の発刊にあたり、福山市長はじめ関係各位の皆様から貴重な原稿、資料、写真、版画、絵画など多くのご投稿を賜り衷心より御礼申し上げます。
本当に有難う御座いました。

編集に先立ち、わが会の事務局に保管されている膨大な資料を紐解いた時、偉大な諸先輩の方々が山を愛し、福山山岳会を愛し、凛々しく山行されている姿が髣髴と眼に浮かぶ思いが致しました。わが会草創以来の素晴らしい伝統と歴史が正しく連綿と継承され、第4000回登山達成の偉業が成し遂げられた事を実感しました。又、いままで発行された「はいまつ」「コースガイド80」「ちんぐるま」等々、会の出版物を編集された先輩諸氏の労苦と真摯な姿勢に改めて襟を正す思いが致しました。

今回の編集は14年振りの「はいまつ」と「第4000回登山記念号」とを併せたものであり、編集、校正作業等の経験も知識も無い私にとっては、余りにも荷が重く何度も行き詰まりましたが、編集委員の方々の懸命な支えを頂き又、多くの会員の方々の暖かいアドバイスや激励を頂戴して発刊に辿り着く事が出来ました。この場をお借りまして皆様にあらためてお礼を申し上げます。

本書の出版にあたっては中国宣伝企画（株）の杉野勝氏がご尽力して下さいました。
心から感謝いたします。

綿谷弘志

はいまつ 第12号
4000回達成記念

印刷発行　2007年12月25日
発行責任者　福原 不二雄
編集委員長　綿谷 弘志
編集委員　石井 裕子　上原 寿美子　大野 一夫
小野 美佐子　高垣 隆光　平松 携
村上 眞理　湯越 道江

発行所　福山山岳会 事務局
広島県福山市北本庄町2丁目4番3号　TEL･FAX 084-926-1646

デザイン･編集　中国宣伝企画㈱･中国放送制作
広島県福山市東川口町2丁目1番18号 TEL 084-957-1010 FAX 084-957-1011

印刷所　まつざき印刷㈱
広島県福山市引野町北5丁目9番23号 TEL 084-941-2275 FAX 084-941-3228